

天理市埋蔵文化財調査概報

平成18(2006)年度

2011

天理市教育委員会



土坑SK108遺物出土狀況



土坑SK108出土鍛形石

例　　言

1. 本書は天理市教育委員会が平成18年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。平成18年度におこなった発掘調査は下表のとおりである。

平成18年度　発掘調査一覧

名 称	住 所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概 要
1 平等坊・岩室遺跡 第28次	平等坊町208他	宅地造成	460m ²	平成18. 5. 15 ～ 7. 15	青木 石田	弥生時代中後期：大溝、土坑、 井戸、自然道路など
2 成願寺遺跡 第14次	笠生町1095他	市道建設	100m ²	平成18. 6. 12 ～ 7. 18	北口	弥生時代中後期：溝など
3 頤興寺跡	和爾町629他	農業振興	144m ²	平成18. 7. 31	北口	奈良時代：掘立柱建物など
柳本庵跡遺跡 第11次	柳本町782他	個人住宅	27m ²	平成18. 8. 7 ～ 8. 24	石田	仁戸時代後期：石垣、自然道路など
4 平等坊・岩室遺跡 第29次	岩室町38他	区域整備	750m ²	平成18. 10. 10 ～19. 2. 11	青木	弥生時代初期～古墳時代前期： 大溝、土坑、井戸、自然道路など
5 合湯遺跡 第6次	西井戸家町405-1他	学校	310m ²	平成18. 10. 30 ～12. 15	北口 中堂：井戸	古墳時代後期：自然道路
6 平等坊・岩室北遺跡 第1次	荒縄町283-1他	ため池改修	430m ²	平成18. 11. 22 ～12. 26	石田	自然道路
7 平等坊・岩室遺跡 第30次	岩室町アタラシ223	施設障害	70m ²	平成19. 2. 19 ～ 3. 19	北口	磯、土坑

なお、柳本庵跡遺跡（第11次）、平等坊・岩室遺跡（第30次）については下記文献にて報告済である。

※ 天理市教育委員会(編) 2008『天理市文化財調査年報』平成18年度

2. 調査は天理市教育委員会文化財課文化財係が実施し、青木勘時（技術専員・現係長）、北口聰人（技術専員・現主任）、石田大輔（技術専員・現主任）がそれぞれの現地調査を担当した。

また、現地調査、遺物整理から本書の作成に至るまでに下記の幣理補助員、学生諸氏の御助力を得た。

芳村信芳、中森卓之介、中森富美代、河喜多淑子、藤間早紀、岩井真生、鈴木貴子

伊東山実（奈良大学卒業生）、今井和代（天理大学・現奈良女子大学人文学院）、

小野間智子（奈良教育大学・現筑波大学大学院）、柿本雅美、島田智子、中西宏昌、村下博美（天理大学）、

後藤愛弓（奈良女子大学・現奈良女子大学大学院）、福家恭（天理大学・現桜井市教育委員会）、

松本真並（天理大学卒業生）、松本弘吉（京都大学・現京都大学大学院）、

安原貴之（天理大学・現奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）（特定するものを除き所属は平成18年度当時のもの）

3. 本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田大輔が編集した。文責は各担当箇所の末尾に明示した。

目　　次

卷頭図版

例　　言

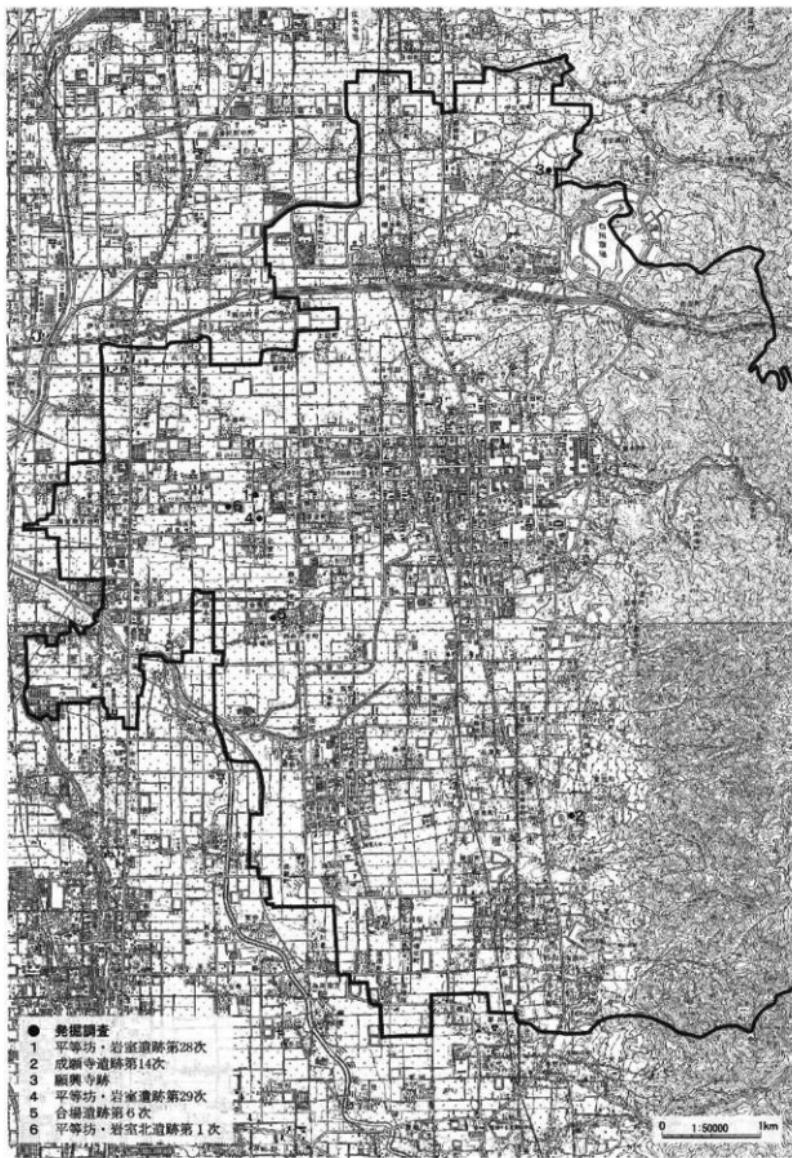
目　　次

平成18年度調査地点位置図

- 1. 平等坊・岩室遺跡（第28次）----- 石田大輔 1
- 2. 成願寺遺跡（第14次）----- 北口聰人 29
- 3. 頤興寺跡 ----- 北口聰人 42
- 4. 平等坊・岩室遺跡（第29次）----- 青木勘時 46
- 5. 合湯遺跡（第6次）----- 北口聰人 94
- 6. 平等坊・岩室北遺跡（第1次）----- 石田大輔 114

図　　版

抄　　録



平成18年度 調査地点位置図（本書に収録したもの）

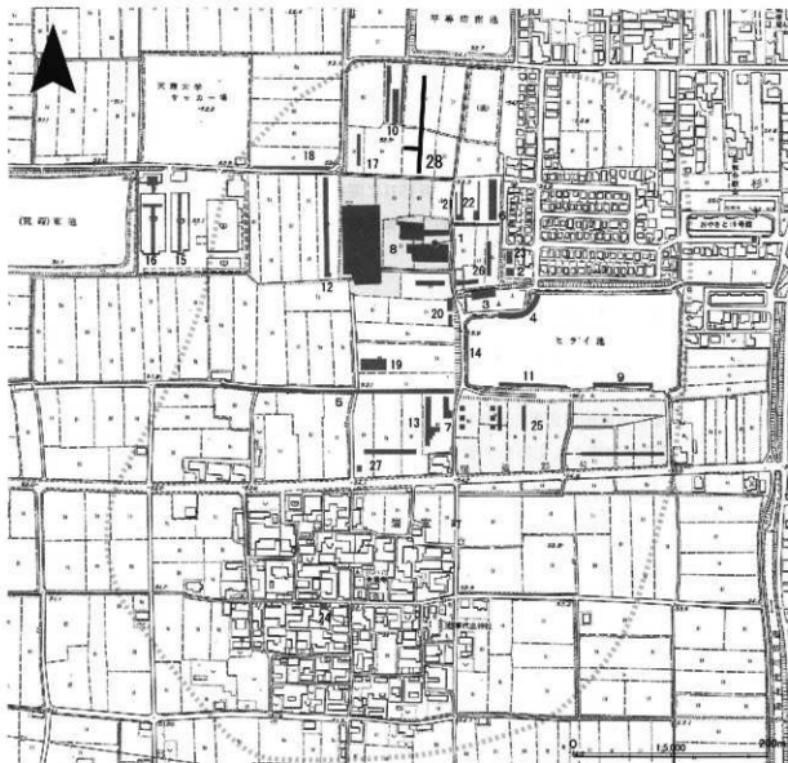
1. 平等坊・岩室遺跡（第28次）

I. はじめに

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代から古墳時代にかけての拠点集落遺跡である。地理的には盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成された扇状地下方に展開する沖積平野上に立地する。

遺跡の範囲は東西約400m、南北約600mと推定される（第1図）。これまでに遺跡北半部を中心に行なわれた発掘調査の成果により、弥生環濠集落の出現から終焉、あるいは古墳時代集落への移行に至るまでの集落変遷と動態が把握されつつある。

当遺跡においては、平成3（1991）年実施の第8次調査以降に宅地造成、店舗建設などの開発行為が相次ぎ、その景観を急激に変化させつつある。



第1図 調査地と既往の調査地点（第28次調査まで）

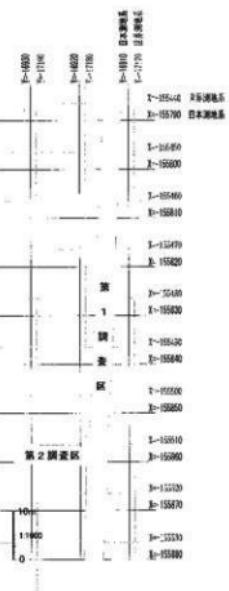
II. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

今回の第28次調査は、平等坊・岩室遺跡北部において民間の宅地造成事業が計画されたことに伴い実施した事前調査である。平成4年度に西側隣接地で天理市教育委員会がおこなった第10次調査の調査成果等から、今回の対象地にも遺構が多数存在することが予測された。そこで、宅地造成計画のうち道路予定地部分のみに限って調査対象とし、4m幅の調査区を設定することにした。

2. 調査の経過（第2図）

調査地では近年まで耕作がおこなわれていたが、今回の調査開始時点ではすでに休耕地となっていた。調査にあたっては、道路予定地内にその形状に合わせ南北方向に長さ100m、幅4mの第1調査区、東西方向に長さ15m、幅4mの第2調査区を設けた。まず、表土・耕作土を重機により掘削したのち、遺物包含層・遺構埋土を人力により掘削、排土はベルトコンベアにより排出して作業を進めた。調査は平成18年5月15日に開始し、7月15日にすべての作業を完了した。最終的な調査面積は460m²である。



第2図 調査区座標図

III. 層序・遺構

1. 層序（第3図）

第I層は表土、第II層は耕作土・床土で、第I・II層あわせて層厚40cm程度ある。第III層は黒褐色砂質土層を主体とする遺物包含層で層厚は厚いところで30cm程度あり、調査区内の全域に分布している。第III'層は黄褐色粘質土を主体とするしまりの強い土層で、地山面（第IV層）の下降する第I調査区南半にのみ分布している。第IV層は地山で、調査区北端では標高53m付近で検出されるが、南に向かって緩やかに下降し、調査区南端ではおよそ標高51.5m付近で検出される。

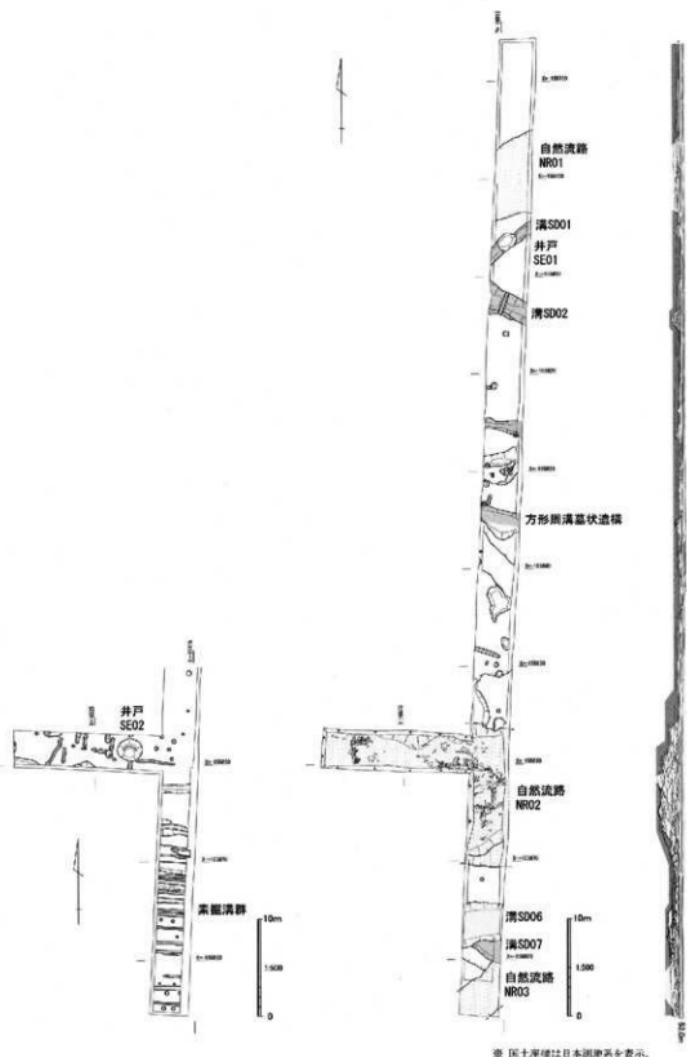
2. 遺構（第3図）

素掘溝群

調査区内の広い範囲において、第III層上面で耕作に伴う素掘溝群を検出した。また、第I調査区南半では第III層下の第III'層上面でも素掘溝群を検出した。第III層上面で検出した素掘溝群は南北方向が上体、第III'層上面で検出した素掘溝群は東西方向が主であった。

自然流路NRO1

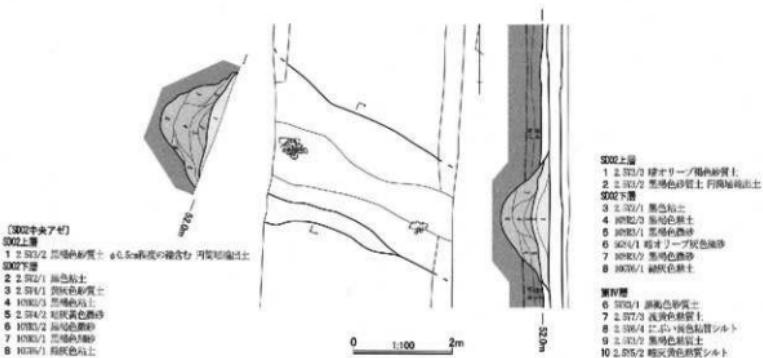
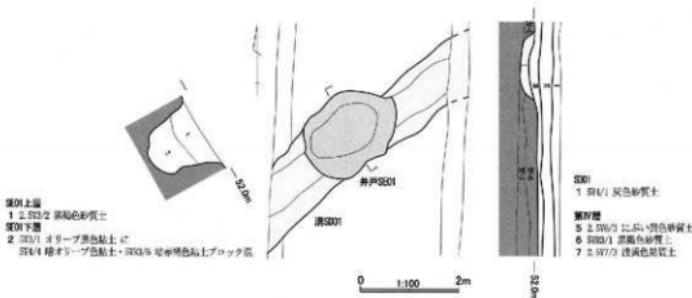
第IV層上面で砂層（にぶい黄色細砂層）の落ち込みを確認した。検出面での幅約9mを測る。確認のために深掘りをおこなったが、埋土に遺物は含まれていなかった。



第III・III'層上面の造構

第IV層上面の造構

第3図 調査区平面図・土層図

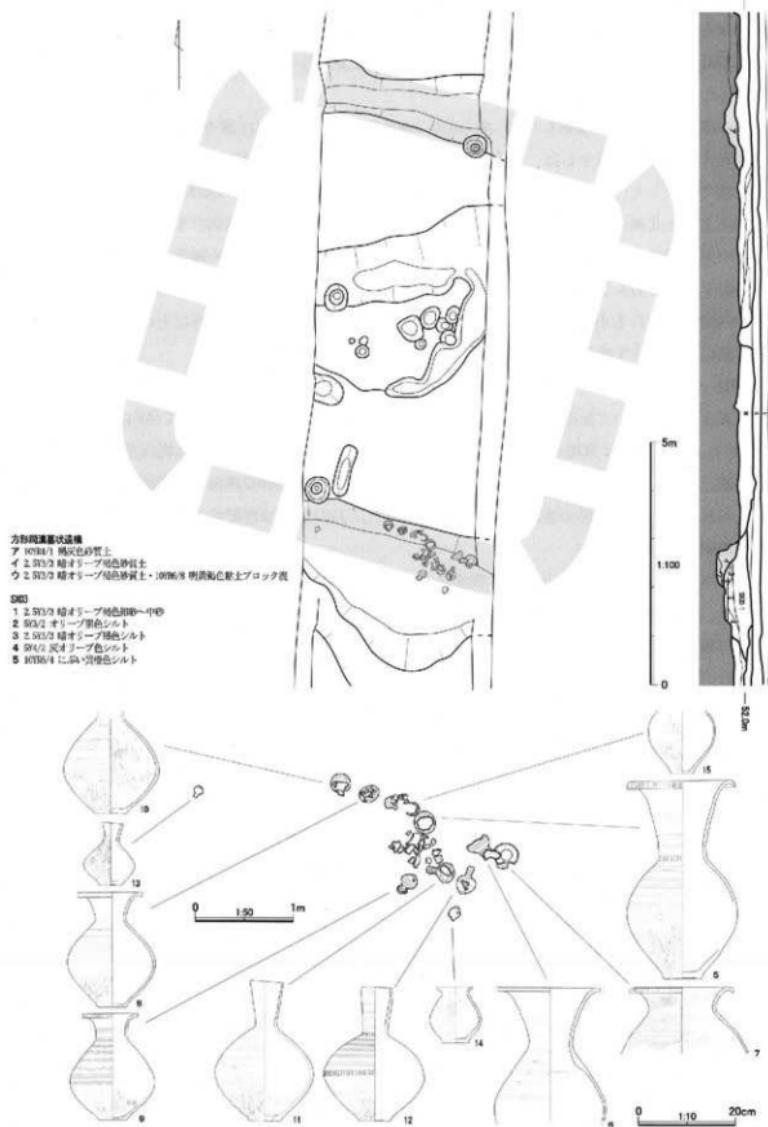


溝SD01・井戸SE01（第4図）

溝SD01は調査区北半の第IV層上面で検出した北東—南西方向の溝で、検出面での幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰色砂質土で遺物はほとんど認められなかった。井戸SE01は検出面で径約2m、検出面からの深さ約1.2mを測る井戸で、溝SD01北肩を壠す形で掘り込まれている。埋土上層は黒褐色砂質土、埋土下層は暗赤褐色粘土ブロックなどを含むオリーブ黒色粘土である。井戸枠等の痕跡は認められなかった。SE01埋土下層から弥生時代後期の直口壺1点が出土した。

溝SD02（第5図）

溝SD02は調査区北半の第IV層上面で検出した南東—北西方向の溝である。検出面での幅約2.4m、深さ約1.0mを測る。埋土上層は黒褐色砂質土であり、律令期の土器片とともに古墳時代後期の円筒埴輪2個体が出土した。円筒埴輪はいずれも原位置を保つものではなく、細片に分かれた状態である。近隣に古墳が存在したことが想定され、それが削平された際に混入したものと考えられる。SD02が古墳周濠である可能性もあるが、判断は保留しておく。埋土下層からは遺物が出土しておらず、溝の形成時期は不明である。



第6図 方形周溝墓状造構 平面図・土層図

方形周溝墓状遺構（第6図）

第1調査区の中央付近で東西方向の溝を2条検出した。南側の溝から完形品を多く含む弥生時代中期の上器群が出土した。土器群は11個体以上あり、出土状況からみて方形周溝墓に伴う可能性があると判断した。

北側の溝は検出面での幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。南側の溝は深さ約0.3mを測り、北岸から完形品を含む土器群が出土した。土器群は溝底からやや浮いた位置（第6図イ）で、南側に転倒したような状態で出土した。一方、南岸は第III層上面から掘り込まれた遺構（SX03）に破壊されている。断面観察によると北側の溝底は標高51.6m、南側の溝底は標高51.4mで南側がやや低かった。一辺約9m程度の方形周溝墓が想定されるが、東辺・西辺の周溝は調査区外のため確認できていない。墳丘は後世の削平により消失しているが、周溝内の埋土下層はもともと墳丘に由来する堆積の可能性もある。周溝の内側に見られる小規模な落ち込みや土坑は、墳丘の削平後に形成されたものであろう。出土した土器群の時期は弥生時代中期後葉に位置付けられる。

井戸SE02（第7図）

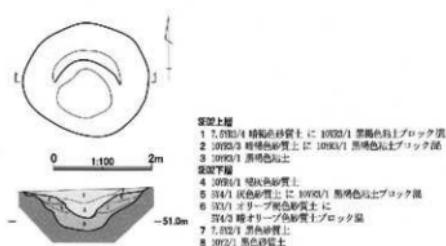
第2調査区内において後述する自然流路NR02上面で検出したもので、検出面で径約2.7m、深さ約1.0mである。埋土上層は黒褐色粘土ブロックが混ざる暗褐色砂質土層、下層は褐灰色～黒色の砂質土層である。上層、下層それぞれから瓦器碗が出土した。自然流路NR02埋没後に形成された井戸であると考えられるが、井戸枠等の施設は認められなかった。おおむね12世紀前半頃の時期を想定できる。

自然流路NR02（第8図）

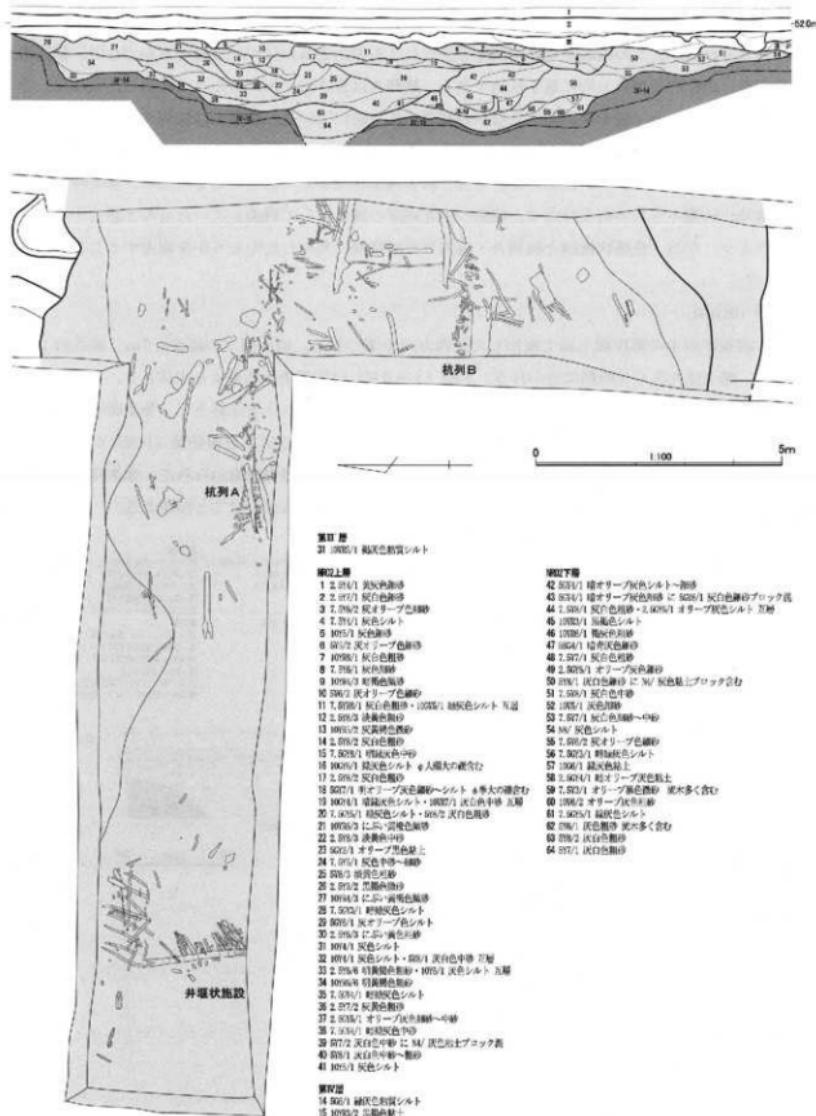
調査区南半で検出した東西方向の自然流路で、東から西に流下する。第1調査区内で南北両岸を確認したが、第2調査区は全域が流路の範囲内に含まれていた。NR02の規模は第1調査区内で幅約14m、最深部は検出面からの深さ1.9m以上を測る。河道内の南北両岸付近の河床は緑灰色シルト層、流路中央付近の河床は黒褐色粘土層である。第1調査区東壁沿いに深掘りをおこなって河床の検出に努めたが、作業の安全性を考慮して最深部の検出は断念した。

流路埋土は大きく二時期にわかれれる。NR02上層からは古墳時代終末期～奈良時代を中心とする土器類が出土した。また、NR02下層からは弥生時代後期～古墳時代前期の上器類が出土した。NR02下層の堆積後、北岸寄りに流路が形成されたとみられる（NR02上層）。NR02上層の埋没後に前述の井戸SE02が構築されており、流路の最終埋没時期は12世紀をくだらない。

流路内では、埋土下層の時期に対応するとみられる木杭等による構築物を多数検出した。井堰状施設は第2調査区西端付近で検出したもので、杭列によって南北方向の横木を固定する構造が観察できる。横木は径15cm、長さ2m以上の丸太であるが、調査区外につづくため全長は不明である。横木の東西両側には径5cm程度の断面円形の杭が密に打たれている。これらの杭の多



第7図 井戸SE02 平面図・土層図



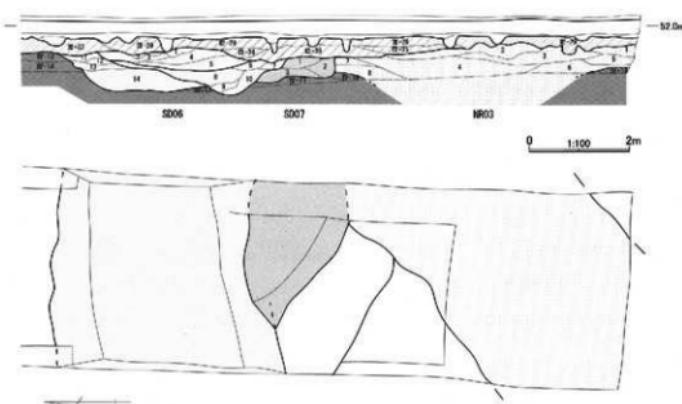
第8図 自然流路NR02 平面図・土層図

くは西側に向かって倒れかかるような状態で出土しており、流路上流に当たる東側からの水流の作用を受けたものとみられる。流路に対して横断方向に構築されていることから井堰の機能を有する可能性が考えられるが、この施設が単独で機能を果たしたものかどうかについては明らかでない。杭列A・杭列Bは流路内を東西方向に並ぶ杭列である。杭列Aは長さ約7mにわたって検出したもので、その配列は南に向かって緩やかに曲がりながら調査区外へ続いている。杭列Bは杭列Aの南側で長さ約2.5mにわたって検出したものである。杭列A・杭列Bは約4mの間隔で並んでおり。両者が厳密に同時期のものかどうか判断が難しいが、それぞれの構築状況がよく似ていることから、弥生時代後期～古墳時代前期のうちのある時点で、流路の南北両岸の護岸として機能していたものと想定することもできよう。なお、井堰状施設と杭列A・杭列Bが同時期に共存したかどうかを確定することはできなかった。

溝SD06 (第9図)

第1調査区南半の第IV層上面で検出した東西方向の溝である。検出面での幅約4.7m、深さ約1mを測る。埋土は大きく3時期に分かれ。上層(1～5層)は灰黃褐色粘質土を主体とし、古墳時代前期初頭～前半までの土器を含む。下層(6～10層)は灰色粘土～シルトを主体とし、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器を含む。また、溝北岸よりの最下層である灰白色粗砂層(14層)からは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土器が出土した。周辺における調査成果からみて、弥生時代後期末以降の環濠に相当するとみられ、再掘削(1～10層)により維持されていたことが窺える。

SD06		NR03	
1 1006/2 に伝る泥壁粘土質シルト	11 2.95/4 灰黄色砂質土	1 1006/2 灰黄色砂質土	29 2.85/3 灰黄色砂質土 しまり強い
2 1006/1 黄褐色粘土質シルト	2 2.95/2 他灰褐色粘土質地にシルト	2 2.55/1 黄白色粘土ワッカ質じり	30 1006/4 灰白色粘土 しまり強い
3 1006/1 黄褐色土	3 3.55/1 黄白色粘土	3 2.55/1 灰白色粘土ワッカ質じり	34 2.95/1 灰灰色粘土
4 1002/2 黑褐色粘土 褐・淡土含む	4 3.95/1 灰白色粘土	4 3.55/1 灰白色シルト	35 1002/2 灰褐色粘土
5 1001/2 黑褐色粘土混じり粘質土	5 5.95/1 灰白色シルト	5 5.95/1 灰白色シルト	36 2.95/3 灰褐色粘土
6 1006/1 黑褐色粘土混じり粘質土	6 9.95/1 灰白色シルト・隙間一部砂	6 9.95/1 灰白色シルト	37 2.95/4 オリーブ色粘土質土
7 2.55/1 黑褐色粘土混じり粘土	7 1005/2 灰褐色粘土ワッカ質じり粘質土	7 9.95/1 灰色粘土シルト	38 2.85/5 黒褐色粘土
8 3.55/1 灰色粘土	2 9.5/1 灰色粘土ワッカ質じりシルト	8 1006/1 灰色粘土シルト	39 1006/1 黑褐色粘土シルト
9 3.55/1 黑色粘土シルト	3 2.5/4/1 灰色粘土	9 5.5/1/2 灰色粘土	40 5.5/1/2 緑色粘土シルト
10 2.55/1 黄褐色粘土シルト			16 1006/1 黑色粘土



第9図 溝SD06・溝SD07・自然流路NR03 平面図・土層図

溝SD07（第9図）

第1調査区南半の第IV層上面で検出した。南東一北西方向に延びる溝で、北岸には前述の溝SD06が掘り込まれている。埋土上層はブロックの混じる粘質土、下層は黄灰色粘質土であり、弥生時代中期末から後期初頭にかけての上器を少量含む。後述する自然流路NR03埋設後に掘削されたものと考えられる。

自然流路NR03（第9図）

第1調査区南端の第IV層上面で検出した。流路上面に弥生時代後期～古墳時代前期前半の土器が出土する粘土ブロック混じりの砂層が堆積しており、これを覆土層（NR03-1～3層）として遺物の取り上げをおこなった。遺物が出土したのはこの覆土層のみで、確認のため深掘りをおこなったものの下層からは出土しなかった。このため覆土層の遺物はNR03本体の時期を反映しないと判断している。

切り合い関係からこの付近の造構変遷についてまとめる、自然流路NR03→溝SD07→溝SD06の順に推移したものとみられる。

IV. 出土遺物

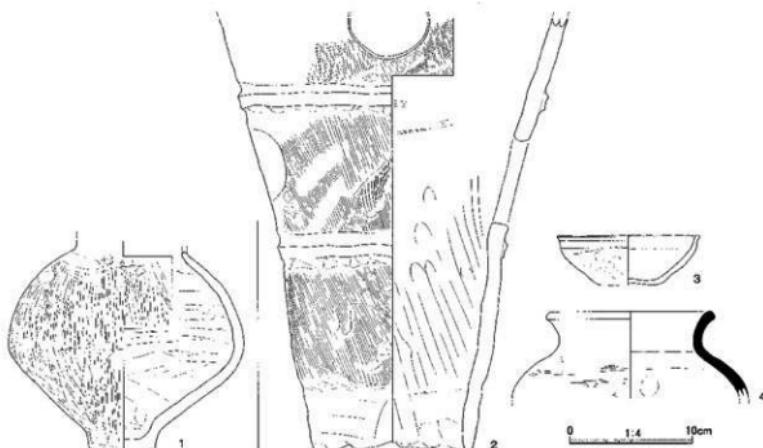
今回の調査では遺物包含層、素掘溝埋土、自然流路、人溝や土坑などの造構より多量の遺物が出土した。ここでは、出土遺物を造構ごとに報告する。

井戸SE01出土遺物（1）

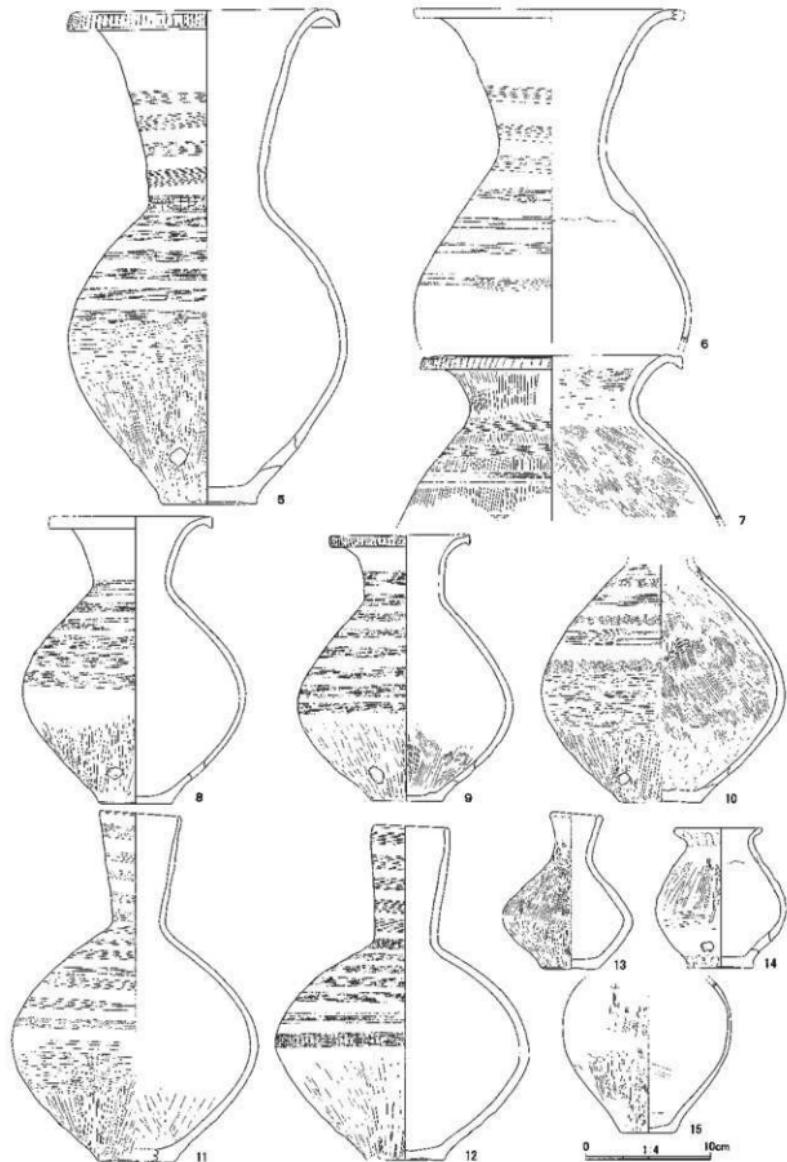
井戸SE01からは遺物1点のみが出土した。1は壺の胸部で、頸部が失われている。外面のミガキ調整が顕著で、胸部上半外面にはヘラ記号が施されている。弥生時代後期前半に位置付けられる。

溝SD02出土遺物（2～4）

溝SD02埋土のうち上層のみ遺物が出土した。2は円筒埴輪で、およそ半周分が破片化した状態で出



第10図 井戸SE01・溝SD02出土遺物



第11図 方形周溝壺状遺構出土遺物

したものである。残存するのは2条3段分で、底部高が第2段の突帯間隔より大きい。第2段、第3段にそれぞれ円形の透孔を直交方向に穿つ。外面は1次調整ナナメハケ、内面は指ナデにより仕上げられている。底部調整は外面を板押圧、内面を指頭圧により整形している。突帯はあまり突出しない形状で、断続ナデのち横ナデ調整されている（断続ナデ技法A）。古墳時代後期前半のものであろう。3・4は2と同一層位から出土している。3は土師器椀、4は須恵器壺で、奈良時代前後のものとみられ、満SD02の埋没時期に対応すると考えられる。

方形周溝墓状遺構出土遺物（5～15）

方形周溝墓状遺構の一部と推定される溝から出土した上器群である。少なくとも12個体が出土しており、そのうち岡化し得た11個体を掲載する。

5・6は広口長頸壺である。頸部と胸部の境目で明瞭に屈曲する形状で、頸部から胸部上半にかけて櫛引き直線文を施している。5は垂下した口縁端部に刺突文、胸部と頸部の境界に簾状文を施し、胸部下半には穿孔がある。6は口縁端部が失われている。7～9は広口壺で、頸部から胸部上半にかけて櫛引き直線文を施している。7・9は口縁部に刺突文を施す。また、8・9には胸部下半に穿孔がある。11～13は細頸壺で、10もその可能性がある。10～12は頸部から胸部上半にかけて櫛引き直線文を主体的に施しているが、13は無文である。このほか、無文の壺14・15があり、14は胸部下半に穿孔がある。

これら土器群は完形のものと打ち欠かれたものがあり、そのうち5個体に穿孔がある。総体としては弥生時代中期中葉に位置付けられよう。

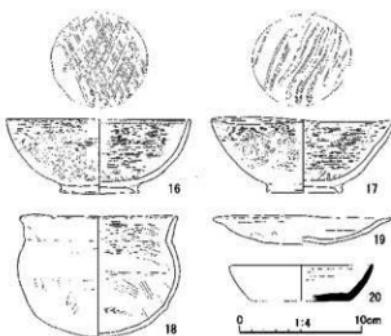
井戸SE02出土遺物（16～20）

16は井戸SE02上層、17～20はSE02下層から出土した。16・17は瓦器碗で、体部内外面のヘラミガキが密である。16は見込みに斜格子状のヘラミガキを、17はジグザグ状のヘラミガキを施している。18は土師器壺で、内面に粗いハケを施している。20は須恵器杯である。瓦器碗の様相からみて井戸SE02の埋没時期は12世紀前半を前後する時期に位置付けられる。

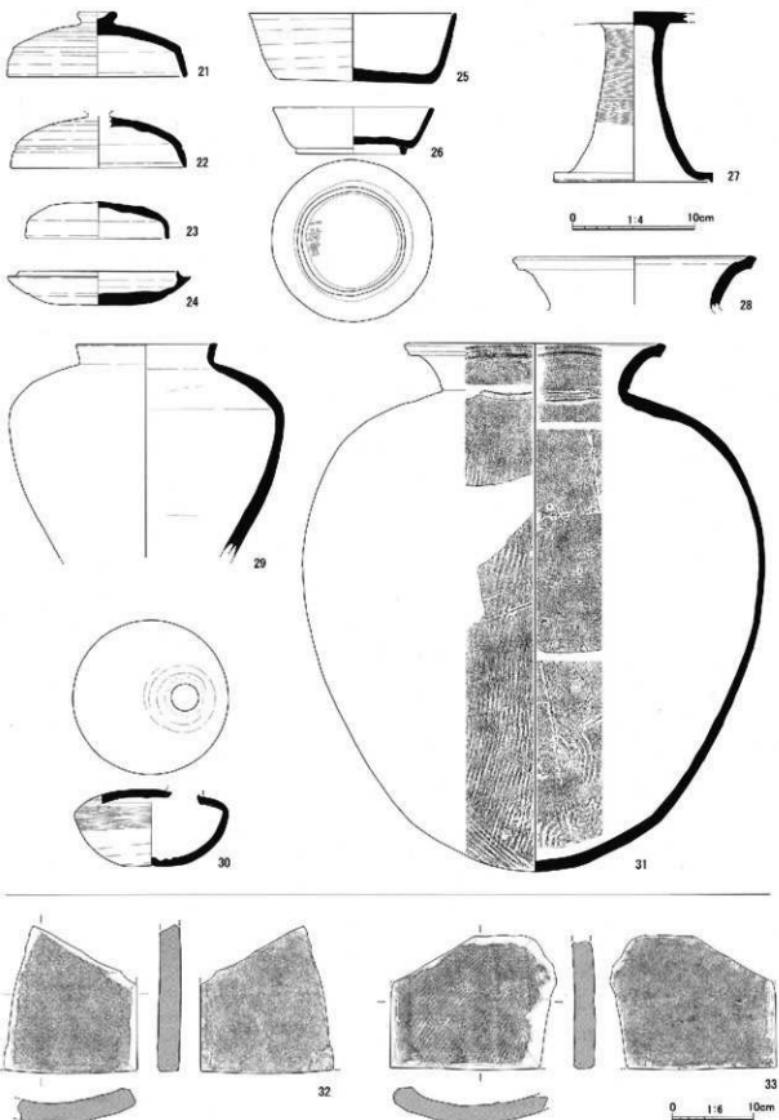
自然流路NR02出土遺物（21～64）

上層出土遺物（21～50） NR02上層から
は、須恵器、瓦、土師器などが出土した。

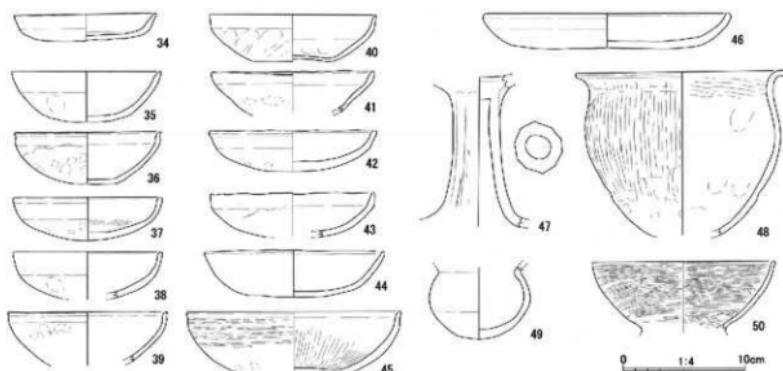
21～31は須恵器である。21～23は蓋である。21の天井部にくぼみのある形状のつまみが付くほか、22にもつまみが付いていた痕跡がある。24～26は杯である。24は低い立ち上がりをもつもので、全体に浅く扁平な形状である。25は立ち上がりをもたないもので、口縁部が直線的に外方にのびる。26も同様に立ち上がりをもたないもので、底部に高台が付く。底部外面には墨書きが施されており「一村堂」と判読できる。27は高杯で、脚柱部にカキメ調整のち沈線を



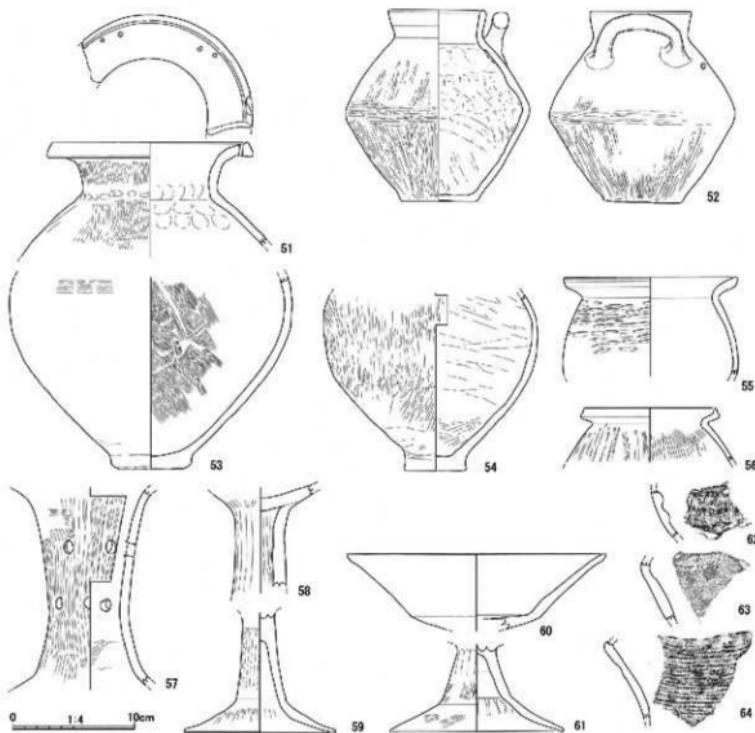
第12図 井戸SE02山上遺物



第13図 NR02上層出土遺物(1)



第14図 NR02上層出土遺物（2）



第15図 NR02下層出土遺物

施す。29は短頸壺である。30は平底で頸部は失われているが、内外面には円板閉塞による成形の痕跡が認められる。31は大型壺で、口頸部が短く外反する形状である。28も壺の口頸部と思われる。

32～33は平瓦である。模骨痕跡が認められ、桶巻作りにより製作されたものと思われる。

34～49は土師器である。34～45は杯で、45が外面をミガキ調整し、内面にミガキ暗文を残すほかは、基本的にナデ調整で指頭圧痕を残すものが多い。46の皿もナデ調整により仕上げている。47の高杯は脚柱部を面取りにより断面多角形に仕上げている。48の壺は外面および内面の口縁部付近を荒いハケで仕上げており、粗雑な印象を受ける。49は小型の壺である。

50は瓦器槌で、体部内外面ともに密にヘラミガキを施す。

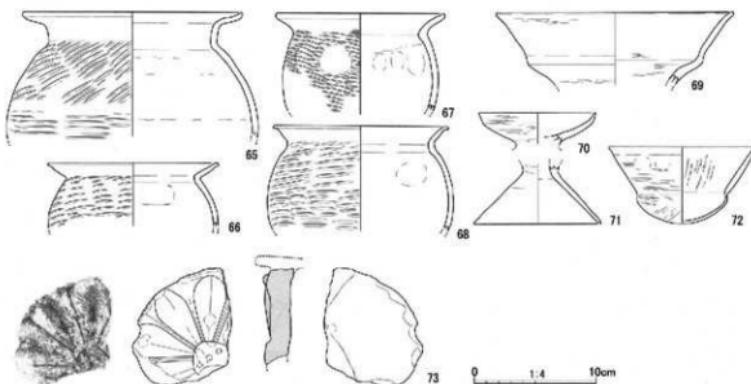
これらNR02上層出土遺物の時期は、おおむね古墳時代後期～平安時代前半期の幅におさまるようである。NR02上層に構築されていた井戸SD02の時期をふまえると、NR02上層の埋没時期は11世紀頃とみられる。

下層出土遺物 (51～64) 51は広口壺である。口縁端部に2個1組の穿孔が2ヶ所確認できる。口頸部および胴部は粗いハケメを残す。口頸部と胴部の境目には連続した刻み目がつけられている。52は完形の水差で、把手を貼り付けにより接合している。外面はミガキ調整で仕上げており、無文である。53、54は壺、55、56は甕である。56は口縁部上端が立ち上がり、外面を粗いミガキ調整で仕上げている。57は器台か。縱方向のミガキにより仕上げており、中位に5方向の透孔を2段にあけている。58～61は高杯である。60、61は同一個体と思われる高杯で、杯部外面には細かな横方向のミガキが施されている。62～64には特徴的な土器片を挙げた。62は貼付突帯文をもつ。63は頸部との境目に二重の刺突がある。64は胎土の色調から河内系の可能性がある。

これらNR02下層出土遺物は、一部を除き弥生時代中期末～後期のものが主体であるが、庄内式前半段階の59～61もあり、古墳時代前期初頭までの時期幅があるものとみられる。

第III' 層出土遺物 (65～73)

65～68は壺である。いずれも胴部をタタキで仕上げている。65、68は頸部をタタキののちにナデを

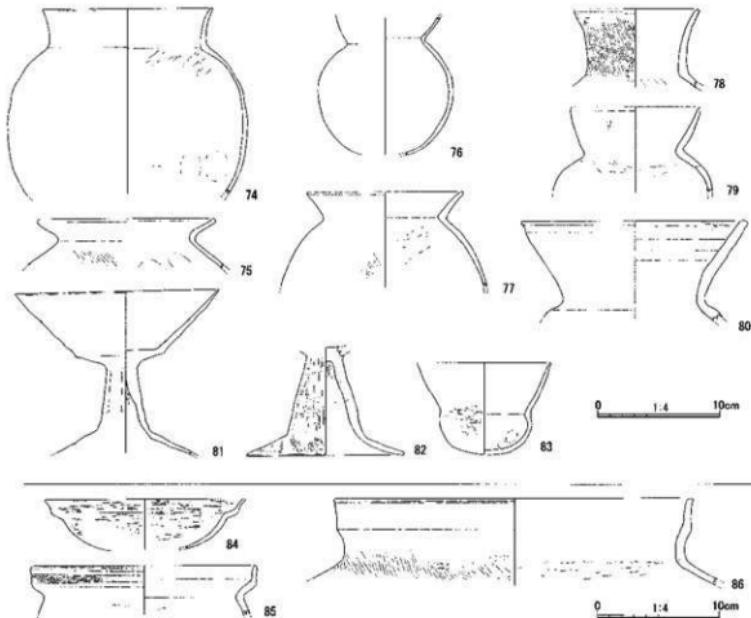


第16図 第III' 層出土遺物

施す。69は壺の口縁部で、二重口縁形を呈する。横方向のミガキが観察できる。70、71は小型の器台であるが、摩滅が著しく調査は判然としない。72は小型丸底鉢で、口縁部が外上方に延びる形状である。器表面は摩滅しているが、外面には一部に細かな横方向のミガキが、内面にも縱方向のミガキ調整が観察できる。

73は軒丸瓦破片で、瓦当部のみ残るが外縁は失われている。表面の摩滅が著しく文様が不鮮明だが、素弁蓮草文軒丸瓦である。花弁の数は8~10弁になるものと思われる。弁端は不明瞭である。中房には少なくとも3点の蓮子が認められる。瓦当裏面の外縁よりには丸瓦筒部との接合痕跡を示す凹凸がみられる。7世紀後半のものであろう。

第III'層から出土する遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭までのものが主体であるが、ここに図示したほかに須恵器片が少量含まれ、さらに瓦が存在するなど相当の時期幅がある。第III'層直上の第III層は遺物包含層と理解しているが、第III'層については地山面（第IV層）の標高がわずかに下降するNR02以南にのみ分布していることから、低地の地上げを意図した整地行為により形成されたものである可能性を想定しておきたい。第III'層の形成時期は、73の瓦の存在から推定すると7世紀後半以前となろう。



第17図 溝SD06上層出土遺物

溝SD06上層出土遺物（74～86）

上層上部から74～83が、上層下部から84～86が出土した。

74～77は甕である。74、77は内面に粗いケズリ調整を施す。75は外面に弱いヘラミガキが施されている。78～80は壺口縁部である。78、79は口縁部外面にヘラミガキが施されている。81、82は高杯である。81は口縁部が直線的に延びる形状で、杯底部の稜があまり明瞭ではなく、ナデ調整により仕上げている。82は脚部のみ残存しており、縦方向のミガキ調整が観察できる。83は小型丸底鉢で外面にミガキ調整を残す。

84は有段屈曲鉢で、内外面ともに横方向のミガキが丁寧に施されている。85は吉備系の口縁部をもつ甕で、口縁部に凹線を巡らす。86は有段口縁の甕で北近畿系の特徴をもつ。外面はヘラミガキ、内面は粗くケズリ調整している。

これら溝SD06上層出土上器については、概ね古墳時代前期初頭～前半に位置付けられるものと考えられる。

溝SD06南岸下層・北岸下層出土遺物（87～96）

南岸下層から87～93が、北岸下層から94～96が出土した。

87～90は甕である。87は外面をハケ調整で仕上げ、外面頸部直下に列点文を施す。89は外面にタタキを残し、内面は板ナデ、口縁外端面に凹線が巡る。88、90も外面にタタキを残す甕で、90は内面に横方向ハケを密に施している。91の直口壺は外面を主に縦方向のハケ調整で仕上げているが、胴部下半にヘラミガキを残す。92の高杯は現状では二個体に分かれているものの、同一個体と思われるため復元して図化した。杯部は有段屈曲鉢に類似した形状で、横方向に細かいミガキ調整をおこなっている。また、口縁部および脚部外側にそれぞれ沈線を3条施すとともに、脚部に3ヶ所穿孔している。93の短頸壺は外面をミガキ調整で仕上げている。

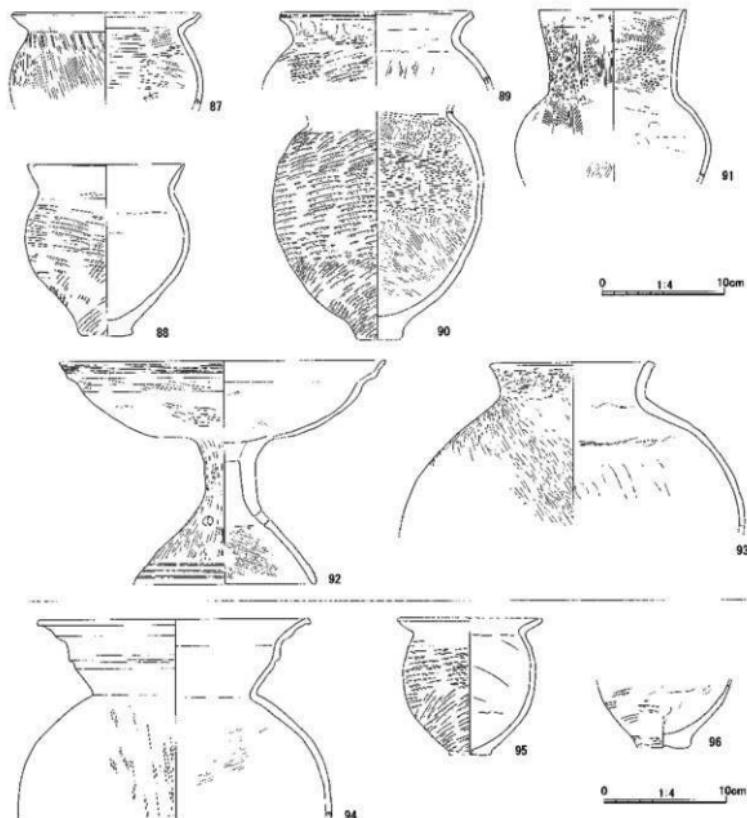
94の甕は二重口縁をもつ。内外面ともに摩減が著しいものの、胴部外面は縦方向のハケ調整、胴部内面は横方向のケズリ調整を施している。95、96は甕で、外面をタタキ調整で仕上げている。

これら南岸下層・北岸下層出土遺物については、概ね弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられよう。

溝SD06最下層出土遺物（97～124）

97～104の甕は、いずれも外面タタキ調整で、97、101のように口縁端をつまみ上げるものや、104のような瀬戸内系口縁をもつものもある。105は広口壺で、球形の胴部を有し内外面ともにハケ調整で仕上げている。108は口縁端部を垂下させる広口壺である。109の短頸壺は外面をミガキ調整により仕上げ、口縁端部はヨコナデにより凹線状にくぼむ。111は胴部上位に刺突による列点文を施している。112は吉備系の口縁部をもつ甕で、口縁端部に凹線を巡らす。115は東海系の瓢形壺と呼ばれるもので、外面は丁寧にミガキ調整し、透孔を穿つ。116は内傾した口縁をもち、外面に横方向のミガキ調整が残る。

118～122は高杯である。118は椀形の杯部に外に開く口縁をもつもので、杯部内外面ともにミガキ調整で仕上げている。また、脚柱部はハケ調整、脚部はミガキ調整である。119も外面に密にミガキ調整を施す。120は口縁が外反する形状の杯部で、内外面に縦方向のミガキ調整を施す。121、122は口縁が直線的に延びる形状の杯部で、杯部外面のミガキ調整は121が横方向、122が縦方向である。



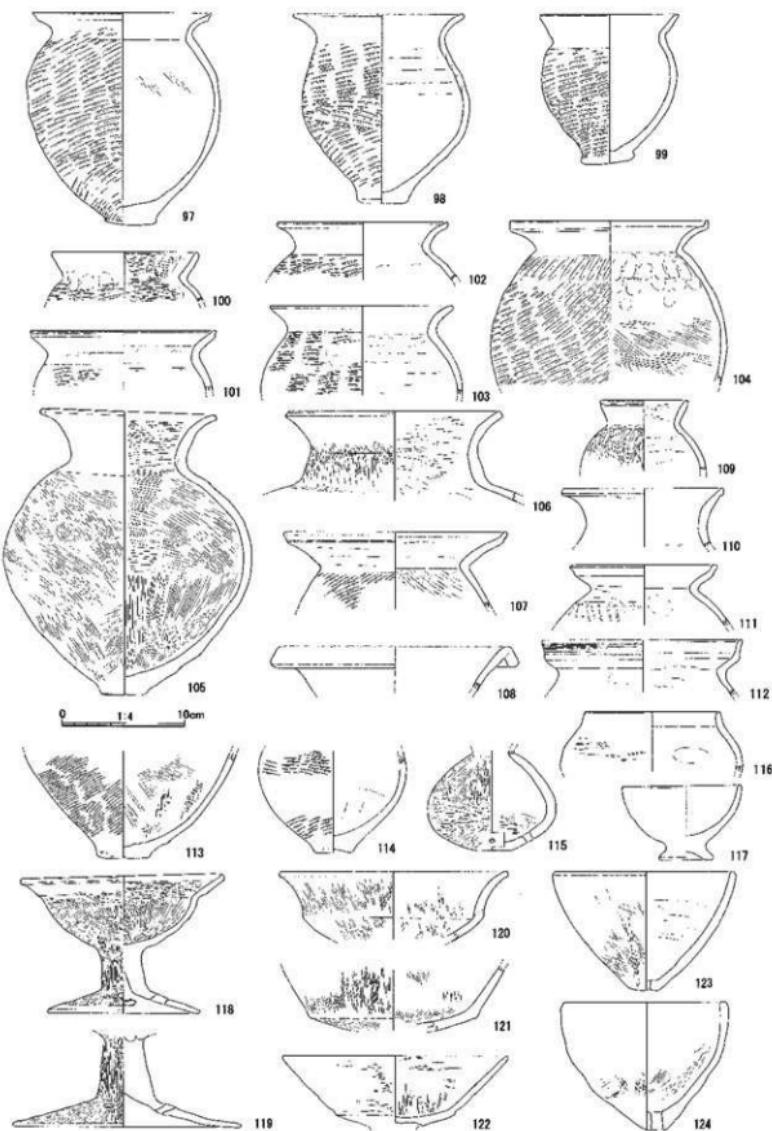
第18図 溝SD06南岸下層・北岸下層出土遺物

123、124は底部に小孔を穿つ有孔鉢である。

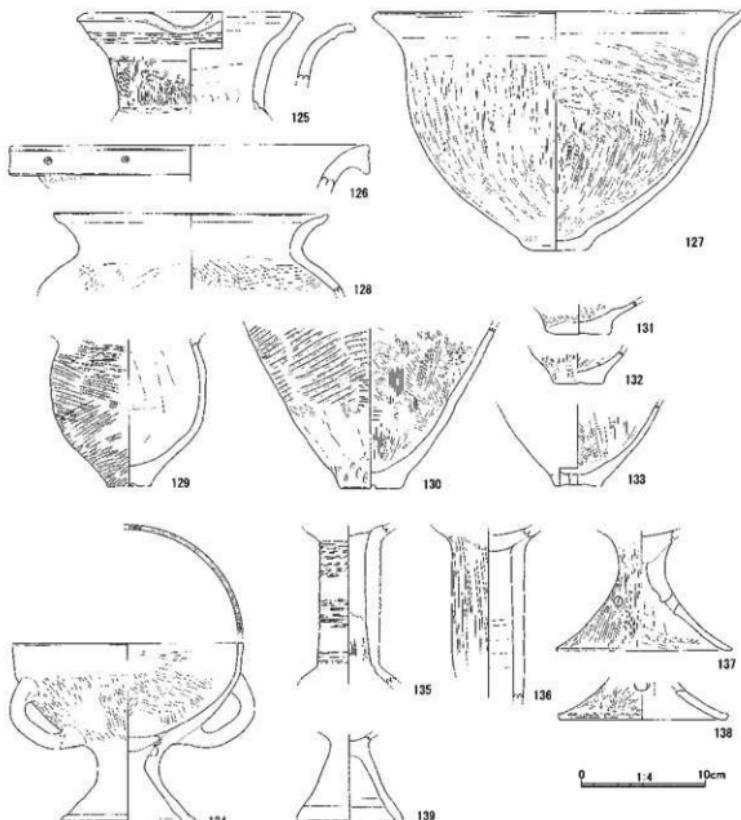
これら溝SD06最下層山上遺物については、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭のものと考えられ、南岸下層・北岸下層出土遺物との明確な時期差は認められない。各層出土遺物の時期からみて、SD06最下層・下層の埋没時期は古墳時代前期初頭、上層の埋没時期は古墳時代前期前半に位置づけられると考えられる。

自然流路NR03覆土出土遺物（125～139）

125は長頸壺で、口縁部に凹線を巡らし、端部に注口をもつ。126は広口壺で、口縁端部に竹管文が施されている。127は大型の鉢で、口縁部が外反する形状である。内外面ともにミガキ調整で仕上げ



第19図 漢S06最下層出土遺物



第20図 自然流路NR03上部覆土層出土遺物

る。128～130は甕で、いずれも外面をタタキ調整で仕上げている。133は底部に穿孔があり、有孔鉢と思われる。

134は把手付の台付鉢で、台部分のみ完形である。台部分はケズリのちナデ調整をおこない、鉢部分はミガキ調整により仕上げている。口縁上端面には沈線が施されている。139も台付鉢の一部かもしれない。135、136は高杯の脚柱部である。135は脚柱部にヘラ描き直線文が3段施されている。137、138は高杯の脚柱部で、外面に縦方向のミガキ調整を施す。138は外面の縦方向のミガキ調整に加えて、裾端部に刻み目を施している。

NR03上部覆土層出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期前半と時期に幅があり、NR03本体の時期を反映しないものと判断している。

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	種類	出土遺物	色調	釉土	焼成	汎量	口径等	厚さ	残存率	調査・備考
1	壺	青戸SDR1 下層	(外)SDR 5/1 黒灰 一済 SDR 5/1 横	青	良好	5.3	(17.3)	断面以下 横径下ナタ	17.3	(外)腹部下ナタナタ方向にぎり、横径下ナタナタ方向にぎり。縁足大わり、外側の脚線上 等に器底開裂の大きな2箇所。 印の跡下半丸み方角ナタ、縁足下半上がサザン。
2	円筒 桶	赤SDR2 上層	(外)SDR 7/6 褐 (内)SDR 6/6 細	褐	良好	12.0	(35.7)	1/4		(外)腹の方向ナタ、裏面は所産ナガナカ法。底部板押形。 (内)ナガ。底部ニイマサズ。
3	壺	赤SDR07 上層	(外)SDR 6/4 に点々腹 SDR 5YR 7/4 に点々腹	青	良好	11.4	4.0	1/4		(外)口縁20ナタ、底部ニイオナキ。 (内)コロナタ。
4	青白器 壺	赤DPR02 上層	(外)SDR 7/6 黒灰 SDR 7/6 1/6 白自	青 やや 灰	良好	13.0	(21.1)	1段部分1/4		(外)口縁コロナタ、脚部2ナタ向い、茎部コロナタが長い。 (内)腰下部2ナタナタ。底部ニイオナキ、底部コロナタ、底ニイオナキ。
5	壺	万字青周繩目状 瓶	(外)SDR 5/6 未 SDR 6/6 黑	青	良好	19.9	(60.8)	1/2		(外)口縁2ナタナタ。斜対4。底面に横筋2本有文、横筋2本化文。脚部上半に横筋 直角ナタ。脚部下部下ナタナタ。身孔あり。
6	甕	万字青周繩目状 瓶	(外)SDR 5/7 に点々腹 SDR 7/6 未 HVR 4/1 外	青 や 灰	良好	20.0	37.0	断面の 穴先		(外)泥出のため調整不整、傾斜～脚部上半に脚部直進文7枚。 (内)横筋のため調整不整。
7	広口壺	万字青周繩目状 瓶	(外)SDR 6/6 黒 SDR 6/6 2/1 細	青	良好	20.8	(33.5)	口縁部分6		(外)口縁2ナタナタ。斜対4。底面～脚部上半粗いハケ、脚部繩目直進文。 (内)腰下部2ナタナタ。口縁～腰部2本方向ハケ、脚部下半左がリハケ。
8	広口壺	万字青周繩目状 瓶	(外)SDR 6/6 黒素面 SDR 6/6 7/3 細	青	良好	13.0	23.6	底付穴先		(外)口縁2ナタナタ。脚部上半標準直進文、脚部下半せんげき。身孔あり。身孔に脚 部ニイナタ。
9	広口壺	万字青周繩目状 瓶	(外)SDR 6/4 に点々腹 SDR 5YR 6/6 横	青 や 灰	良好	11.1	22.0	底付穴先		(外)口縁2ナタナタ。斜対4。底付穴、斜対4。腰下部上半標準直進文。脚部下半粗いハケ。身 孔あり。身孔あり。
10	壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 1/4 に点々腹 SDR 2/1 細	青 や 灰	良好	6.6	(19.9)	口縁部分6		(外)口縁2ナタナタ。横筋2本直進文、横筋2本直角ナタ。脚部下半横筋2ナタ。身孔あり。 (内)腰下部2ナタナタ。底付穴。
11	細底壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 8/6 黄灰 (内)一	やや 青 灰 灰	良好	7.0	(28.5)	口縁直進文		(外)腰下部横筋2本直角ナタ。横筋2本直進文4枚。脚部下半横筋2本直角文、横筋2本直 角ナタ。脚部下半粗いハケ。
12	細底壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 6/6 未 (内)一	やや 青	良好	5.9	27.4	口縁直進文		(外)腰下部横筋2本直角文。斜筋底縫合部横筋2本直角文、脚部横筋2本直角文、横筋2本 直角ナタ。
13	細底壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 2/1 に点々腹 SDR 1/1 棕黄	青	良好	4.0	12.0	ほぼ完形		(外)口縁2ナタナタ。脚部上半ハケ、脚部下半粗いハケ。
14	壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 6/6 未 (内)SDR 6/6 横	青	良好	7.0	1.5	口縁直進文		(外)腰下部2ナタナタ。斜筋が長い。身孔あり。
15	壺	方形青周繩目 瓶	(外)SDR 5/3 黒 (内)SDR 6/3 に点々腹	青 や 灰	良好	4.4	(12.4)	底部のみ 充てん		(外)腰下部2ナタナタ。斜筋中央付近に工具痕。 (内)腰下部2ナタナタ。
16	瓦	赤ISH02 上層	(外)IS 3/0 通常 (内)IS 3/0 細	青	良好	14.8	5.1	口縁直進文		(外)ヒビオラエの上から3/5。身孔ナタ。 (内)ヒビオラエの上から3/5。斜筋等子状跡文。
17	瓦	赤ISH02 下層	(外)IS 4/0 未HVR 4/0 瓦	青	良好	14.5~ 16.0	5.5	充てん		(外)ヒビオラエの上から3/5。高台ナタ。器内に虫卵がある。 (内)ヒビオラエの上から3/5。底端执行件に擬定。
18	瓦	赤ISH02 下層	(外)IS 4/0 に点々腹 内 IS 5/0 瓦	青	良好	12.5	9.0	口縁直進文		(外)口縁2ナタナタ。脚部コロナタ。復元品。
19	壺	赤ISH02 下層	(外)IS 4/2 黒灰 IS 5/1 線模様	青	良好	0.4.5	2.5	1/2		(外)口縁2ナタナタ。底部コロナタ。割れの不定方向ナタ。 (内)ナタ。
20	酒山器 杯	赤ISH02 下層	(外)IS 5/0 瓦 IS 5/0 瓦	青	良好	0.1.6	2.9	1/4		(外)口縁コロナタ。底部ヒビナカ。口縁部分2ナタ。
21	酒山器 蓋	自然開窓HR02 上層	(外)SDR 4/2 黒灰 SDR 5YR 4/1 黒灰	青 や 灰	良好	14.5	5.3	1/2		(外)口縁、つまみ脚部転ナタ。黒張引(火炎跡)。 (内)脚部ナタナタ、1段内側に 本底跡あり。
22	酒山器 蓋	自然開窓HR02 上層	(外)SDR 3/2 に点々腹 SDR 4/2 黒灰	青	良好	14.0	(4.2)	2段脚 1/3		(外)つまみ脚部欠損。脚部内転へ前後。口縁直進ナタ。
23	酒山器 蓋	自然開窓HR02 上層	(外)SDR 4/2 黒灰 (内)SDR 4/0 黒	青	良好	11.3	3.0	ほぼ完形		(外)中空部に脚部ヘタナタ。口縁コロナタ。脚部内外面に火捺付帯。 (内)口縁ナタ。
24	酒山器 蓋	自然開窓HR02 上層	(外)SDR 4/0 黒灰 (内)SDR 4/0 黒	青	良好	13.0	2.8	1/3		(外)底面凹輪ヘタナタ。口縁コロナタ。口縁直進ナタ。 (内)口縁ナタ。

第2表 出土遺物観察表(2)

番号	器種	出土遺構	色調	胎土	焼成	法線	口縁等	基面	残存率	調整・備考	
25	杯	自然焼成NR02 上層	(内)黄褐色/灰/1灰 (外)白 (内)7.5V 6/1灰	板	良好 (18.9)	6.7	1/2	(内)口縁一部削り凹マサナ、底部ナヂで整えてあるが一部未調節部分あり。 (外)口縁一部削り凹マサナ、底部不規方角マサ。			
26	盃	自然焼成NR02 上層	(内)N 6/0 民 (外)7.5V 6/1 略灰	板	良好 13.0	3.8	ほぼ完形	(内)ココリ、底面の付着。底面に「一村家」の墨書き。外面に一部スッペル。			
27	酒呑器	自然焼成NR02 上層	(内)N 6/0 民 (外)7.5V 6/1 略灰	板	良好 13.0	33.0	開口のみ 現存	(内)シボリ口、カリ口、底面ガナナ。 (外)シボリの上からマサナ。			
28	酒呑器	自然焼成NR02 上層	(内)N 6/0 民 (外)7.5V 6/1 略灰	板	良好 10.1	4.3	口縁21.4	(内)ココリ。 (外)ココリ。			
29	酒呑器	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/1 略灰 (外)7.5V 6/1灰	板	良好 11.6	17.0	腹部上方 のみ	(内)ココリ、比較用に自然地が付着している。 (外)ココリ。			
30	灰陶器	自然焼成NR02 上層	(内)N 6/0 民 (外)7.5V 6/1 略灰	板	良好 制作修 (6.3)	12.6	底部のみ 底部中央へ付いた未調節。	(内)底盤上にカカリ、軽度ドリ、細部ヘラクズリ等マサナ。底部調節ヘタクズリ。 (外)底盤中央へ付いた未調節。リム部両辺カキ口。			
31	灰陶器	自然焼成NR02 上層	(内)N 6/0 民 (外)7.5V 6/1 略灰	板	良好 20.4	41.0	口縁 底下十厘米 底	(内)口縁マサナ、開口タリ、外側のタリ口は開口・底部・底盤・内側の底盤は調節と底盤付近で異なる。 (外)口縁マサナ、底盤調節なし。			
32	平瓦	自然焼成NR02 上層	(内)面7.5V 7/3 に灰/薄黄 (外)面7.5V 7/1 に灰/薄黄	板	良好 26.8	4.0	破片	(内)マサナ。 (外)マサナ。			
33	平瓦	自然焼成NR02 上層	(内)面7.5V 8/3 浅黄 (外)面7.5V 8/3 浅黄	板	款	—	—	(内)口縁のため調節不良。 (外)口縁付近マサナ。			
34	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/2 45° 黄褐 (外)7.5V 7/2 45° 黄褐	板	良好 11.0	2.2	5/6	(内)口縁付近マサナ、底盤部のため調節不良。 (外)口縁付近マサナ、底盤部のため調節不良。			
35	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 8/3 浅黄 (外)7.5V 8/3 浅黄	板	良好 12.2	4.1	11時部 1/3	(内)口縁マサナ、開口～底盤マサナのちコロサ。			
36	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/5 深褐 (外)7.5V 1/3 に灰-黒	板	良好 11.9	4.3	10時	(内)口縁マサナ、開口～底盤マサナ。 (外)口縁マサナ、底部調節不良。			
37	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/2 45° 黄褐 (外)7.5V 7/2 45° 黄褐	板	やや 軟	12.0	3.5	1/3	(内)口縁マサナ、開口部のコロサ。 (外)マサナ、底部調節不良。		
38	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/4 深赤褐 (外)7.5V 7/4 深赤褐	板	良好 12.0	0.9	口縁部 3/4	(内)口縁付近マサナ、底盤～底部マサナのコロサ。 (外)マサナ。			
39	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/3 に灰/黒 (外)7.5V 6/3 に灰/黒	板	良好 13.0	4.1	1/2	(内)口縁マサナ、底盤マサナ。 (外)マサナ。			
40	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 8/2 灰白 (外)7.5V 8/2 灰白	板	良好 (13.6)	3.9	1/3	(内)口縁マサナ、底盤マサナ、調節、右肩上方四つへのナヂ、底盤、ユビオナリ。 (外)口縁マサナ、底部マサナ、底盤マサナ、底盤マサナ。			
41	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 1/4 に灰/黒 (外)7.5V 2/1 に灰/黒	板	良好 6.6	0.4	5/6	(内)口縁マサナ、調節マサナ。 (外)マサナ、口縫部分的にナヂ方向ハケ。			
42	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/4 に灰/黒 (外)7.5V 7/4 に灰/黒	板	良好 13.6	3.3	1/2	(内)口縁マサナ、底部調節不良。 (外)マサナ、底部調節不良。			
43	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/3 に灰/黒 (外)7.5V 6/3 に灰/黒	板	良好 13.3	0.0	1/2	(内)口縁マサナ、調節マサナ方向底盤ナヂ。 (外)マサナ、底部調節不良。			
44	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/3 に灰/黒 (外)7.5V 6/3 に灰/黒	板	良好 14.6	3.8	3/4	(内)口縁マサナ、底部調節不良。底部にヘラギナリ字跡あり。 (外)マサナ、底部調節不良。			
45	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/3 に灰/黒 (外)7.5V 6/3 に灰/黒	板	やや 軟	17.5	5.5	1/3	(内)口縁マサナ方向マサナ、コロナヂ。底部調節的マサナ。 (外)マサナ、底部調節不良。		
46	杯	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 5/4 に灰/黒 (外)7.5V 5/4 に灰/黒	板	良好 (20.0)	2.7	1/2	(内)口縁マサナ、底部調節的マサナ。 (外)マサナ、底部調節不良。			
47	碗	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 6/6 橙 (外)7.5V 6/6 橙	板	良好 —	—	C.3.0	脚部のみ (内)脚部付近付近底盤が観察できる。脚部に取扱いを施している。 (外)マサナ。			
48	盆	自然焼成NR02 上層	(内)7.5V 7/6 に灰/黒 (外)7.5V 7/6 に灰/黒	板	良好 6.7	0.1	脚部径 (6.1)	体積のみ (内)脚部マサナ、調節マサナ。 (外)脚部マサナ、底部調節不良。			

第3表 出土遺物觀察表(3)

番号	基種	出土遺物	色調	出土 備考	法蓋 口徑等	蓋高	保存率	調整/備考
49	壺	自然陶器N002 上層	(外)SYR 6/6 緩 (内)SYR 7/6, 6/6 柄	粗 良好 (37.2) (13.4) 2/3	(外)口縁コナダ、腹部タリッシュヘア、一部カビナガ、底部付近ヨコナダ。 (内)口縁ヨコナダ、一部ヘアナガ、底部ヨコナダ、コナダ。			
50	瓦器	自然陶器N002 下層	(外)SYR 4/0 底 (内)SYR 4/0 底	粗 良好 (7.0) (6.8) 口縁部 1/2	(外)ヨコ方向にガタ、底付近ナダ。 (内)ヨコ方向にガタ、底付近ナダ。			
51	瓦器	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/4 に沿う窓 (内)SYR 4/2 灰黄色	粗 良好 (6.0) (8.5) 口縁部1/3	(外)ヨコ方向にガタ、柄付近ハサウエーハー、頭部上半部分剥離が激しい。 窓の内側にテクスチャあり。 (内)ヨコ方向にガタ、頭部上半部分剥離が激しい。			
52	木形 土器	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/6 黒色 (内)SYR 6/3 に沿う褐色	杏 良好 8.2 15.8 光沢	(外)ヨコナダ、(内)ヨコ方向にガタ、柄付近ハサウエーハー、頭部上半部分剥離が激しい。把手内側に柄付近付ける。把手表面は少孔状。 (内)ヨコナダ、ヨコ方向にガタ、ナダ、チキメ方向ナダ。			
53	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/6 黃褐色 (内)SYR 6/6 黄褐色	今 東洋 露西経 5.2	(15.7) 頭部1/4 (外)頭部や把手に方角ヘア、頭部ト平ケガ。			
54	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/4 に沿う褐色 (内)SYR 6/2 に沿う褐色	粗 良好 一 (14.6) 頭部1/2	(外)ヨコ方向にガタ、底部ヨコナダ、斜面外側に4本の段割れあり。 (内)ヨコ方向ナダ、ハサウエーハーなどナダ。			
55	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/1 黄褐色 (内)SYR 6/1 黄褐色	粗 良好 14.0 (8.0) 口縁部1/4	(外)ヨコナダ、斜面ヨコ方向ナダキヨ。 (内)ヨコナダ、頭部剥離不規則。			
56	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/4 に沿う褐色 (内)SYR 5/4 に沿う褐色	粗 良好 18.6 (4.0) 口縁部1/4	(外)ヨコナダ、斜面ヨコ方向ナダ、左縁ナダ。			
57	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/1 黄褐色 (内)SYR 6/2 黄褐色	粗 良好 一 (15.0) 側面の左 右	(外)ヨコ方向にガタ、部分的にチタ方向ヘア、側面の邊に孔を持つ。 (内)ヨコナダ。			
58	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/6 黄褐色 (内)SYR 6/2 黄褐色	今 東洋 露西経 4.3	頭部のみ (外)ヨコ方向にガタ。 (内)頭部内側にシザリ。			
59	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 7/3 に沿う褐色 (内)SYR 7/4 に沿う褐色	粗 良好 12.2 (9.9) 頭部のみ	(外)にガタの上から出でナダ、(内)ナダの上から部分的にハサウエーハー。 (内)ヨコ方向ナダ、シザリ、ナダ。			
60	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/6 黄褐色 (内)SYR 6/6 黄褐色	粗 良好 21.0 (6.0) 手縫のみ	手縫のみ (外)ヨコナダ、斜面ヨコ方向にガタが見られる。 (内)ヨコナダ、頭部剥離のため調整不可。			
61	壺	自然陶器N002 下層	(外)SYR 6/4 に沿う褐色 (内)SYR 6/6 黄褐色	粗 良好 12.0 (7.0) 手縫のみ 充填	手縫のみ (外)ヨコ方向にガタ、チタ方向ヘア、握部へ伸びた底縁ヘア。 (内)ヨコナダ、シザリ、コナダ。			
62	土器片	自然陶器N002 下層	(外)SYR 7/2 に沿う褐色 (内)SYR 6/4 に沿う褐色	今 東洋 露西経 —	— 側面剥離 (外)側面に剥離を含む。			
63	土器片	自然陶器N002 下層	(外)SYR 7/4 黄褐色 (内)SYR 7/4 黄褐色	粗 良好 一 — 側面剥離 (外)側面に近づいた側面剥離。				
64	土器片	自然陶器N002 下層	(外)SYR 5/8/5/6 黄褐色 (内)SYR 5/8 黄褐色	粗 良好 一 — 側面剥離 (外)ヨコ方向ナダ。 (内)ヨコナダ、斜面ナダ。				
65	壺	堅田層	(外)SYR 6/4 に沿う褐色 (内)SYR 5/4 に沿う褐色 最高 標準SYR 5/1 黄褐色	粗 良好 (37.8) (19.2) 口縁部1/4 1/2	(外)口縁ヨコナダ、頭部ヨコナダ、斜面ヨコナダ、一部砂附している。頭部下部ヨコ方 向にガタ、頭部内外側に砂附がある。 (内)ヨコナダ、頭部剥離のため調整不可。			
66	壺	堅田層	(外)SYR 7/6 緩 (内)SYR 7/6 緩	粗 良好 (14.0) (5.0) 口縁部1/4	(外)ヨコヨコナダ、斜面ヨコ方向ナダ、一部砂附している。 (内)ヨコナダ、頭部剥離が激しい、チタ方向。			
67	壺	堅田層	(外)SYR 7/4 に沿う褐色 (内)SYR 7/3/4 に沿う褐色	粗 良好 (13.5) (6.0) 口縁部1/4 1/2	(外)ヨコヨコナダ、頭部ヨコナダ、斜面ヨコナダ、頭部ヨコナダ、一部砂附。			
68	壺	堅田層	(外)SYR 7/4 に沿う褐色 (内)SYR 7/4/4 に沿う褐色	粗 良好 (14.0) (6.0) 口縁部1/4 1/2	(外)ヨコヨコナダ、頭部ヨコナダ、斜面ヨコナダ、頭部ヨコナダ。 (内)ヨコナダ、頭部剥離が激しい。			
69	壺	堅田層	(外)SYR 7/6 緩 (内)SYR 7/6 緩	粗 良好 (9.0) (5.0) 1/2	(外)ヨコヨコナダ、頭部ヨコナダ、ヨコ方向にガタ、口縁部下部出ナダ、ヨコ方向のヒガ タ、砂附している。 (内)ヨコヨコナダ、頭部剥離が激しい。			
70	器台	堅田層	(外)SYR 6/6 黃 (内)SYR 5/6 黃	粗 良好 (8.0) (2.5) 1/2	(外)ガタ、頭部が激しい。 (内)把柄、頭部剥離が激しい。			
71	器台	堅田層	(外)SYR 6/6 白灰 5/1 黄褐色 (内)SYR 5/1 に沿う褐色 部 SYR 5/1 黄褐色	粗 良好 (10.0) (4.0) 4/5	(外)頭部ヨコナダ、頭部ヨコナダ、一部ヨコナダ、頭部ヨコナダ。 (内)頭部ヨコナダ、頭部剥離が激しい。			
72	小器 丸根器	堅田層	(外)SYR 6/6 一輪 SYR 5/1 黄褐色 (内)SYR 5/1 に沿う褐色 部 SYR 5/1 黄褐色	粗 良好 12.0 6.3 保完形 —	(外)口縁ヨコナダ、頭部ヨコナダ、一部ヨコナダ、頭部ヨコナダ、白縁部ヨコナダ、頭部剥離が激しい。 (内)ヨコ方向にガタ、頭部剥離が激しい。			

第4表 出土遺物觀察表(4)

番号	器種	出土場所	色調	胎土	焼成	法善 口位等	基点	残存率	調整・備考
73	町木瓦	東宮下層	(外)灰 6/1 黄灰 (内)灰 6/1 黄	粗	軟				瓦の部のみ残り、半赤土葉脈模様丸瓦。全体的に崩壊が激しい。
74	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 8/2 深紅 (内)10YR 8/2 深黃褐	粗	軟	(14.0) (15.0)	1/4		(外)口縁コロナゲ、削ぎ面崩壊が激しいため調査不規。内側口縁コロナゲ、削ぎ面下部にケズリ、頭頂下部にナードコロナゲ。全体的に崩壊が激しい。
75	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 5/6 明黄 (内)10YR 5/6 明黄	粗	良好	(14.0) (4.0)	1/4		(外)口縁コロナゲ、削ぎ面が少々。 (内)口縁コロナゲ、削ぎ面ナカ、頭頂圧斑。
76	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 7/2 に赤 (内)10YR 7/2 に赤	やや 粗	軟	(14.0)	C.1.0	完全	(外)口縁コロナゲ。 (内)口縁コロナゲ。 (内)ナカ。
77	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 8/2 深黃 8/2 深紅 (内)10YR 8/2 深白	粗	軟	(14.0) (7.0)	1/4		(外)壠底が激しく剥離不明。口縁部は火照・縮緬が激しい。 (内)口縁コロナゲ、削ぎ面ナカ、頭頂コロナゲ。
78	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 6/5 暗 (内)10YR 6/5 暗	粗	良好	10.4	(6.0)		(外)口縁コロナゲ、削ぎ面ナカ。 (内)山林コロナゲ、頭頂下部削離。
79	甕	漆SD006 上層下部	(外)7.5YR 6/5 暗 (内)7.5YR 6/5 暗	粗	良好	10.6	(7.0)		口縁部 み凹凸逆形 (外)口縁コロナゲ、削ぎ面ナカ。 (内)山林コロナゲ、削ぎ面ナカ。
80	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 4/1 黄灰 (内)10YR 4/1 黄灰 7.5YR 5/4 暗黃	粗	軟	10.7	0.7		(外)壠底が激しい。一部コロナゲ。 (内)壠底が激しい。頭頂コロナゲ、内面全体に崩壊が見られる。
81	瓦件	漆SD006 上層下部	(外)7.5YR 6/5 暗 (内)10YR 8/2 深黃	粗	良好	(16.0) (13.5)	1/2		(外)片端コロナゲ、頭頂コロナゲ。 (内)片端コロナゲ、頭頂コロナゲ、シザリ。
82	瓦件	漆SD006 上層下部	(外)10YR 7/6 暗 (内)10YR 8/2 深黃	粗	良好	(12.0) (8.0)			(外)壠底が激しい。チテ方向の面取り後(1)方向七切。 (内)ナカ。
83	甕	漆SD006 上層下部	(外)5Y 7/2 暗灰 5Y 7/2 暗灰	粗	やや 軟	(10.0) (0.5)			壠底削離 (外)壠底が激しい。頭頂部ナカア部削離後(1)方向七切。頭頂部崩壊が見られる。 (内)壠底が激しい。頭頂コロナゲ。
84	甕	漆SD006 上層下部	(外)5Y 8/3 深褐 5Y 8/3 暗 5Y 8/3 暗	粗	良好	(16.0) (4.0)	1/2		(外)壠底崩壊や片端が激しい。ヨコ方向(4)方向コロナゲ。 (内)壠底崩壊や片端が激しい。ヨコ方向(4)方向コロナゲ。頭頂ナカ、雲母を多く含む。 (外)ヨコ方向の片端が激しい。
85	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 8/3 深黃 8/3 暗	粗	良好	(15.0) (4.0)	1/2		(外)壠底ナカ、頭頂コロナゲ。吉備系。 (内)コロナゲ。
86	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 8/3 深黃 9/2.5Y 8/2 暗灰	粗	良好	(20.0) (7.0)			(外)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。
87	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 8/2 に赤 8/2.5Y 8/2 暗 (内)10YR 7/2 に赤	粗	良好	(14.0) (7.0)	1/2		(外)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。
88	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 7/2 に赤 8/2.5Y 8/2 暗 (内)10YR 7/2 に赤	粗	やや 軟	(12.0) (14.1)	1/4		(外)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。 (内)壠底が激しく崩壊不規。
89	甕	漆SD006 上層下部	(外)7.5YR 5/4 暗 7.5YR 5/4 暗 (内)7.5YR 5/4 暗 7.5YR 6/1 暗	粗	良好	(15.0) (8.0)	1/4		(外)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。
90	甕	漆SD006 上層下部	(外)10YR 6/1 に赤 6/1 暗 (内)10YR 6/1 に赤	粗	良好	6.5	(9.0)	瓦斜支撑	(外)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。 (内)ヨコ方向ハサ。
91	長板瓦	漆SD006 南北下層	(外)10YR 5/2 暗 (内)7.5Y 5/1 に赤	粗	良好	(12.0) (13.0)	1/4		口縫一隅 (外)口縫ハサのうちコロナゲ、頭頂一側削離下タクナゲ、頭頂ナカギ。 (内)山林斜面コロナゲ、口縫一側削離コロナゲ、頭頂ナカギ、頭頂ユゴオサ。
92	高杯	漆SD006 南北下層	(外)10YR 6/5 暗 (内)10YR 5/8 明黄	粗	良好	(26.0) (8.0)	弧形1/2		(外)壠底、3条の比較が断続的にある。頭頂ナカギ、主近表面。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ミカキ、ほんどう感がある。
93	如瓶	漆SD006 南北下層	(外)10YR 6/5 暗 (内)10YR 7/2 に赤	粗	良好	(13.0) (13.7)	口縫一側 部1/4		(外)口縁ミカキ、全体的にミカキ、延びナカ、黒尾。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ナゲ、劣化削離している。頭頂下部正直角、指顎加厚あり。
94	甕	漆SD006 南北下層	(外)7.5YR 6/4 深黃 (内)7.5Y 6/2 暗黃	粗	良好	(22.0) (18.0)	1/2		(外)壠底、一部頭頂コロナゲ、頭頂ナカギ、頭頂が激しい。 (内)山林斜面頭頂部コロナゲ、口縫一側削離コロナゲ、頭頂ナカギ、頭頂ユゴオサ。
95	甕	漆SD006 南北下層	(外)10YR 5/3 に赤 (内)10YR 6/2 暗黃	粗	良好	(11.0) (C.1.0)	1/4		(外)口縁コロナゲ、頭頂タクナギ、頭頂化。 (内)口縁コロナゲ、頭頂ナカ。
96	甕	漆SD006 南北下層	(外)10YR 5/2 暗 (内)10YR 6/2 暗	粗	良好	4.2	(3.2)	底形のみ 完形	(外)タクナゲ、頭頂付近走離している。 (内)立波らなハサ、ヒビオニエ跡あり。

第5表 出土遺物観察表(5)

番号	器種	出土遺物	色調	地土	焼成	位置	口徑等	器高	保存率	測量・備考
97 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 6/2 黒裏輪 (内)白SY 7/3 黒口	青、良好	0.4.0	17.4	1/2				(外)口縁コナヂ、輪底タタキ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。
98 黄	壺SD06 蓋下層	(外)黄SY 6/2 黒裏輪 (内)黄SY 7/3 黑	黄	良好	0.3.0	16.5	1/3			(外)口縁コナヂ、輪底タタキ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。結合底が見られる。
99 黄	壺SD06 蓋下層	(外)黄SY 7/3 に白い縁 (内)黄SY 7/4 に白い縁	黄 灰	中や 灰	12.2	12.3	ほぼ完形			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。
100 黄	壺SD06 蓋下層	(外)黄SY 6/1 黃灰 (内)黄SY 4/1 黄灰	黄	良好	0.1.0	6.0	2/3			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ、輪底コビサズ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。
101 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 7/4 に白い縁 10% SY 5/1 黒 (内)白SY 7/3 に白い縁	白 灰	中や 灰	14.5	14.6	口縁部1/4			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ、一部麻底。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。
102 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 5/3 に白い縁 (内)白SY 5/2 黒裏	白 灰	中や 灰	13.0	6.0	2/3			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ。
103 黄	壺SD06 蓋下層	(外)黄SY 5/3 に白い縁 2.7% SY 5/1 黄 (内)黄SY 4/3 黄裏	黄 灰	中や 灰	14.0	7.0	口縁部1/4			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ、一部ナカ。 (内)口縁コナヂ、上から板ナカで覆されている。
104 黄	壺SD06 蓋下層	(外)黄SY 7/2 黄灰 (内)黄SY 6/2 黄灰	黄	良好	16.0	13.0	1/2			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ、結合底、輪底下に低いハケ。
105 底付壺	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 6/1 白 (内)白SY 6/1 に白い縁	白 灰	良好	13.0	23.6	1/6			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ、輪底下に口縁が垂れている。 (内)口縁コナヂ、輪縁タタキ、口縁下に、輪底下に方向ハケ。
106 底付壺	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 6/1 に白い縁 (内)白SY 7/2 黑裏	白	良好	17.0	7.5	口縁部1/4			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ、把紐してある。口縁下に側面ハケ。 (内)口縁コナヂ、工具压痕、コロナリ模様。
107 灰	壺SD06 蓋下層	(外)灰SY 6/0 鎌灰 (内)灰SY 6/4 に白い縁	青 灰	良好	0.8.0	5.0	口縁部1/4			(外)口縁コナヂ、輪縁タタキ。 (内)口縁ナヂ、輪縁タタキ。
108 底付壺	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 7/2 黑灰 (内)白SYR 7/2 に白い縁	白	良好	18.0	3.0	1/6			(外)口縁コナヂ。 (内)口縁ナヂ。
109 灰	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 7/2 黒裏輪 (内)白SY 6/2 黑裏	青 灰	良好	1.2	0.0	口縁部の 内側底			(外)口縁輪底部脇、口縁ヒロイデ。輪底ハケのちぢき。 (内)口縁ヒロイデ、輪底ナヂ。
110 灰	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 6/2 黒裏輪 (内)白SY 6/3 に白い縁	青 灰	良好	13.0	4.0	口縁部2/3			(外)口縁ヒロイデ、口縁下に掛面に痕あり。 (内)口縁ヒロイデ、輪底ハケ。
111 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 6/2 黒裏輪 (内)白SY 6/1 6/2 黑灰色	白 灰	中や 灰	0.0	4.0	1/6			(外)口縁輪底ハケヒロイデ、輪底コナヂ、輪縁斜突先。 (内)口縁ナヂ、一部ヒロイデ。
112 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 8/2 黑裏 (内)白SY 8/2 黑裏	白 灰	中や 灰	16.0	4.0	口縁部2/3			(外)口縁凹透鏡、輪底コナヂ、口縁が丸から圓形と同われる。 (内)口縁コナヂ、輪底より下の底盤が黒い。
113 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 8/2 黒裏 (内)白SY 8/2 黒裏	白	良好	0.0	0.7	直筋～肩	(外)タタキ、底部付近ナヂ。		(内)ハケ。
114 白	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 8/1 黒裏 (内)白SYR 8/3 に白い縁	白	良好	1.0	0.0	3/4			(外)輪底上にタタキ、輪底付近ナヂ、輪縁タタキ。 (内)輪底上半ナヂ、輪底下半ナヂ、ナジハケの隣界に工具底痕あり。
115 楕円壺	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 8/4 黒裏輪 (内)白SYR 8/4 黑裏	白	良好	2.0	0.0	口縁のみ 底付			(外)口縁ナヂ、輪底付近ナヂ、輪底ト子に若虫を含む。輪底付近ナヂ方向に上工方向ハケ。 (内)口縁ナヂ、輪底付近ナヂ、輪底ト子。
116 楕円壺	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 8/8 3/2 横縫 脚 10% SY 8/2 黑灰 (内)白SYR 8/4 黑裏	白 灰	中や 灰	11.0	4.0	口縁部1/6			(外)口縁コナヂ、輪底ヒロイデハケ、輪縁ヒロイデ。 (内)口縁コナヂ、輪底付近ナヂ、輪底ト子。
117 台付鉢	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 6/4 に白い縁 (内)白SYR 6/4 に白い縁	白 灰	良好	9.0	6.1	完形			(外)ナヂ、底盤が黒い。 (内)ナヂ。
118 高杯	壺SD06 蓋下層	(外)白SY 7/2 黑裏 (内)白SY 7/2 黑裏	白	良好	16.0	0.0	4/5			(外)口縁コナヂ、枕筋ハケカラーヒキ、輪縁ナヂ、輪底ナヂ、4.0万透視点、8.0 (内)口縁コナヂ、枕筋ナヂ、輪縁ナヂ、輪底ナヂ。
119 高杯	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 7/2 に白い縁 (内)白SYR 7/2 に白い縁	白	良好	19.0	0.0	1/2			(外)口縁ヒロイデ、輪底ナヂ、輪縁コナヂ。 (内)口縁ヒロイデコナヂ、半失葉ナヂ。
120 高杯	壺SD06 蓋下層	(外)白SYR 7/2 に白い縁 (内)白SYR 7/2 に白い縁	白 灰	中や 灰	18.0	5.0	口縁部1/8			(外)口縁輪底ナヂ、輪底タタキ方向ハケ、一部透視が悪い。 (内)口縁輪底ナヂ、輪底タタキ方向ハケ。全体的に典雅な形。

第6表 出土遺物觀察表(6)

番号	器種	出土遺様	色調	胎土	焼成	法線 口徑等	基高	残存率	機能・備考
121	菜杯	底D96 底下層	(外)GYR 7/6 横 内)GYR 7/6 横 ZYN 7/3 に ぶい痕跡	やや 強	良好	一	(5.0)	1/8	(外)リテ方向にガタ、延縁部ヨコナダ。 (リテ方向にガタ、縫隙が複数)。
122	高杯	底D96 底下層	(外)GYR 7/6 底黄褐色 (内)GYR 7/6 横	赤	良好	(15.4)	(6.0)	1/8	(外)後一脚部に方向にガタ、底面縫隙が複数、外底の白線部に黒斑が見られる。 (内)縫隙が複数、底面縫隙が複数)。
123	井	底D96 底下層	(外)GYR 8/4 深褐色 (内)GYR 7/6 深褐色 横	強 強	良好	(14.7)	(6.0)	1/8	(外)ナメル付ハゼテナダヒガタ。 (内)縫隙が複数、底面縫隙が複数)。
124	井	底D96 底下層	(外)GYR 8/4 深褐色 灰口 7.5YR 4/1 黄褐色 (内)GYR 7/6 横	やや やや 強	良好	(13.3)	(6.0)	1/8	(外)川縫部共に黒斑が複数、縫隙ハゼテナダヒカタ。 (内)底部付近が方向にガタ、縫隙が複数)。
125	右腰 口縫跡	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/4 にZYN 9 (内)GYR 6/4 黄褐色	赤	良好	18.4	9.5	1/4	(外)口縫跡ヨコナダ、底面ハゼ。 (内)口縫跡ヨコナダ、底面ヨコナダ。
126	広口壺	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/3 底黄褐色 (内)GYR 6/1 黄褐色	赤	良好	(14.9)	(3.0)	1/6	(外)口縫跡ヨコナダ、竹竹文あり、口縫下にヨコナダ後ハゼ、接合痕あり。 (内)ヨコナダ、縫隙が複数)。
127	井	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/3 にぶい痕跡 (内)GYR 6/3 深褐色	やや 強	良好	10.2	18.6	1/2	(外)後一方向ヨコナダ、縫隙ハゼ方向にガタ、底面縫隙のため調節不良、外周縫隙 が複数。 (内)ヨコナダ、縫隙下トヨリハゼガタ、縫隙下トヨリハゼ、タタ方向にガタ。
128	井	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 7/3 にぶい痕 灰口 7.5Y 3/1 黄褐色 (内)GYR 8/2 白	赤	良好	(22.0)	(6.0)	1/3	(外)口縫跡ヨコナダ、底部ハゼテナダ、タタ。 (内)口縫跡ヨコナダ、縫隙下ホタキギタ一部ナダ。
129	井	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/3 にZYN 9 GYR 7/3 にぶい痕 (内)GYR 7/4 にぶい痕	赤	やや	3.4	(0.0)	許容1/4	(外)タカキ、縫隙中央に後成後穿孔した痕跡のものが見られる。 (内)ヨコナダ、黒斑あり。
130	井	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 8/1 桃色 一赤 2.5Y 2/1 赤 (内)GYR 7/3 にぶい痕	赤	良好	(3.0)	(3.2)	直角のみ 充てん	(外)縫隙ヨコナダ、左上方向にハゼ、縫隙下方タカキ方向ハゼナダでタカキを調節して いる。底面ハゼあり、黒斑が見られる。 (内)縫隙ヨコナダ、充てん。
131	底部	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 4/1 黄褐色 (内)GYR 4/2 黄褐色	赤	良好	5.3	(2.0)	底面のみ	(外)ヨコナダ、縫隙の有り無り(ハゼ)、縫隙が複数。 (内)ハゼ、内側一面縫隙が斜め。
132	底部	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/4 にぶい痕跡 (内)GYR 6/3 にぶい痕	赤	良好	(4.0)	(2.0)	直角のみ 充てん	(外)タカキ方向にガタ、ヨコ方向ナダとビオタニの跡が見られる。底面ノボロ。
133	底部	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 7/3 にぶい痕 (内)GYR 6/3 ヨロシ	赤	良好	5.3	(0.0)	直角のみ 充てん	(外)縫隙部に黒斑があり、左上方向にハゼ。 (内)ヨコナダ。
134	把手付 台付鉢	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/2 深褐色 (内)GYR 5/6 黑黄褐色	赤	良好	18.8	14.7	縫跡1/4 ハゼ充てん	(外)縫隙部に黒斑があり、左上にヨコナダ。井筒ハゼギタ、縫隙タクシのシナ ギ、縫隙部ヨコナダ、把手付ハゼギタ、把手付充てん、シナ一層づつという可能性がある。 (内)ヨコナダ。
135	高杯	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 6/4 橙 (内)GYR 6/4 橙	赤	良好	15.2	(2.0)	縫跡のみ	(外)表面に黒斑が見られている。縫隙の有無を確認不能。頂部も不明瞭。 (内)底土の充填されている。内面に脱けの跡が見られる。
136	高杯	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 4/2 黄褐色 (内)GYR 5/3 にぶい痕跡	赤	良好	16.6	(13.0)	縫跡のみ 充てん	(外)縫隙部が複数、縫隙付近ガタ。 (内)縫隙が複数、底面底付、縫隙のため調整不良。
137	高杯	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 7/4 にぶい痕 (内)GYR 7/4 にぶい痕	赤	良好	14.0	(0.0)	3/4	(外)底面縫隙のため調整不良、縫跡タカキハゼギタのらぎ。
138	高杯	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 8/2 桃色 (内)GYR 7/2 にぶい痕跡	赤	良好	(13.0)	(3.0)	直角1/2	(外)タカキ後ハゼギタ、底部ハゼギタキタヨコナダ、縫隙付近が複数。 (内)ヨコナダ。
139	台付鉢	自然表面N903 上部擦土層	(外)GYR 4/3 にぶい痕跡 (内)GYR 5/2 黄褐色	赤	良好	(8.0)	(0.1)	直角1/4	(外)縫隙部と底面が複数、わざかにハゼ員が見られる。縫跡ヨコナダ。 (内)ヨコナダ。

V. まとめ

今回の第28次調査の調査成果を、平等坊・岩室遺跡およびその周辺におけるこれまでの調査による知見を踏まえて概観しておきたい。

環濠

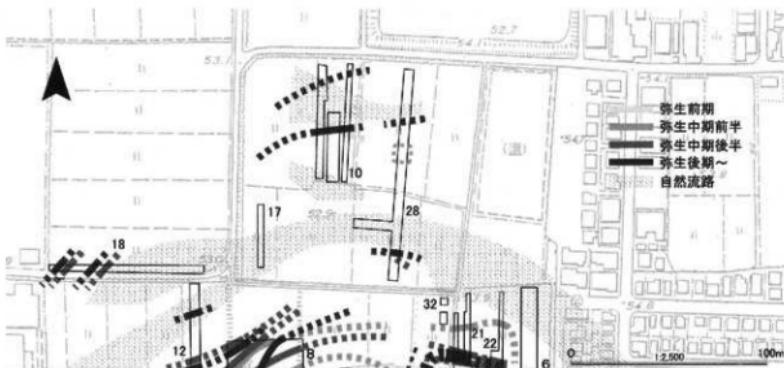
第28次調査溝SD06、SD07は集落北側の環濠帯の一部を構成すると思われる。周辺でこれまでに確認された遺構をみると、第8次調査SD02（弥生時代後期）（青木1996）、第12次調査SD01・SD03（弥生時代中期後半）（青木1996）などが関連する可能性があるだろう。今回の第28次調査SD06、SD07の北には自然流路NR01がある。これより北方の微高地上には方形周溝墓状遺構、井戸SE01などを見られるのみで弥生時代の遺構密度は高くない。基本的には集落の北側縁辺の状況を反映していると考えられる。

自然流路

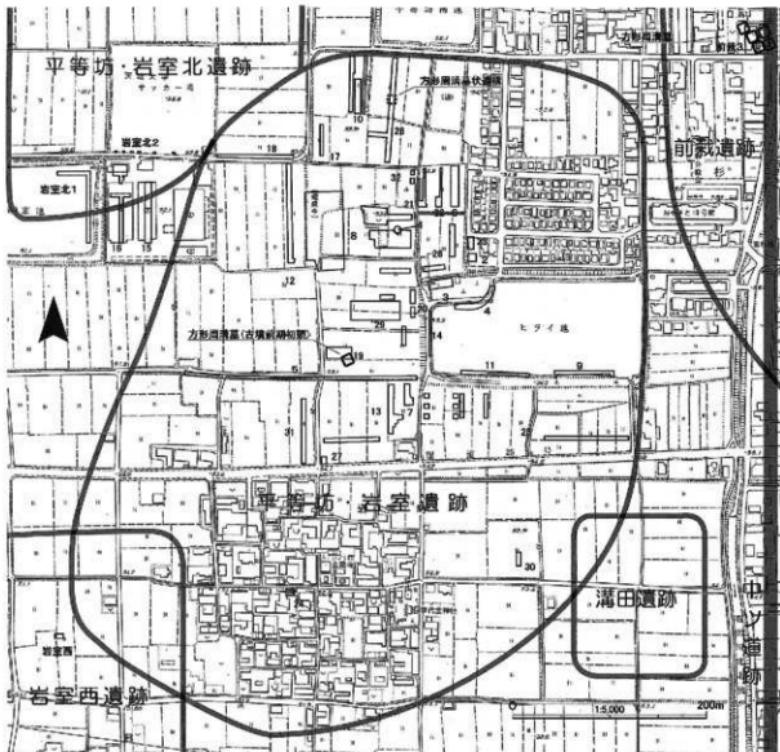
第28次調査で検出した自然流路NR02は、これまで平等坊・岩室遺跡の北部で実施された調査で確認されてきた自然流路との関連が想定されるものである。まず、第28次調査地の東では、第22次調査NR01（青木2005）、および第6次調査「河道部」（松本1983）において、弥生時代中期～奈良時代の遺物を包含する流路が確認されている。また、第28次調査地の西では、第17次調査NR01・02（青木2003）、第18次調査「自然河川」（松本2003）において、同様に弥生時代中期～平安時代の遺物を包含する流路が確認されている。それぞれの流路で確認された出土遺物の時期は第28次調査NR02と同様であり、一連の流路である可能性が高い。集落域の北辺を北側に大きく蛇行しながら西流する自然流路を想定することができる。

方形周溝墓状遺構

今回の第28次調査では、第1調査区の中央付近で、弥生時代中期の完形土器群を作う溝を検出し、方形周溝墓に伴う可能性があると考えた。想定される規模は一边約9m程度に復元される。このほかに方形周溝墓の可能性がある遺構は検出できておらず、通有の方形周溝墓が複数で群を構成する点からすると問題を残すが、溝内からの土器群の出土状況を重視してこのように判断した。



第21図 平等坊・岩室遺跡北部の様相



第22図 方形周溝墓の検出地点

平等坊・岩室遺跡では、第19次調査（松本1999）において古墳時代前期初頭の方形周溝墓を検出しているほかに方形周溝墓の検出例が無く、墓域の位置が問題であった。周辺では、これまでに北東約40mの地点にある前裁遺跡第3次調査（松本1998）において弥生時代中期中葉の方形周溝墓5基が検出されており、この付近を平等坊・岩室遺跡の墓域と想定していた。今回の第28次調査で方形周溝墓の可能性のある構造が検出されたことにより、集落の北側一帯に墓域を点在させていた可能性を新たに考えられるようになった。この想定の当否は今後の調査を通じて明らかにされていくだろう。

7世紀代の瓦

平等坊・岩室遺跡では、これまでに第8次調査や第10次調査（青木1993）において、奈良時代前後の掘立柱建物などが検出されており、当該時期の寺院もしくは官衙に類する施設が存在したことが推定されている。今回の第28次調査区北半は第10次調査区のすぐ東側に隣接するが、第10次調査区で確認されたような奈良時代の掘立柱建物は検出されなかった。この付近が微高地であることから、後世の削平が及んでいる可能性も考えられる。なお、第28次調査では7世紀後半に属する素弁蓮華文軒丸瓦

片が出土した。平等坊・岩室遺跡における古代瓦の出土例のなかでも最古のものであり、存在が推定される当該時期の施設との関連が注目されるところである。

(石田大輔)

[参考文献]

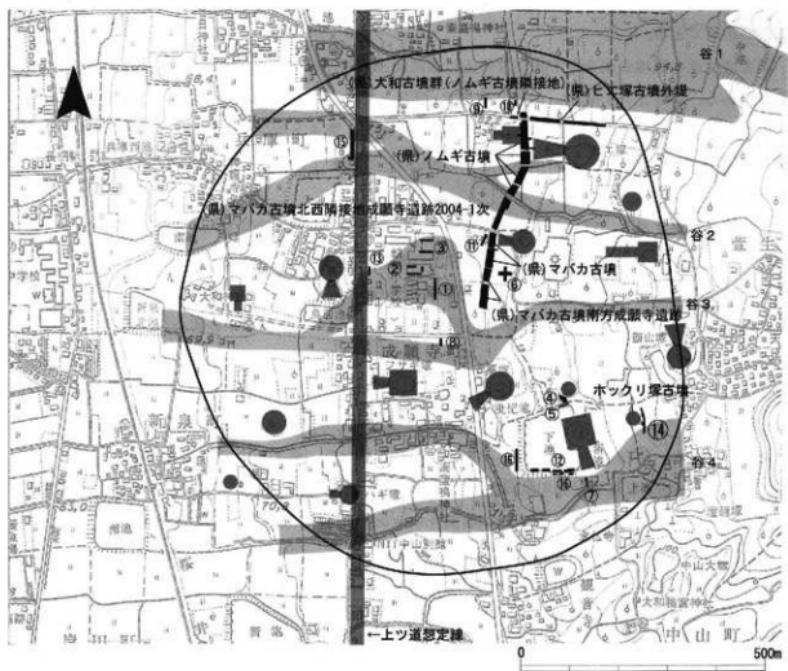
- 第6次 松本洋明1983「天理市平等坊・岩室遺跡第6次調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1982年度第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 第8次 青木勘時1996「平等坊・岩室遺跡（第8・11・12次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成4・5年度 天理市教育委員会
- 第10次 青木勘時1993「平等坊・岩室遺跡（第10次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成4年度・国庫補助調査 入天理市教育委員会
- 第12次 青木勘時1996「平等坊・岩室遺跡（第8・11・12次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成4・5年度 天理市教育委員会
- 第17次 青木勘時2003「平等坊・岩室遺跡（第17次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成8・9年度 天理市教育委員会
- 第18次 松本洋明2003「平等坊・岩室遺跡（第18次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成8・9年度 天理市教育委員会
- 第19次 松本洋明1999「平等坊・岩室遺跡（第19次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成10年度・国庫補助調査 天理市教育委員会
- 第22次 青木勘時2005「平等坊・岩室遺跡（第22次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成14・15年度・国庫補助事業 天理市教育委員会
- 前裁遺跡第3次 松本洋明1998「前裁遺跡」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成6・7年度 天理市教育委員会

2. 成願寺遺跡（第14次）

I. 調査の契機と経過（第23図・第25図）

今回の調査は、天理市南部の萱生町における市道敷設に伴う調査として実施したものである。調査対象地は成願寺遺跡に該当するほか、ホックリ塚古墳（円墳、直徑約25m）に近接する。このため、関連する遺構や遺物包含層の有無確認、また市道敷設時に極力遺構を保護する工法を取るために、遺物包含層・遺構面までの深さを知ることを目的として、発掘調査を行った。

調査対象地は、柿畠の中に帯状の空閑地を設けて、通路として利用されてきた場所であり、今回の調査はこの通路を市道として整備する工事に先立つものである。このため、調査対象地間際にまで柿畠が迫っていることから、調査区の幅を十分に確保することが困難であり、結果的には幅1mの狭長な調査区を設定し、部分的に拡張する形での調査となった。南北に長い対象地内に、周囲の地形や埋設物の位置などを考慮して、食い違い部や屈曲部を作り形で調査区を設定した。トレンチ北端から墳丘北側の食い違い部までを第1トレンチ、墳丘北側の食い違い部から墳丘東側の屈曲部までを第2ト



第23図 成願寺遺跡調査区配置・旧地形復元図 (S=1/10000)

レンチ、墳丘東側の屈曲部から墳丘南側の食い違い部までを第3トレーニング、それ以南を第4トレーニングとした。また、第4トレーニングからやや南方に離れて、墳丘南側に現存する谷地形の肩部を確認するためのトレーニングを設定し、第5トレーニングとした（第25図）。

現地では平成18年6月12日に調査を開始し、同年7月18日に全ての作業を終了した。調査対象地内の総調査面積は、約100m²であった。

II. 調査の概要

I. 基本層序（第24図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査においては、第2～第3トレーニングで遺物包含層（II・III層）の下方に比較的安定した基盤層（IV層）を検出したが、北側（第1トレーニング）及び南側（第4・第5トレーニング）では砂礫を伴う河川性の堆積（I-2層及びII-2層）が深く、底をなす安定地盤は検出することができなかった。このことから、第2・第3トレーニング付近に北東～南西方向にのびる尾根が存在し、その北側及び南側は地形的に大きく落ち込んで谷地形をなす、という旧地形が復元できる。また、第2・第3トレーニングはホックリ塚古墳墳丘に近接することから、ホックリ塚古墳築造場所の遺地にあたり、地盤の安定した尾根上が選択されたことが指摘できる。

調査地付近の現地表面をなす柿畠耕作面は標高98.8～99.9mを測り、南から北へ向かって高くなる地形である。耕作上（I-1層）の厚さは第2・第3トレーニングで0.2～0.4m、第1トレーニング北半及び第4トレーニングで0.8m、第5トレーニングで0.3～0.7mを測る。第4トレーニングでは、I-1層下面が段状に下がり、段以下では後述する河川堆積の上に0.5mほどの盛土（I-1層下半）を施して整地している様子がうかがえる。

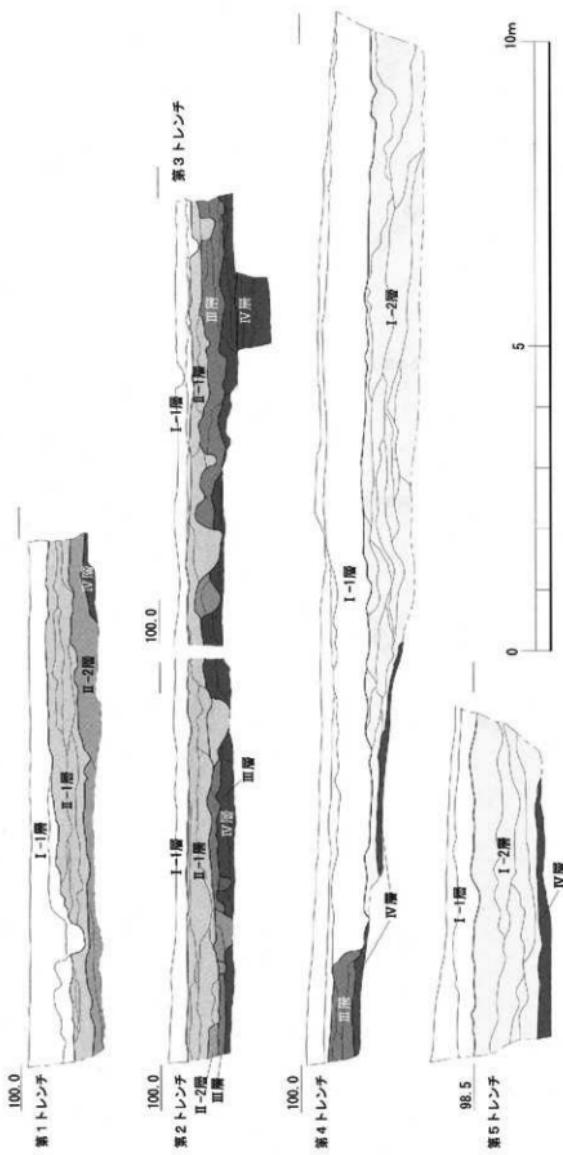
I-1層を除去すると、第4トレーニング南半～第5トレーニングでは河川堆積層（I-2層）、第1トレーニング～第4トレーニング北半では弥生時代後期～古墳時代の遺物を含む包含層（II-1層）が現れる。

I-2層は中近世の遺物を含む河川堆積層で、厚さ100cm以上を測る。上方は灰黄色系の砂礫と微砂の互層、中ほどは黒褐色系の砂礫と砂の互層、下方は黄灰色～褐色系の砂層からなる。

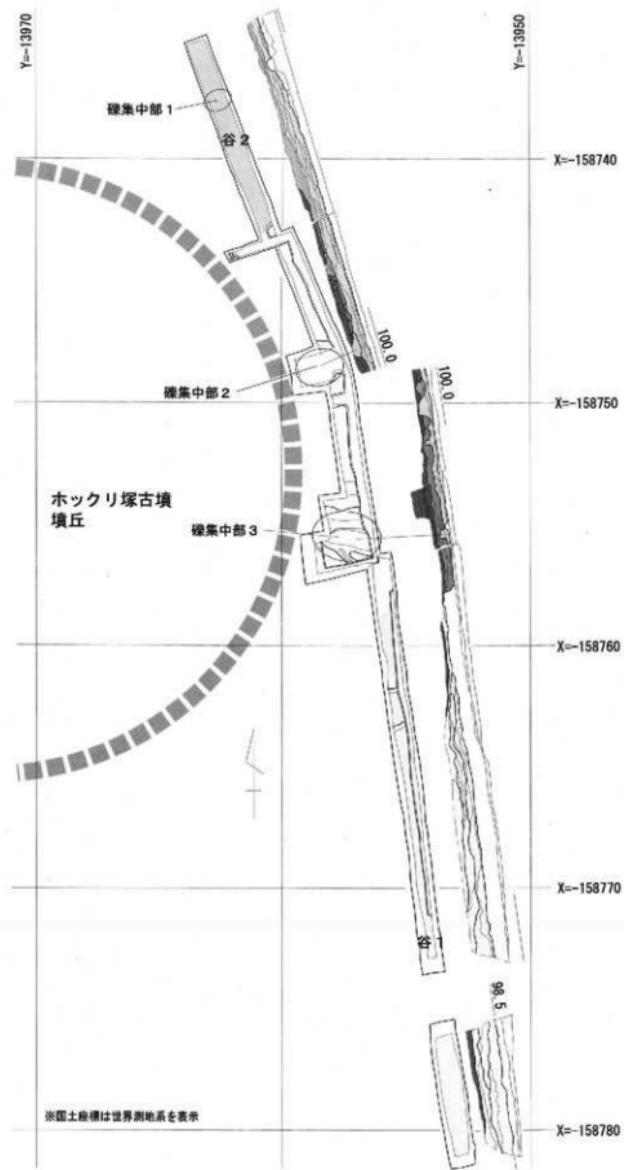
II-1層は第1トレーニングから第4トレーニング北端部にかけて存在する遺物包含層で、厚さ15～50cmを測る。灰黄色～黒褐色系の砂～砂質シルトを主体とする層中には、弥生時代後期後半段階の上器片を含む。第1トレーニングにおいてはII-1層下方に河川堆積層（II-2層）が存在し、同じく弥生後期後半段階の上器片を含む。灰白色～にぶい黄色の粗砂～砂礫からなり、拳大前後の礫を多く含む。層厚は50cm以上を測るが、湧水による壁面の軟弱化が著しく、危険防止のためII-2層途中で掘削を中止している。

II-1層を除去すると、第2トレーニングから第4トレーニング北端にかけて、にぶい黄褐色～黄灰色系の砂～砂質シルトを主体とする遺物包含層（III層）があらわれる。層中には、弥生時代中期末～後期前半の土器片を含み、層厚は10～35cm前後を測る。

III層の下部は全く遺物を含まない土層（IV層）となる。IV層は第2～第4トレーニング北端ではにぶい黄色～黒褐色系の極めてしまりの強い細砂～砂質シルト、第1・第4・第5トレーニングでは黒褐色粘土からなる。完掘後に第3トレーニング南端付近で深掘りによる補足調査を実施したところ、前者の下方で後者を検出しており、前者を尾根上に形成されたベース層、後者を基盤層となる地山と捉えることが



第24図 トレンチ東壁上層断面図 (S=1/80)



第25図 造構配図および土層断面図 (S=1/200)

できよう。前者の層厚は最大で30cm弱を測る。

2. 主な遺構と遺物（第25～29図）

今回の調査区はホックリ塚古墳に極めて近接しており、古墳に伴う遺構の検出が期待されたが、調査区内では明確な人為的遺構を検出することはできなかった。自然の營力の所産として調査中に注目されたものには、礫集中部3か所と谷2条がある。谷2条のうち南側の1条は、II-1層上面を検出面として中世の遺物を含むが、北側の1条及び礫集中部はIII層上面を検出面として、遺物を含まないものと弥生時代後期後半代の遺物を含むものがある。

谷 1（図版13）

第4トレンチ北半部に肩を持ち、南へドがっていく谷地形である。第5トレンチ南側の調査区外に広がるため、南側の肩は検出できていないが、現状地形は調査地南側の現流路を谷底として下がっており、谷1についても同様の傾向を示すものと思われる。遺物は中世の東播系須恵器のほか、小片のため図示していないが土師器羽釜片や上御皿片などを含む。

1は東播系須恵器擂鉢の口縁部～体部片である。体部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部は上下にツマミ突出して端部は幅広の面をなす。口縁端面が大きく外反する部分があり、片口部の端に当たると思われる。口縁端面には部分的に自然釉の付着がみられる。また、内面の下端は使用による器面の荒れが著しい。

谷 2（図版14）

第1トレンチ南端部に肩を持ち、北へ下がっていく谷地形である。第1トレンチ北側の調査区外に広がるため、北側の肩は未検出である。II層下部のII-2層を埋土とし、遺物は細片を含むのみで時期の特定は困難であるが、上層のII-1層に弥生時代後期後半代の遺物を含むことから、谷2の時期の下限を当該期に求めることが可能であろう。

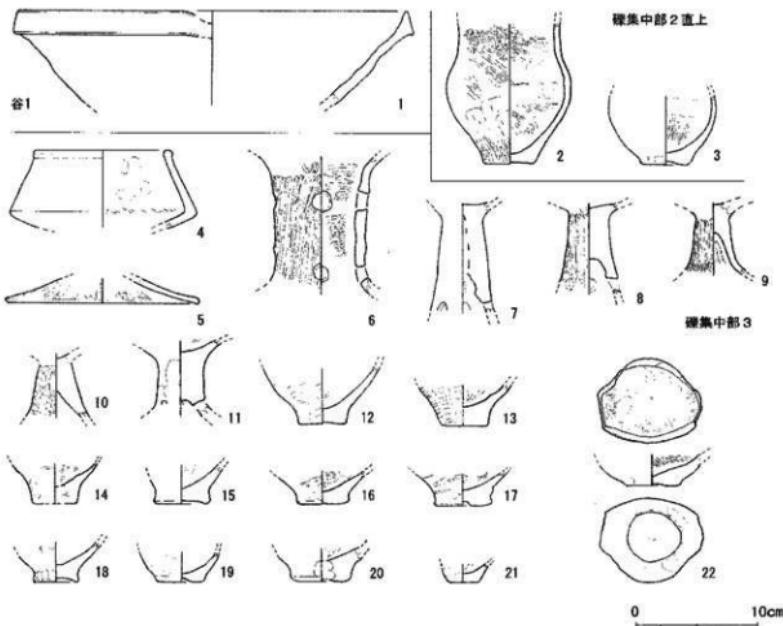
礫集中部1（図版14）

第1トレンチで検出した礫集中部である。幅30cm前後、厚さ20cm前後を測り、最大で長径20cm程度の礫が帶状に集中する。旧耕作上の直下、II層の上面に形成されたもので、礫層中に遺物を含まない。礫の堆積状況に規則性や人為性も認め難いことから、自然の營力によって形成された礫集中部であると考えられる。

礫集中部2（図版14・15）

第2トレンチ南端で検出した礫集中部である。幅70cm前後、厚さ45cm前後を測り、最大で長径10～15cm程度のやや小ぶりな礫が帶状に集中する。礫層の上面で、弥生時代後期後半の赤片が出土した。礫の堆積状況に規則性・人為性は認め難く、自然の營力により形成された礫集中部と考えられる。

2・3は弥生土器の壺である。2は長頸壺の底部～頸部片である。やや突出する平底の底部から球形の胴部が立ち上がり、頸部は太くほぼ直立する。接合痕が胴部上半の内面にみられ、この接合痕を半ば消すように縦横のナデで成形したのち、内外面に継ぎ～左上上がりのハケで調整する。頸部外面のハケは他の部分のそれに比べて密である。なお、胴部外面上に黒斑を有する。3は底部～胴部最大径付近までの破片である。中央部が凹んでドーナツ状を呈する底部から球形の胴部が立ち上がる。外面は著しく磨滅しており、底部側面から胴部下端にかけて指頭圧痕が多くみられるのみである。内面は胴



第26図 各遺構出土遺物実測図 (S=1/4)

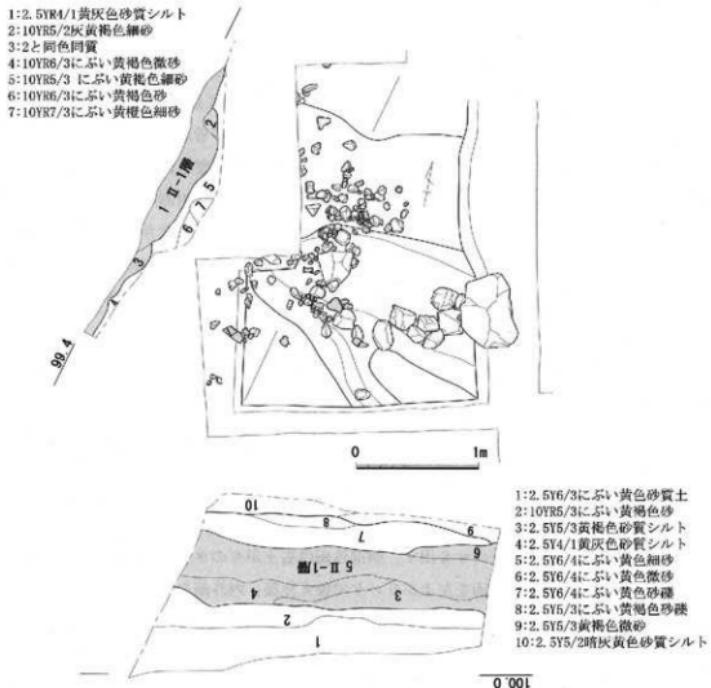
部下半に縦位ハケ、胴部最大径付近に横位ナデが看取される。

砂集中部3 (第27図・図版15)

第3トレント南端で検出した砂集中部である。幅120cm前後、厚さ30cm前後を測り、おおむね長径20cmまでの砾からなるが、南側では長径50~120cmの大ぶりの礫が日立つ。砾層中に弥生時代後期後半ごろの土器片を多く含む。大型の礫を含むものの、堆積状況に規則性・人為性は認め難く、自然の營力により形成された砂集中部と考えられる。

4は鉢である。屈曲する胴部から口縁部が立ち上がり、口縁端部は平らな面を持つ。外面は磨滅が著しく調整が不明であるが、内面には縦横のナデが看取される。また、内面の屈曲部にはヘラ状工具痕がみられ、屈曲部以下の内面はヘラミガキ調整の可能性がある。全体に無文化しており、後期初頭に位置づけられる。5は高壙脚裾部である。やや外反して広がり、裾端部はツマミ上げる。外面に縦位ミガキ、内面に横位～左上がりハケを密に施す。6は器台である。体部はほぼ直立し、上方及び下方は大きく屈曲する。外面は縦位ミガキ、内面は上方を横位ミガキ、下方を横位ハケにより調整するほか、屈曲部の外面にわずかながら縦位ハケが看取できる。外側から4方向2段にスカシ孔を穿つ。

7~11は高壙脚部である。7はやや長めで中空の脚柱部で、3方向に円形スカシ孔を穿つ。外面は磨滅が著しく調整は不明であるが、内面には成形時のシボリ痕が顕著に残り、脚柱部下端にはシボリ



第27図 積集中部3平面図 (S=1/40)

痕を消す横位ナデが看取できる。8は7よりやや短い中実の脚柱部で、3方向に円形スカシ孔を穿つ。外面は縦位ミガキ、内面はヨコナデで調整され、成形時のシボリ痕跡を残さない。9は短く中空の脚柱部で、下方で大きく屈曲して脚裾部へ続く。脚柱部上端の周間に粘土を付加して坏底部とする。外面は縦位ミガキ、内面はヨコナデにより調整されるが、内面は成形時のシボリ痕がごくわずかに残る。10は開きの大きい中実の脚柱部で、下方でやや屈曲して脚裾部へ続く。脚柱部上端の周間に粘土を付加して坏底部とする。外面を縦位ミガキ、内面をヨコナデにより調整する。11はほぼ垂直にのびる短い中実の脚柱部である。脚柱部と脚裾部の境目付近に3方向の円形スカシ孔を穿つ。外面はヘラミガキがみられず、ナデのみで調整する。坏部内面にはナデおよび縦位ハケがみられる。

12~21は壺・甕の底部片で、このうち12~20は底部が突出する形態を示す。12・13は甕の底胴部で、いずれも平底である。12は底部側面をユビオサエで成形したのち、外面に右上がりタタキを施す。内面はおおむねナデ調整であるが、ところどころ横位→左上がりのハケが看取できる。13は外面に横位タタキ、内面に放射状の板ナデがみられる。14・15は壺底部か。14は平底で、内外面とも磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面に左上がり方向の板ナデ痕がわずかに看取される。胴部は薄手である。

15は底部縁辺をツマミ出す。器壁は厚手であるが胎土は砂粒を多く含んで粗く、底部側面～端面は磨滅が著しい。外面に指頭圧痕、内面に左上がり方向の板ナデがわずかに看取される。16～18は壺底部か。16は平底で、底部側面に指頭圧痕、底部～胴部外間に右上がり方向のタタキがみられる。内面は縦位～右上がりのハケ調整を施す。内面は使用により黒化する。17は底部中央付近が段を持って凹む。外面に右上がり方向の目の粗いタタキ、内面に左上がり方向のハケが看取される。18は底部縁辺をツマミ出し、丁寧なユビオサエによって形を整える。胴部外面もナデ調整されるが、内面は磨滅が著しく調整は不明である。19は壺底部である。底部の突出が弱く、中央部に円形のくぼみを持つ。全体に磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面にやや強い縦位ナデがわずかに看取される。20は平底の壺底部で、器壁は厚手である。内外面とも磨滅が著しいが、外面に指頭圧痕、内面に放射状ハケが看取される。内面は使用により若干黒化する。21は小形壺の底部で、内外面とも磨滅が激しく、指頭圧痕がわずかに看取されるのみである。

22は皮袋形土器の胴部か。底部はほとんど突出せず、中心付近が段を持って凹む。胴部の立ち上がりは回転体をなさず、皮袋形土器のようにラグビーボール状の胴部になると思われる。外面には指頭ナデやナデによって調整され、内面には左上がり方向のハケが看取される。

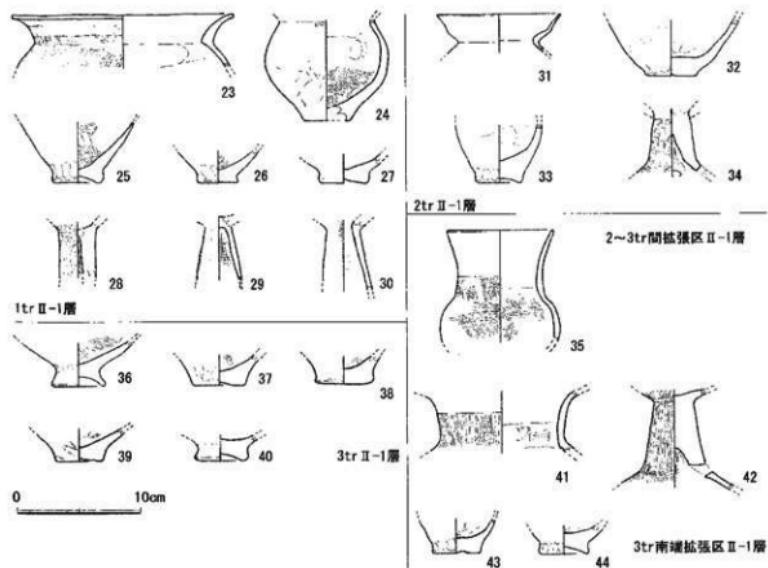
遺物包含層出土遺物

II-1層 23～30は第1トレンチから出土した。23は壺の口頸部である。球形の胴部に外反する口頸部を接合しており、頸胴部界および口頸部上半に接合痕がみられる。頸胴部界は明瞭な段を持って屈曲する。口縁端は外下方へ若干ツマミ出す。胴部外面は右上がりのタタキが明瞭に残り、内面は横位板ナデで調整する。口頸部は外面を左上がりハケで整えた後、内外面をヨコナデ調整する。24は小形壺の底部～胴部である。やや突出する底部から球形の胴部が立ち上がる。胴部上半には接合痕がみられ、器壁は法量に比して厚手である。外面は胴部下半に板ナデ、上半にわずかに縦位ハケがみられる。内面は胴部下半を横位ハケを施した後に上半を横位ナデし、頸胴部界には接合のための縦位ナデを施す。

25～27は壺・壺の底部である。25は底部の縁辺をツマミ出し、丁寧なユビオサエやナデにより形を整え、接地部には面取りを施し平らな接地面を作る。内湾する胴部の外面は磨滅が著しく調整不明であるが、内面は左上がりの板ナデを丁寧に施す。底部のほぼ半分とその上部にかけて大きな黒斑がみられる。26は突出する平底の底部で、底部側面を指頭正により丁寧に整える。やや内湾する胴部は内外面とも磨滅が著しいが、内面の放射状板ナデがわずかに看取される。27は突出して中央部が若干凹む壺底部で、丁寧なユビオサエやナデにより形を整える。内面は使用により黒化する。

28～30は高环脚柱部である。28は直立する中空の脚柱部で、器壁は厚い。外面は幅の狭い縦位ミガキを密に施し、内面には成形時のシボリ痕跡が明瞭に残る。29は中空の脚柱部で、器壁は薄く下に開く。外面は磨滅が激しく、面取りの単位がわずかにうかがえる。内面は成形時のシボリ痕跡をヨコナデで消すが、わずかに消え残る。30は29と類似するが、磨滅した外面に縦位ミガキがわずかにみられ、内面は横位ケズリによってシボリ痕跡を消す。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して環底部とする。内面は黒みを帯びる。

31～34は第2トレンチから出土した。31は壺の口頸部である。口縁部下半は内湾して立ち上がり、上半は若干外反する。端部は丸くおさめる。内外面をヨコナデで調整する。32は壺の底部～胴部下半



第28図 II-1層出土遺物実測図 (S=1/4)

か。底部は突出しほぼ平底であるが、中心付近に凹みを持つ。底部側面は指頭圧で整える。胴部外面は磨滅するが、横位ハケがわずかにうかがえる。内面は縦位ナデにより調整する。33は小形壺の底部～胴部下半である。底部は突出し、縁辺を若干ツマミ出して指頭圧やナデにより丁寧に整える。内湾する胴部は内外面とも著しく磨滅するが、内面に指頭圧痕の輪郭がわずかに看取される。34は中空で下に開く高脚柱部である。外面は縦位ヘラナデ後に縦位ヘラミガキで調整し、内面はシボリ成形後に脚裾部をヨコナデ調整する。脚柱部と脚裾部の境付近に円形スカシ孔が穿たれ、配置から4方1段になると思われる。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して杯底部を構成する。

35は第2トレレンチ～第3トレレンチ間の拡張区で出土した壺である。35は口縁部～胴部最大径付近である。球形の胴部から、緩やかに外反する長い頸部が立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内外面とも胴部から頸部下半にかけて横位～左上がりのハケを施したのち頸部上半～口縁部をヨコナデ調整する。

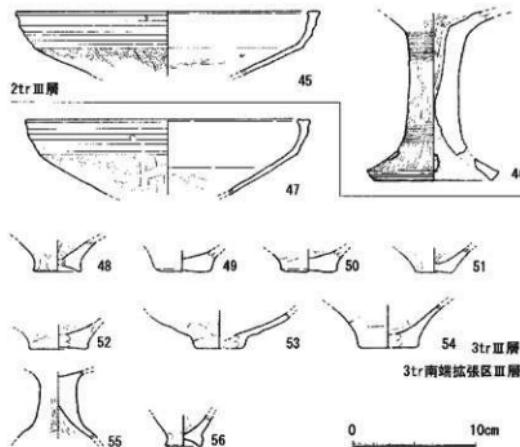
36～40は第3トレレンチで出土した壺・甕の底部である。36は突出する底部の縁辺を強くツマミ出し、丁寧なナデや指頭圧で整えて縫部は丸くおさめる。やや内湾する胴部の外面には指頭圧、内面には放射状の板ナデが看取される。37はやや突出する底部の中央が円形に凹むドーナツ状を呈する。外面に縦位板ナデ、内面に横位～左上がりハケが看取される。38は突出する平底の壺底部か。側面を弱い指頭圧により難に整える。内面は放射状の板ナデが看取される。39は突出する底部の縁辺を若干ツマミ出す。内外面は磨滅が著しく、外面に指頭圧、内面に放射状板ナデがわずかに看取される程度である。

40は壺底部か。突出する底部の縁辺をツマミ出し、側面および底面を強い指頭圧やナデで整える。全体的に著しく磨滅しており、内面の調整は不明である。

41～44は第3トレンチ南端の拡張区で出土した。41は壺の頸部である。上端は大きく外反してII縁部に続き、下端は稜をもって屈曲して胴部に続く。頸胸部界付近に内面への粘土付加があり、胴部の成形後に頸部を接合したことがうかがえる。頸部外面の下半に縦位ハケ、内面の大半に横位ハケで調整した後、上半の内外面にヨコナデを施す。42は高坏の壺底部～脚裾部上半である。下に開く中央の脚柱部から大きく外反して脚裾部に至る。脚柱部と脚裾部の境に3万1段の円形スカシを穿つ。外面は全面的に縦位ミガキで調整され、内面は穿孔以下にヨコナデを施すが、それより上部では成形時のシボリ痕跡が残る。43・44は壺・甕底部である。43は突出した平底の壺底部で、側面および底面を丁寧な指頭圧やナデにより整える。胴部外面の調整は磨滅のためか不明瞭であるが、内面は縦位ナデが看取される。44は突出する底部の縁辺をツマミ出し側面および底面を丁寧な指頭圧やナデで整える。全体的に磨滅が著しく胴部外面の調整は不明であるが、内面には放射状板ナデが看取される。

Ⅲ層 45・46は第2トレンチで出土した高坏である。45は壺部で内湾して立ち上がる口縁部の外面に3条の凹線を施し、II縁部端は内側へツマミ出して上端に平らな端面をもつ。体部外面は縦位のハケおよびヘラケズリ、内面はナデを主体とするが一部横位ヘラミガキで調整される。外面の凹線文帯部分に粗圧痕がみられる。46は脚部である。ほぼ直立する器壁の厚い中空の脚柱部から滑らかに屈曲して脚裾部に至る。シボリ成形後に外面を縦位ミガキ、裾部内面をヨコナデで調整する。また、脚裾部端面は上下にツマミ出されて幅広の端面となり、そこに2条の凹線文を有する。調整後に2条1対の直線文を脚柱部と壺部の境に5単位、脚柱部と脚裾部の境に4単位施して文様帯とし、後者の直下に3方向1段の円形スカシを穿つ。脚柱部上端では、充填された壺底部粘土との接合面に縦位ハケ調整が看取される。

47～57は第3トレンチで出土した。47は高坏壺部である。内湾して立ち上がる口縁部の外面に3条の凹線を施し、口縁部端は内側へツマミ出して上端に平らな端面をもつ。体部外面は縦位～左上がり方向のハケ、内面はヨコナデを主体として一部横位ヘラミガキで調整される。口縁部から体部上半にかけての外面に黒斑と破裂痕を、体部内面に粗圧痕を有する。48～57は壺・甕底部である。48は突出する底部の縁辺をツマミ出し、



第29図 Ⅲ層出土遺物実測図 (S=1/4)

側面および底面を丁寧な指頭圧やナデで整える。内面は磨滅するが、放射状板ナデがわずかに看取される。49は突出する平底の底部で、側面および底面を弱い指頭圧やナデで整える。外面に右上がりタタキ、内面に左上がりハケが看取される。また、内面は使用により黒化する。50は壺底部か。やや突出する形態で、底部は中央部がわずかに凹む。外面に指頭圧痕、内面に放射状板ナデの工具痕が看取される。51は甕底部か。突出する平底の形態で、内外面とも磨滅して調整は不明瞭であるが、外面に指頭圧痕がわずかに看取される。52は壺底部か。やや突出する平底の形態で、外面は磨滅して調整が不明瞭であるが、内面には放射状板ナデが看取される。また、内面は使用により黒化する。53は壺底部～胸部下端である。突出する平底の底部から、やや内湾する胸部が緩角度で立ち上がる。全体に磨減が及び、外面に指頭圧痕や板ナデ工具痕をわずかに見て取れるのみである。54は甕底部か。突出する平底の形態で、全面に磨減を受けるが、外側面に板ナデ工具の痕跡がわずかに看取される。

55・56は第3トレンチ南端拡張区で出土した。56は高坏脚部である。ほぼ直立する中実の脚柱部から緩やかに屈曲して脚裾部が広がる。脚裾部は内湾する形態で、器壁は薄い。内外面とも著しく磨滅しているが、外面に縦位ヘラミガキ、内面に左上がりヘラケズリがわずかに看取される。56は甕底部である。突出する底部の縁辺をツマミ出し、側面および底面を指頭圧やナデにより整える。全体的に磨減が著しいが、内面に放射状板ナデの工具痕がわずかに看取される。

III.まとめ

今回の調査では、ホックリ塚古墳に極めて近接する位置での調査であったことから、同古墳に関わる遺構・遺物の検出が期待された。しかし、古墳に関わる遺構は全く検出できず、遺物についても古墳時代に属するものはごくわずかで、弥生時代中期末～後期後半と中世の遺物が大半を占める結果となつた。古墳に関わる遺構・遺物がほとんど見られない点をどのように解釈するかについては、今回の狭小な調査区内での成果からは到底判断し得ないが、今後ホックリ塚古墳近傍で発掘調査をおこなう際には、古墳に関わる遺構の存否について一層の注意を払う必要がある。

弥生土器はローリングを受けたものが多い一方で、ほとんどローリングを受けていないものも一定数見られ、調査地より山側に当該期の集落域が広がっていたことが推定される。(北口聰人)

第7表 出土遺物観察表(1)

番号	器種	色調	胎土	焼成	法線		残存率	調査・備考
					曲率	底径		
1	壺	5Y6/1 灰	密 (石英・長石多く含む)	良好	(31.5)	(7.7)	11様1/8	内外面ヨコナデ 口縁断面に自然釉
2	長頸壺	7.SYR7/4 にぶい・橙	青 (角閃石・雲母含む)	良好	底径4.2	(11.5)	底部光存 (外)縦腹へ左上凹ハケ 脚部1/2	(内)横腹・ヨコナデ・左上凹ハケ
3	瓶	7.SYR7/6 橙	やや青 (石英・長石多く含む)	良好	底径3.8	(6.7)	底部充存 脚部1/2	(外)縦腹不明 (内)縦腹ハケ・横腹ナデ
4	鉢	10VR7/4 にぶい・黄	密 (長石・雲母含む)	良好	(10.4)	(6.4)	体部1/8	(外)縦腹不明 (内)横腹ナデ・ヘジミガキ?
5	高杯	7.SYR7/4 にぶい・橙	青 (長石・石英・雲母含む)	良好	(脚部15.8)	(2.0)	脚部1/4	(外)縦腹ミガキ (内)横腹ハケ・横腹ミガキ
6	鬚台	10YR5/2 灰黄褐	青 (長石・石英・雲母少し含む)	良好	(体部径7.6)	(11.4)	体部1/4	(外)縦腹ミガキ (内)横腹ハケ・横腹ミガキ
7	高杯	10YR7/5 明黄褐	やや青 (長石・石英を少し含む)	良好	脚柱部径4.8	(8.9)	脚柱部充存	(外)縦腹不明 (内)ヨリ横腹ナデ
8	高杯	10YR7/4 にぶい・黄	やや青 (長石・石英含む)	良好	脚柱部径4.6	(7.4)	脚柱部充存	(外)縦腹ミガキ (内)ヨリナデ
9	高杯	10YR6/4 にぶい・黄	やや青 (長石・石英・雲母含む)	良好	脚柱部径4.5	(6.8)	脚柱部充存	(外)縦腹ミガキ (内)ヨリナデ
10	高杯	7.SYR7/6 橙	やや青 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径4.6	(5.2)	脚柱部光存	(外)縦腹ミガキ (内)ヨリナデ
11	高杯	10YR6/4 にぶい・黄	やや青 (長石・石英含む)	良好	脚柱部径4.0	(5.8)	脚柱部光存	脚部外面ナデ 脚部内面ナデ・縦腹・ハケ
12	甕	10YR6/3 にぶい・黄	やや青 (長石・石英・雲母含む)	良好	底径4.0	(4.6)	底部充存	(外)上凹が切タキ (内)横腹・へん・上凹ハケ
13	甕	2.5YR6/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	底径3.8	(3.4)	底部充存	(外)縦腹タキ (内)放射状ナデ
14	甕	5YR6/3 橙	やや青 (石英・長石含む)	良好	底径3.5	(3.3)	底面1/3	(外)縦腹正 (内)上凹が切タキ
15	甕	10YR5/2 灰黄褐	密 (石英・長石多く含む)	やや軟	底径4.7	(3.2)	底部充存	(外)横腹 (内)左上が切板ナデ
16	甕	10YR6/4 にぶい・黄	やや青 (長石・長石多く含む)	良好	底径4.4	(2.7)	底部充存	(外)縦腹・右上が切タキ (内)横腹・へん・上凹ハケ
17	甕	10YR4/1 灰	やや青 (長石・石英含む)	良好	底径4.7	(2.6)	底部充存	(外)上凹が切タキ (内)横腹・へん・上凹ハケ
18	甕?	5YN6/4 青	密 (長石・石英・雲母含む)	良好	底径3.6	(3.3)	底部充存	(外)横腹正 (内)縦腹不明
19	甕	7.SYR7/6 橙	やや青 (長石・石英含む)	良好	底径3.9	(2.5)	底部充存	(外)横腹正 (内)横腹ナデ
20	甕	7.SYR7/6 橙	青 (長石・石英少し含む)	良好	底径5.0	(2.8)	底部3/4	(外)横腹正 (内)放射状ハケ
21	小形甕?	7.SYR7/6 橙	やや青 (長石・石英多く含む)	やや軟	底径2.0	(1.6)	底部充存	指輪压痕
22	皮袋形 土器?	5YN6/4 青	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部充存	(外)ナデ・指輪压痕 (内)横腹正・左上がりハケ
23	甕	5YR6/6 橙	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	(18.0)	(4.5)	口縁1/4 肩部1/2	(外)上凹が切タキ・左上がりハケ ヨコナデ (内)横腹板ナデ・ヨコナデ
24	小形甕	7.SYR7/4 青	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	底径3.6	(8.3)	底部1/2 脚部1/4	(外)上凹が切板ナデ (内)横腹・ハケ・横模ナデ
25	甕	7.SYR7/4 にぶい・青	やや青 (長石・石英含む)	良好	底径4.2	(5.0)	底部充存	(外)横腹・ナデ (内)上凹ハケ
26	甕	7.SYR7/4 青	青 (長石・石英含む)	良好	底径3.8	(2.7)	底部充存	(外)横腹正 (内)横腹ナデ
27	甕?	5YR6/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	底径4.0	(2.4)	底部充存	指輪压痕
28	高杯	5YR6/6 青	密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径3.0	(4.5)	脚柱部1/2	(外)縦腹ミガキ (内)ヨリ
29	高杯	5YR7/6 橙	密 (長石・石英含む)	良好	脚柱部径3.6	(5.2)	脚柱部1/2	(外)縦腹ナデ? (内)ヨリヨコナデ
30	高杯	7.SYR7/6 橙	粗 (石英・長石わずかに含む)	やや軟	脚柱部径3.8	(6.8)	脚柱部上半	(外)縦腹ミガキ (内)横模ケズリ

第8表 出上遺物観察表(2)

番号	器種	色調	胎土	構成	法量		残存率	測定・備考
					口径・底径・側径	器高(現存高)		
31 瓢	5YR6/6 壺	赤 (石英・長石多く含む)	良好	(10.0)	(3.1)	口縁4.1	1/2	Nコナダ
32 瓢	10YR7/4 にぶい黄緑	赤 (石英・長石含む)	良好	底径4.1	(4.6)	底部充存		(外)横位ハケ・指頭圧 (内)横位ナダ
33 瓢	10YR8/2 灰白	やや赤 (長石・石英わずかに含む)	やや良 良好	底径3.8	(4.8)	底部充存		指頭圧痕
34 高杯	7.5YR7/4 にぶい綠	赤 (青色をわずかに含む)	良好	(瓶柱部径3.8)	(5.6)	脚性部1/3		(外)ハラナダ後ヘミガキ (内)シボリ・ヨコナダ
35 長瓶蓋	7.5YR7/6 壺	赤 (青色をわずかに含む)	良好	(8.8)	(9.2)	口縁部1/5		(外)横位～左上ヨリハケ・ヨコナダ (内)左上ヨリハケ・ヨコナダ
36 瓢	7.5YR7/4 にぶい綠	赤 (藍色をわずかに含む)	良好	底径4.4	(3.7)	底部1/2		(外)ナダ・指頭圧 (内)放射状板ナダ
37 瓢	10YR7/4 にぶい黄緑	赤 (長石・石英を少量含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部1/2		(外)深位数ナダ (内)横位～左上ヨリハケ
38 瓢?	7.5YR6/6 壺	赤	良好	底径4.7	(2.3)	底部充存		指頭圧痕 (内)放射状板ナダ
39 瓢?	5YR6/6 壺	やや赤 (長石・石英を多く含む)	やや良 良好	底径4.0	(2.7)	底部充存		(外)横頭正 (内)放射状板ナダ
40 瓢?	10YR7/2 にぶい黄緑	赤 (長石・石英含む)	やや軟	底径4.4	(2.1)	底部1/3充存		底部充存 (外)指頭圧 (内)調整不明
41 盆	5YR7/6 壺	赤 (長石・石英わずかに含む)	良好	(瓶部径10.8)	(4.5)	脚部1/4		(外)横位ハケ・ヨコナダ (内)横位ハケ・ヨコナダ
42 高杯	7.5YR6/4 にぶい綠	やや赤 (長石・石英含む)	やや軟	高脚部径5.0	(8.2)	脚性部充存		(外)横位ハミガキ (内)シボリ・ヨコナダ
43 瓢	10YR6/3 にぶい黄緑	赤 (長石わずかに含む)	良好	底径3.9	(2.7)	底部充存		(外)指頭正 (内)縦位ナダ
44 瓢	7.5YR6/4 にぶい綠	やや赤 (長石・長石少量含む)	良好	底径4.1	(2.3)	底部充存		(外)指頭正 (内)放射状板ナダ
45 高杯	7.5YR7/4 にぶい綠	やや赤 (石英・長石含む)	良好	(23.2)	(6.1)	杯部1/4		(外)横位ハケ・瓶位ハラカズリ・ヨコナダ (内)ヨコナダ・横位ハミガキ
46 高杯	10YR7/4 にぶい黄緑	やや赤 (石英・長石含む)	良好	底径10.8	(13.7)	瓶部1/2		(外)横位ハミガキ (内)シボリ・ヨコナダ
47 高杯	7.5YR7/4 にぶい綠	赤 (石英・長石含む)	良好	(24.6)	(5.2)	口縁部1/4		(外)横位ハケ・ヨコナダ (内)ヨコナダ・横位ミガキ
48 瓢	10YR6/4 にぶい黄緑	赤 (石英・長石含む)	良好	底径4.0	(2.6)	底部3/4		(外)指頭正 (内)放射状板ナダ
49 瓢	7.5YR7/4 にぶい綠	赤 (石英・長石含む)	良好	(底径4.6)	(1.8)	底部1/3		(外)横頭正・右上ヨリタキ (内)左上ヨリハケ
50 瓢?	7.5YR7/6 壺	赤 (長石・石英わずかに含む)	良好	底径3.1	(2.1)	底部充存		(外)指頭正 (内)放射状板ナダ
51 瓢?	10YR7/4 にぶい黄緑	やや赤 (長石・石英多く含む)	やや良 良好	底径4.7	(2.0)	底部充存		指頭圧
52 盆?	7.5YR7/6 壺	赤 (長石・石英含む)	良好	(底径4.4)	(2.0)	底部1/2		(外)横頭正 (内)放射状板ナダ
53 盆	10YR6/4 にぶい黄緑	赤 (長石・石英わずかに含む)	良好	(底径4.0)	(2.8)	底部1/4		(外)指頭正・横位ナダ (内)調整不明
54 瓢?	7.5YR7/6 壺	赤 (長石・石英わずかに含む)	良好	(底径5.0)	(3.5)	底部1/4		瓶ナダ?
55 高杯	7.5YR7/8 黄緑	赤 (長石・石英多く含む)	やや軟	脚性部径2.9	(5.6)	脚性部充存		(外)横位ハミガキ (内)左上ヨリハケズリ
56 瓢	7.5YR7/6 壺	やや赤 (長石・石英多く含む)	やや 良好	底径3.0	(2.7)	底部光存		指頭圧 (内)放射状板ナダ

3. 願興寺跡

I. 調査の契機と経過（第30図）

今回の調査は、天理市北部の和爾町におけるJAライスセンター建設に伴う調査として実施したものである。調査対象地は古代寺院である願興寺の推定寺域内に位置し、寺院に関わる遺構の存在が予想されたため、埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査を行なった。

調査は対象地内に12m四方の調査区を設定し、重機によって造成土及び耕作土を除去したのち、人力掘削機で移行した。現地では平成18年7月31日に作業を開始し、同年8月16日に全ての作業を終了した。なお、遺構等の実測に際しては日本測地系による国土地標を使用している。調査面積は144m²であった。

II. 調査の概要

1. 基本層序（第31図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査地周辺の現地表面をなす造成土面は標高101.6m前後である。造成土は厚さ200cm前後に及ぶ非



第30図 調査地点位置図 (S=1/2,500)

常に厚いもので、これを除去すると部分的に灰色砂からなる耕作土（I層・厚さ5~10cm）がみられるが、調査区の大半では遺物包含層（II層）が現れる。II層は黄褐色～黄灰色のシルトからなり、厚さ最大35cmを測る。II層を除去すると、にぶい黄色の粘土からなるIII層が調査区全面に現れ、この層の上面で律令期の遺構を検出した。検出面の高さは99.3~99.7mを測る。

2. 主な遺構と遺物（第31図・第32図）

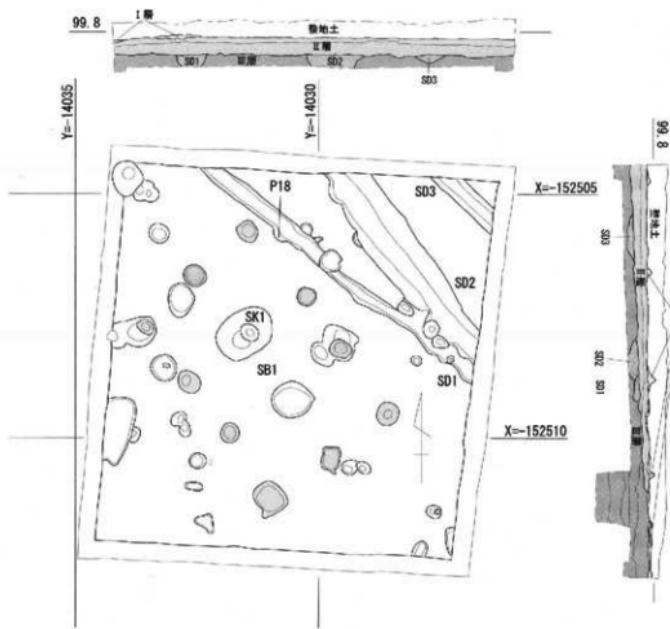
III層上面において、掘立柱建物跡1基、溝3条、ピット多数を検出した。

掘立柱建物SB1

調査区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行3間（約4.5m）、梁間2間（約3.0m）で、柱間は1.3~1.8mを測る。建物主軸はN-36.5°-Wで、柱掘方は直径約40~50cmの不整円形を呈するが、南西隅柱のみ一辺60~65cm前後の不整方形となる。深さはややばらつきがあるが、検出面から20~40cmを測る。柱穴からは、律令期の土師器・須恵器の細片がわずかに出土する。

溝SD1

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-51.6°-Wで、幅約20~35cm、検出面からの深さ約15~20cmを測る。長さ約6.8m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。調査区東端付近で溝SD2を切



第31図 調査区平面図・断面図 (S=1/100)

る。

1は須恵器壺蓋のツマミ部である。扁平なツマミを壺蓋天井部に貼り付ける。2は須恵器壺の底部か。底胴部を成形したのちに断面方形の高台を貼り付ける。高台端面は強いナデにより弱い凹面状を呈する。内外面にロクロナデ調整を施すが、底部外面は成形時のヘラキリの痕跡が明瞭に残り、未調整である。底部内面には灰附着が認められる。

SD1ではこのほかに、風化の激しい半瓦片1点が出土している。

溝SD2

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-38.0°-Wで、幅約90~100cm、検出面からの深さ約20cmを測る。長さ約4.6m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。調査区東端付近で溝SD1に切られる。SB1とおおむね方向が合い、建物と何らかの関係を持つ可能性もある。

3は須恵器壺Bの底部か。底部へ体部を成形したのち、断面方形の高台を貼り付ける。内外面にロクロナデ調整を施すが、底部外面は成形時のヘラキリ痕跡が明瞭に残り、未調整である。4は土師器壺の口縁部へ胴部上半である。全体に磨滅するが、口縁部にヨコナデおよび指頭圧痕、胴部には横位～右上がりのナデが看取される。口縁部内面は使用により黒化する。

SD2ではこのほかに、移動式カマドの破片や花崗岩製の不明石造物、混入遺物ではあるがサヌカイト製のスクレイバーが出土した(図版19)。不明石造物は上面・前後面の三面が残り、横から見ると上面は上向きの弧状を呈する。スクレイバーは、原縁面を残すサヌカイト剥片の一辺に調整剝離を加えて刃部を作る。

溝SD3

調査区北東側で検出した溝である。走向はN-46.5°-Wで、幅約40cm、検出面からの深さ約15cmを測る。長さ約1.3m分を検出したが、両端とも調査区外へのびる。

5は須恵器壺Aの底部へ体部下端か。成形後に、内面および胴部外面にロクロナデを、底部外面に回転ヘラケズリを施す。

土坑SK1

調査区中央やや北西側で検出した土坑である。長軸約120cm、短軸約90cmの不整梢円形を呈し、検出面からの深さ約60cmを測る。建物軸線と、対向する側柱同士を結ぶ線の交点に位置することから、SB1に関連する土坑になる可能性がある。出土遺物に実測可能な破片はないが、律令期の土師器・須恵器の細片が多数出土する。

ピットP18

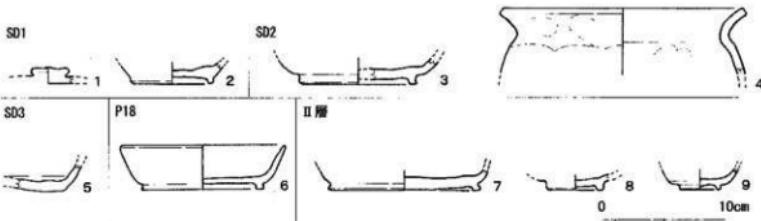
調査区北端で検出したピットである。大半をSD1に切られ、直径・深さ等は不明である。

6は須恵器壺Bである。体部・口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。成形後に断面台形の高台を貼り付ける。

遺物包含層出土遺物

7は須恵器壺B底部か。成形後に断面隅丸台形の高台を貼り付ける。内面および体部側の外面をロクロナデで調整する。底部外面にはヘラキリ痕跡が明瞭に見られ、未調整であり、調整時の工具圧痕が看取される。

8は青磁碗の底部か。削り出しにより断面長方形の高台を作り、表面調整はおおむねケズリによる



第32図 出土遺物実測図 (S=1/4)

と思われる。見込み部と体部の境に段を持つ。内面および高台外側にはオリーブ灰色の釉薬がかかる。

9は白磁碗の底部～体部下半である。成形後に断面隅丸方形の高台を貼付け、底部内外面にナデを施す。底部の中心付近は強い回転ナデにより円錐形に突出する。体部以上には白色に施釉され、平らに面取りされており、体部は多角形状になるものと思われる。

III.まとめ

今回の調査では、小規模な掘立柱建物や構などの遺構を確認した。これらの遺構からはおおむね奈良時代前後の遺物が出土しており、調査地周辺に存在が想定される順興寺の存続時期と一致する。今回の調査地の東側に隣接する農道敷設に伴う奈良県立橿原考古学研究所の調査（和爾遺跡第3次調査E区）では遺構が全く検出されておらず、調査地付近が順興寺寺域の中でどのような位置を占めていたかについては、今後の調査の進展をまって改めて検討していく必要がある。その際には、SD2で移動式カマド破片が多数検出されている事実も、重要な意味を持ってくる可能性があろう。

また、包含層に中世段階の遺物をも含み、建物を形成しない小ピットの中に中世段階の羽釜の小片を含むものもあることから、順興寺廃絶後の中世においても、寺とは別になにがしかの活動が行なわれていたことが推測できる。

（北口聰人）

第9表 出土遺物観察表

番号	層位 遺構	器種	色調	胎土	焼成 コヨ・亞ヨor褐色	重量 器高(奥存高)	残存率	調査・備考	
								ツマミ部	ロクロナデ・指屈压
1	SD1 盖	N7/0灰白	やや粗 (長石含む)	良好	ツマミ部3.1	(1.4)	—	—	—
2	SD1 盖?	N6/0灰	■ (長石わざかに含む)	良好	(高台径6.2)	(1.8)	底部1/4	ロクロナデ	—
3	SD2 环B	N5/0灰	■ (長石・石英含む)	良好	(高台径9.6)	(2.1)	底部1/3	ロクロナデ	—
4	SD2 瓢	2.5YR6/6橙	粗 (長石・石英多く含む)	良好	(19.4)	(5.4)	口縁部1/5	ヨコナデ	—
5	SD2 环A	N7/0灰白	■ (長石含む)	良好	—	(2.3)	底部	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	—
6	P18 环B	N7/0灰白	■ (長石含む)	良好	(13.6)	3.7	底部1/4	ロクロナデ	—
7	II層 环B	N7/0灰白	■ (長石含む)	良好	(高台径12.4)	(1.7)	底部1/5	ロクロナデ・ナデ	—
8	II層 瓢	2.5Y6/1 オリーブ灰色	■ ■	良好	高台径4.6	(1.3)	底部完存	回転ヘラケズリ	—
9	II層 瓢	SY8/1灰白	■	良好	高台径3.4	(1.7)	底部1/2	面取り・ロクロナデ	—

4. 平等坊・岩室遺跡（第29次）

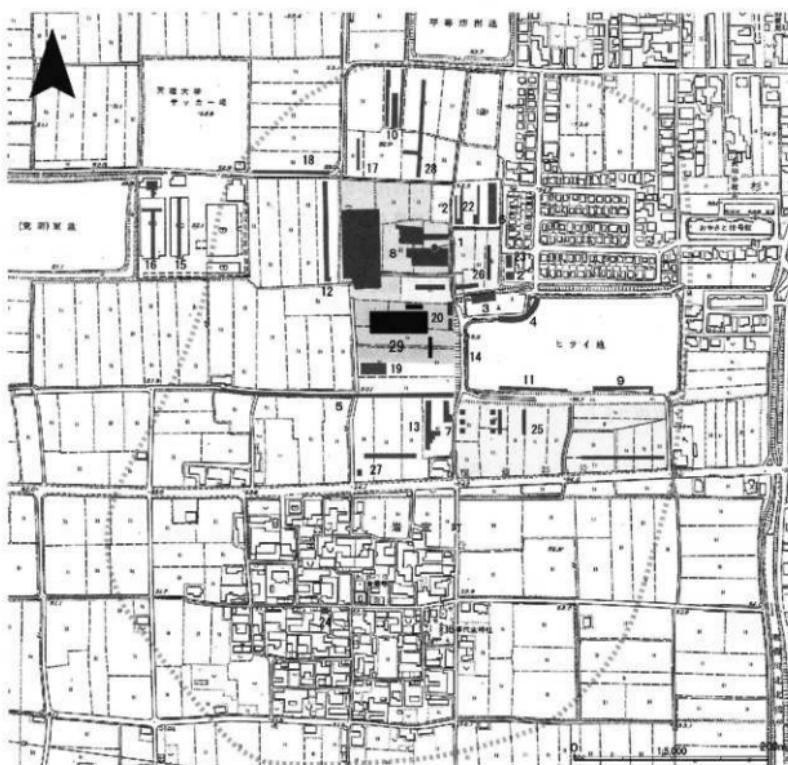
I. はじめに

1. 遺跡の概観

平等坊・岩室遺跡は、天理市平等坊町および岩室町一帯に所在する弥生時代を中心とした大集落遺跡である。地理的には奈良盆地東部山麓の谷筋から派生して市内中央部を西流する布留川によって形成された扇状地方に展開する沖積平野上に立地しており、水利に恵まれ農耕に適した土地条件により集落の定着と拡大が進んだ集落となつたことが考えられる。

当遺跡の範囲については、これまでの発掘調査や分布調査により東方のヒライ池付近から現在の岩室町の村落付近までおよぶことが知られ、東西約400m、南北約600mの規模と推定されている。

これまでに遺跡北半部を中心に30数次にわたる発掘調査が実施され、その調査成果から弥生前・中



第33図 調査地と既往の調査地点（第29次調査まで）

・後期の全期間を通じて集落の周囲に大溝を巡らす環濠集落であることも確かめられており、奈良盆地東部における拠点的な集落として評価されている。

また、弥生後期後半頃には集落北東部の微高地上に一边約30m規模の方形区画が形成され、環濠内部に特定の区画が出現することも確認されている。こうした方形区画の出現により、集落内における首長階層の誕生が予想され、続く古墳時代に向けての社会変革を示す現象として理解できる。以前の第8次調査地（青木1996）では、この方形区画を用む大溝より弥生後期後半から古墳前期の土器が多量に出土しており、数度にわたる再掘削が見られることなどからも維続的に機能していたことが確かめられている。しかしながら、区画内部に該当する地点での調査の機会に乏しく、予想される首長居宅としての在り方を検証、特定するには至っていないのが現状である。いずれにせよ、弥生後期末から古墳前期にかけての時期に平等坊・岩室遺跡が周辺地域を含めた小地域圏の中核となる集落となっていたことを示すものと思われる。

2. 周辺の遺跡

当遺跡の周辺では、北東に縄文晩期の突帯文土器や弥生中期の方形周溝墓が検出された前段遺跡や古墳前・中期の玉作り関連遺物が出土した九ノ坪・シマダ遺跡、東方に縄文時代から中世に至る複合遺跡の布留遺跡があり、南西には弥生時代の大規模環濠集落として著名的な唐古・鎌遺跡や多くの絵画土器や銅鐸形土製品の出土した清水風遺跡がある。弥生・古墳時代の小規模な集落遺跡はほかにも幾つか知られているが、近年の京奈と自動車道関連の調査により新知見が多く得られている。また、西北には古墳中・後期の集落である小路遺跡があり、近接して星塚古墳や荒磯古墳など後期古墳も存在する。なお、同時期の古墳は当遺跡の範囲内にもありヒライ池西北岸の岩室池古墳が知られている。

II. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

今回の調査は、岩室農業組合による民間の十地区画整理事業に伴う事前の発掘調査として実施した。開発計画対象地の周辺においては、近年よりマンション建設や宅地造成等の開発を原因とする発掘調査が頻発したこともあり、それらの調査成果からも当該調査地では当初より弥生環濠集落内部の集落域に該当しており、区画溝や自然河道等の周辺検出遺構群との連続性の確認等、当遺跡の集落構造に関する新知見を得ることが予想された。

2. 調査の経過

調査では、対象地内の造成計画における街路部分の総面積を対象面積として調査区の設定をおこない、当初には調査対象区域の北東寄りに南北15m、東西50mの長方形を成す調査区を設けて発掘調査を進行した。本来ならば区画内における街路占有地を対象に複数のトレンチ調査区を設定して調査を進めるべきであったが、調査期間、经费等の制約から時間短縮、作業効率向上の都合を考えて面的な括りを見るために1ヶ所の大調査区を設定することにした。そのため、調査区の配置に当たっては、周辺における既往の調査成果を追認可能な地点に集約するかたちで設定するに至った。

その後、調査の進行状況に従い、調査地の北、南東、北東の一部に補足的なトレンチ調査区等を追



第34図 調査区平面図・土層断面の状況

加、拡張し、広大な敷地内における遺構分布と原地形等の確認に努めた。

現地における発掘調査は平成18年10月10日から開始し、平成19年2月11日にすべての調査にかかる作業を終了した。なお、調査期間中の後半においては調査成果についての記者発表および現地説明会（平成19年1月20日）を実施し、市民に向けての成果公表にも努めた。

総調査面積は北拡張区（南北3m×東西10m=30m²）および南東拡張区（3m幅×20m=60m²）、その他拡張箇所を含めて860m²であった。

III. 調査の成果

1. 基本層序

当調査地における基本層序は、調査区東壁および南壁の土層断面をもとに概ね以下に示したような状況となっていた。

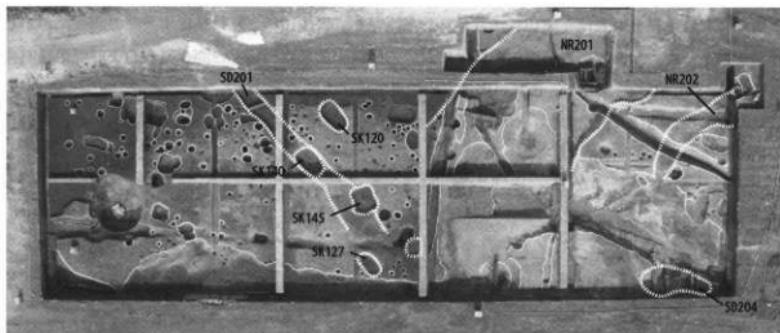
- 第Ⅰ層 暗褐色砂質土（耕作土）。層厚0.2~0.3mで調査地全域に拡がる近年までの耕作土である。
- 第Ⅱ層 にぶい黄褐色砂質土（床土）。層厚0.2~0.3m。耕作土直下の水田・畑の床上相当層である。
- 第Ⅲ層 淡褐色砂質土（中・近世遺物包含層）。現地表下0.5m前後の深度で遺存する中世以降の遺物包含層である。層厚0.2mと薄く堆積する。
- 第Ⅳ層 灰褐色～暗褐色砂質土・砂混じり粘質土（弥生～古墳時代遺物包含層）。調査区の北東から南西の方向にかけて分布する遺物包含層である。現地表下0.6~0.8mに遺存し、上下層に分層可能であった。上部では弥生中・後期～古墳前・中期の土器類が多く出土するが、地山面直上の低地のみに分布する下部の堆積層では弥生前期の土器片が主体となっていた。
- 第Ⅴ層 黄橙～黄灰色微砂・シルト・粘土（地山）。上部は安定した基盤層を成し、北東方向に向かって安定度を増す状況を呈した。

調査地内においては、上面全体として北東方向からの第Ⅴ層（地山）による安定基盤層が南北方向に向かい緩やかに下降する緩斜面様の地形上に該当するようである。そのため、特に調査区北東側では中世以降の農地化による削平がおよぶ状況を呈し、ここでは第Ⅰ層（耕作土）・第Ⅱ層（床土）および第Ⅲ層（中・近世遺物包含層）の直下において第Ⅴ層の地山面が見られ、第Ⅳ層（弥生～古墳遺物包含層）の欠落が見られた。そのため、この付近では第Ⅴ層上面に標高51.8m付近の高さにおいて弥生中期以降・近世までの長期間にわたる遺構が重複して検出されている。

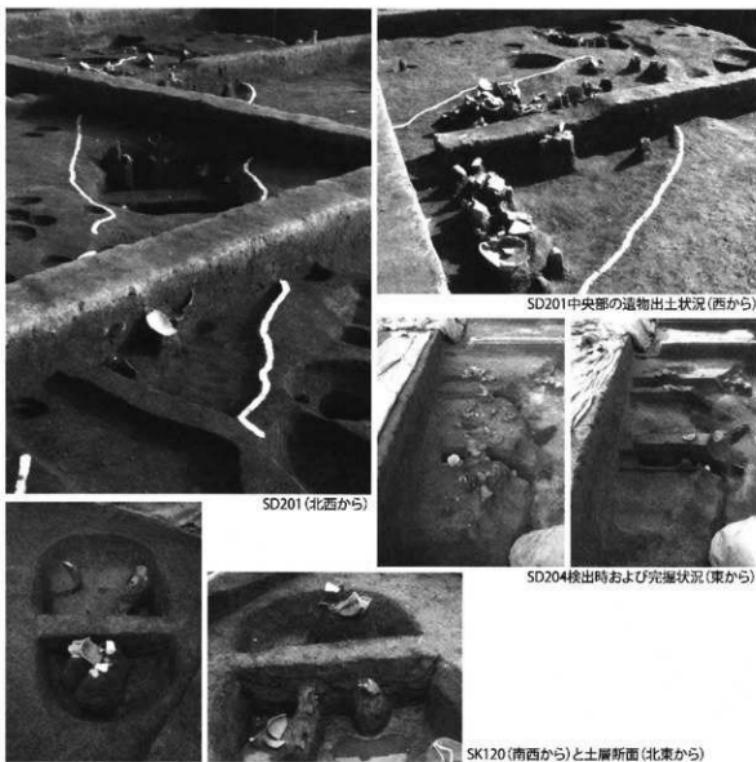
調査区全体としては、第Ⅳ層上面検出の中・近世遺構群を除いては検出遺構の多くが第Ⅴ層上面検出の弥生前期～古墳前・中期遺構群で占められる状況を呈していた。

2. 主要な遺構と遺物

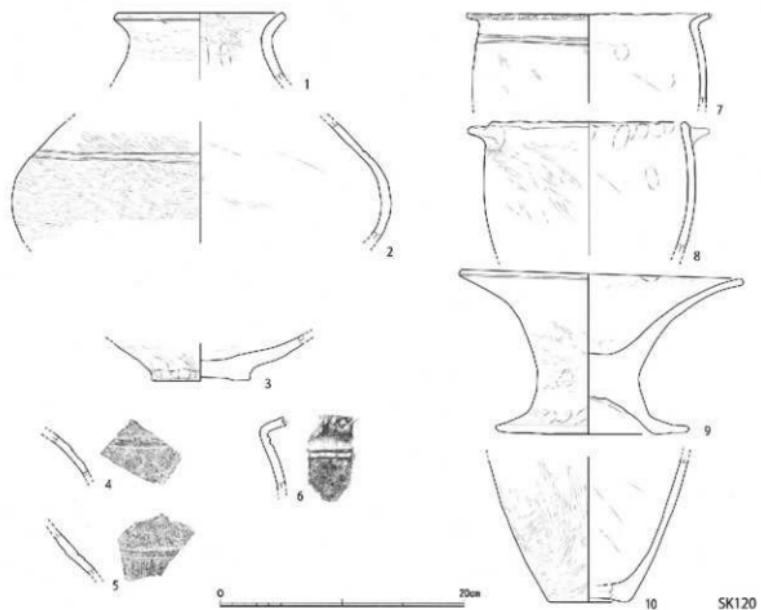
今回の調査地では、弥生前期から古墳前・中期に至る時期にかけての多くの遺構と遺物の存在が確認されている。また、調査区北東部の第Ⅴ層（地山）上面および拡張区を含めての調査区全域において第Ⅳ層（遺物包含層）の上面より中・近世の遺構面も検出しており、出土遺物量もコンテナ1000箱近



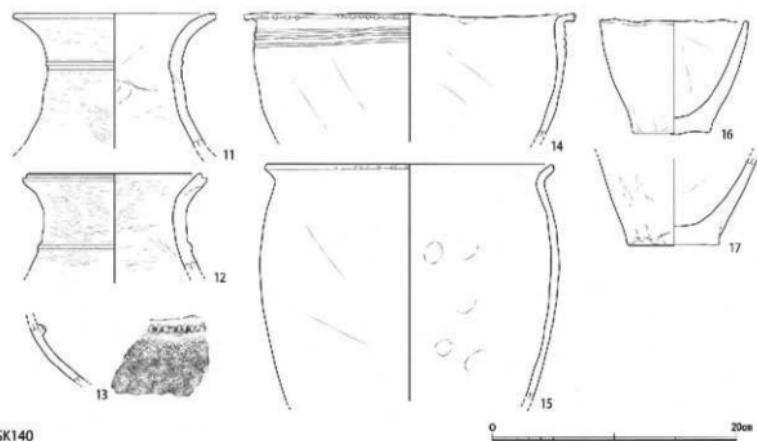
弥生前期～中期初頭・前半の主要遺構



第35図 弥生時代前期～中期初頭・前半の主要遺構



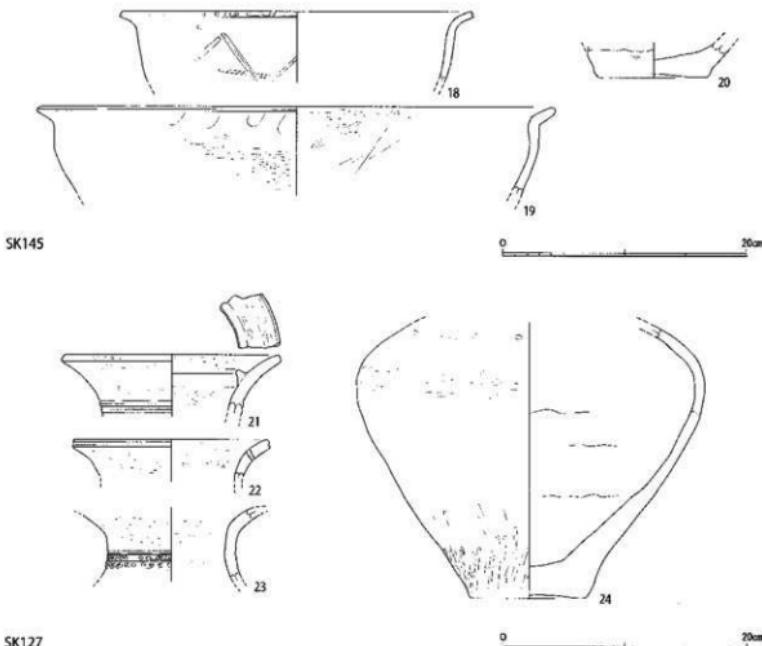
SK120



SK140

0 1 20cm

第36図 土坑SK120・SK140出土遺物実測図(S=1/4)



第37図 土坑SK145・SK127出土遺物実測図(S=1/4)

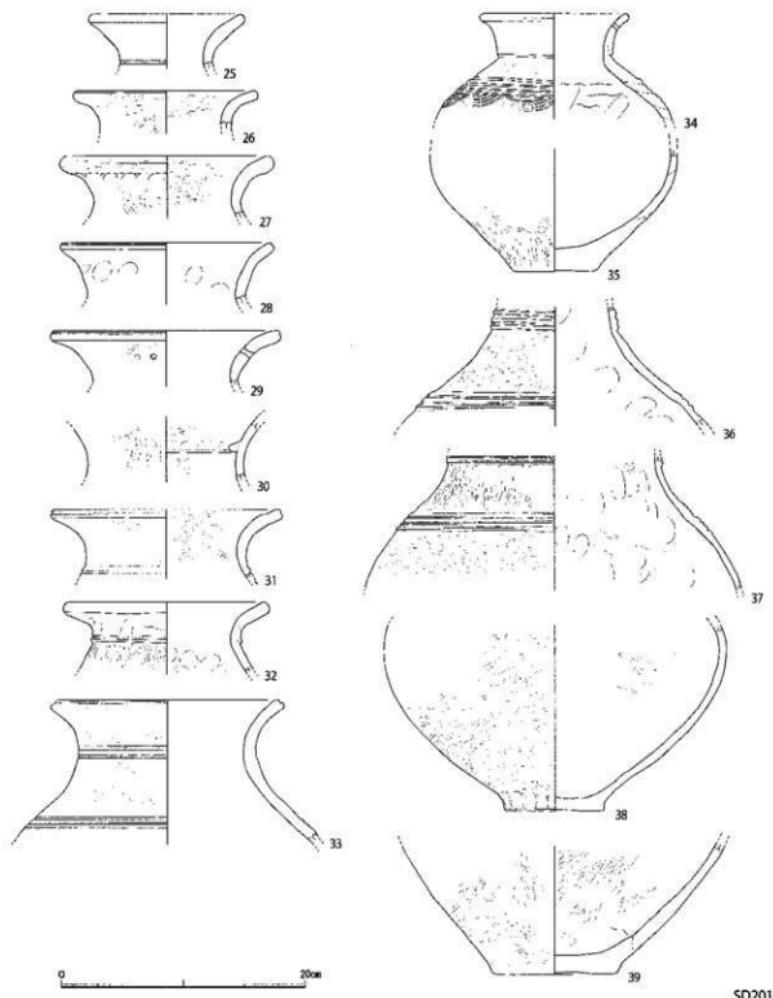
くに及ぶほどであった。

ここでは、各時期別の主要遺構の概観のみ記すことにし、遺物についても実測図の提示のみに留めておくものとするため各遺構の時期検討のための参考にされたい。

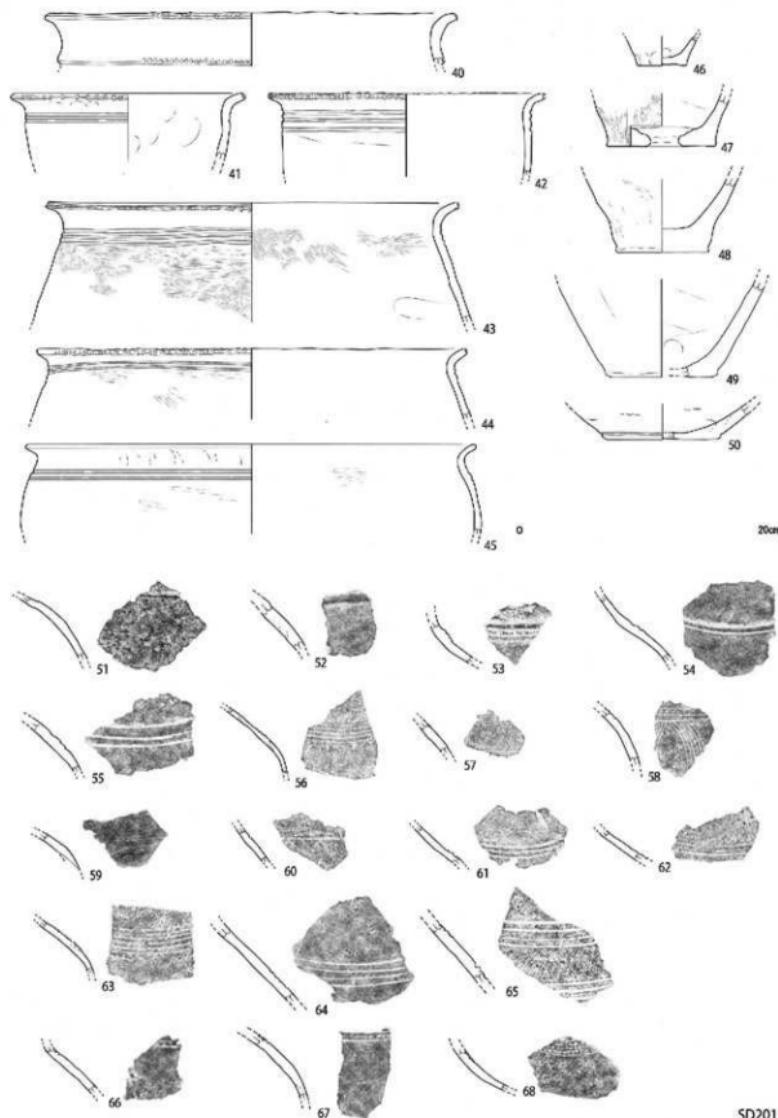
(1) 弥生前期～中期初頭・前半の遺構

平等坊・岩室遺跡における集落の初現となる弥生前期の遺構では、自然河道NR201、溝SD201・SD204、土坑SK120・SK127・SK140・SK145などが検出されている。いずれも第V層（地山）上面において上部を削平され浅く遺存するもので占められていた。また、調査地が当遺跡における安定基盤層の坡がありを見る微高地近辺に該当したためか、本来は弥生前期の小集落の展開が見られたことが考えられ、遺物包含層中や上面に重複した弥生前期以降の遺構埋土にも弥生前期まで遡る土器片等の遺物混入が顕著であった。

自然河道NR201は北東から南西・南方にかけて斜行、蛇行する河川跡である。北拡張区および調査区4・5区でのみ部分的に完掘したが、埋土下部の砂層堆積より若干の弥生前期土器片が出土しているのみである。上部では弥生中期前半頃の土器片も出土しており、その間に機能した河川であること

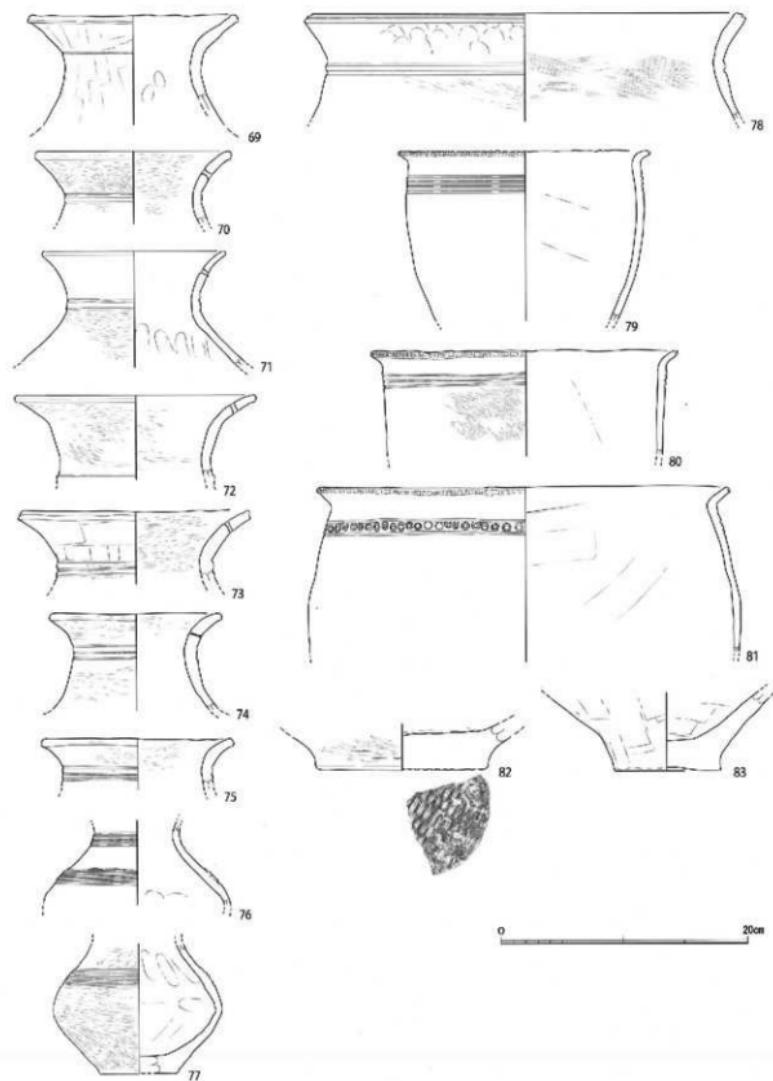


第38図 溝SD201出土遺物実測図1 (S=1/4)



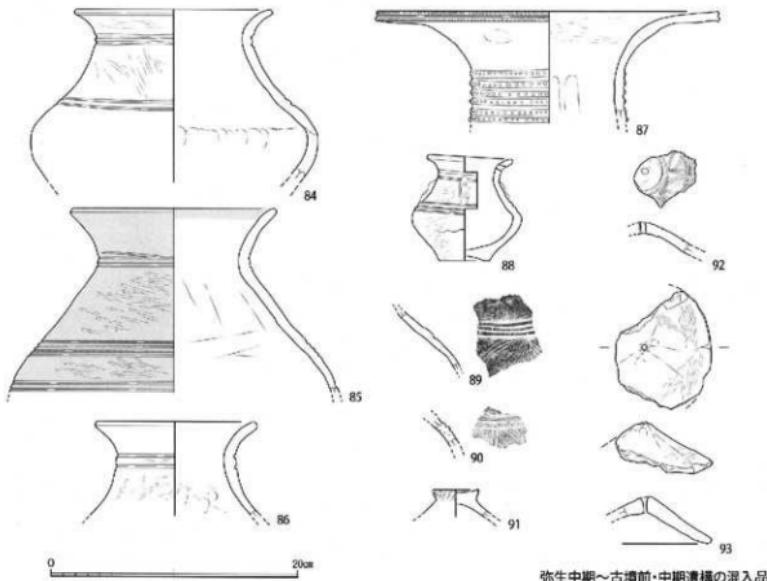
第39図 溝SD201出土遺物実測図 2 (S-1/4)

SD201



SD204

第40図 滋SD204出土遺物実測図(S=1/4)



弥生中期～古墳前・中期遺構の混入品

第41図 他の遺構埋土に混入した弥生時代前期遺物実測図(S=1/4)

が知られた。この河道に平行するように幅の狭い小河川であるNR202も検出されているが、埋土は砂層のみで遺物も同様に前・中期土器の小片のみ出土している。

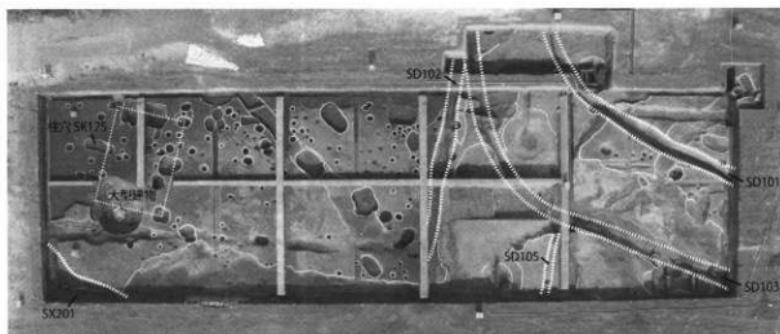
溝SD201は調査区中央で検出された北西～南東方向の溝である。残りは浅く、深さは0.3m前後であった。低地へと移行する溝の南端は上部の削平のためか途切れてしまっていた。調査区南東隅付近で検出の溝SD204は両端が途切れるものの、東西方向の溝であると思われる。検出時には多くの土器片が列を成す状況を呈した。

土坑は総数4基以上が確認されている。いずれも梢円形あるいは隅丸方形の平面形を成す土坑で占められていた。先述の溝SD201に平行する方向性のある土坑が多く、時期についてはともに前期前半頃まで遡る。溝と土坑の関係については不明であるが、SK140のように溝内に収まる土坑も見られるため同時期性も考慮すべきかと思われる。

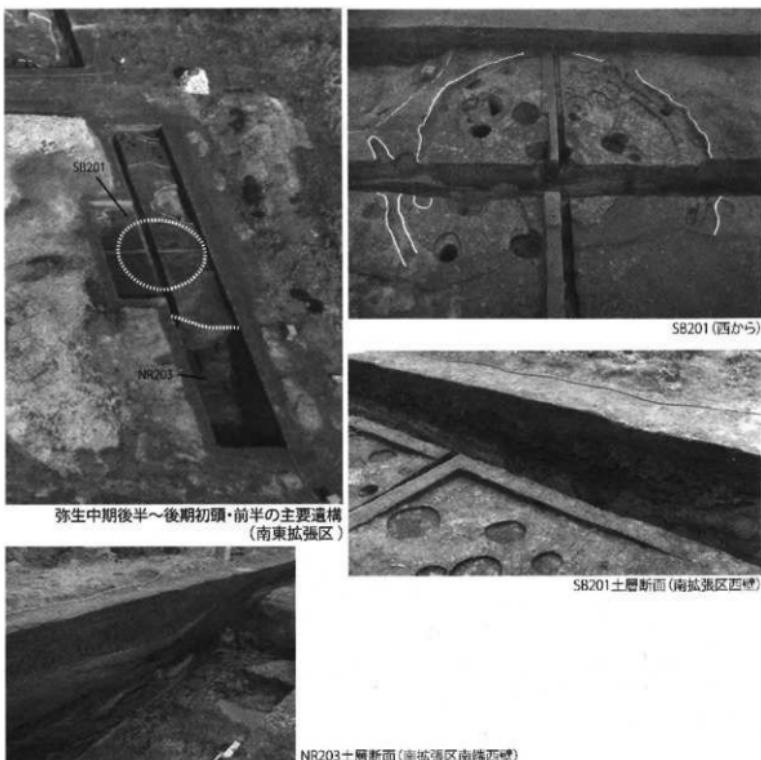
(2) 弥生中期後半～後期初頭・前半の遺構

当遺跡の弥生集落の発展が見られた弥生中期以降の遺構では、自然河道、溝、土坑、堅穴住居、柱穴等がある。

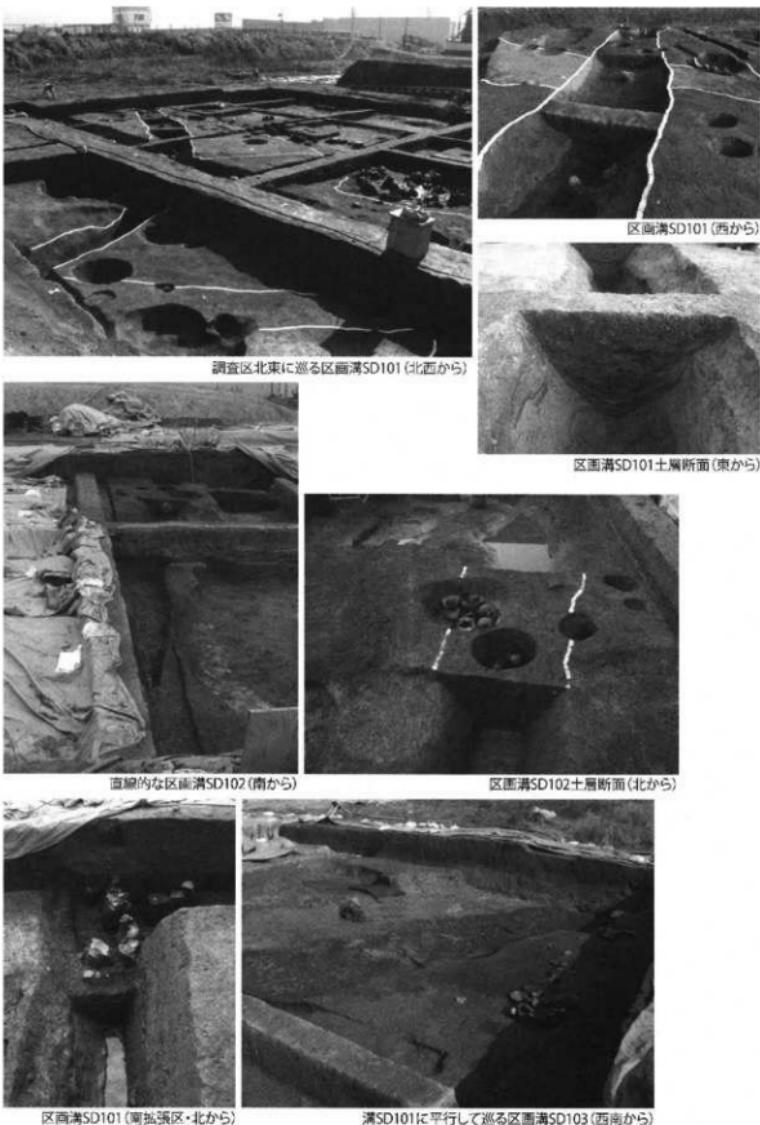
自然河道は調査区内の2箇所で検出、確認されている。NR203は、南東拡張区の南端で北岸のみを確認した河道である。やや北西に向く大きな流路であり、川底のまで約2m近く下がる深さであった。



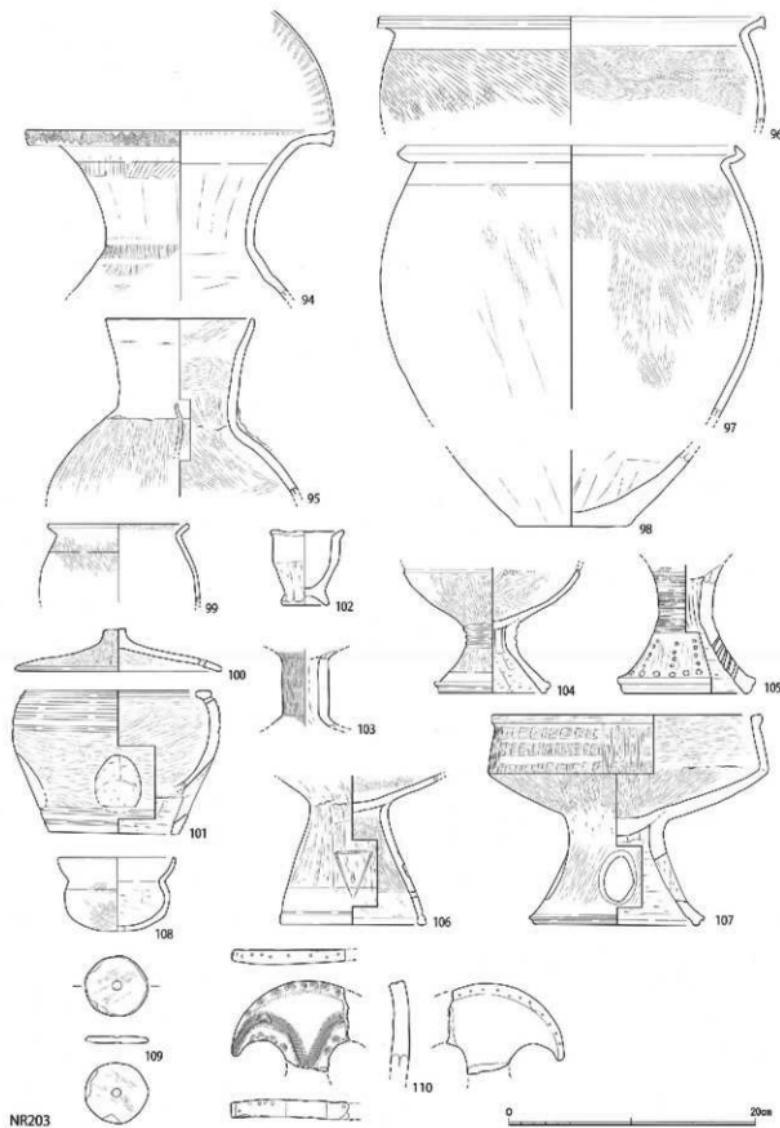
弥生中期後半～後期初頭・前半の主要遺構



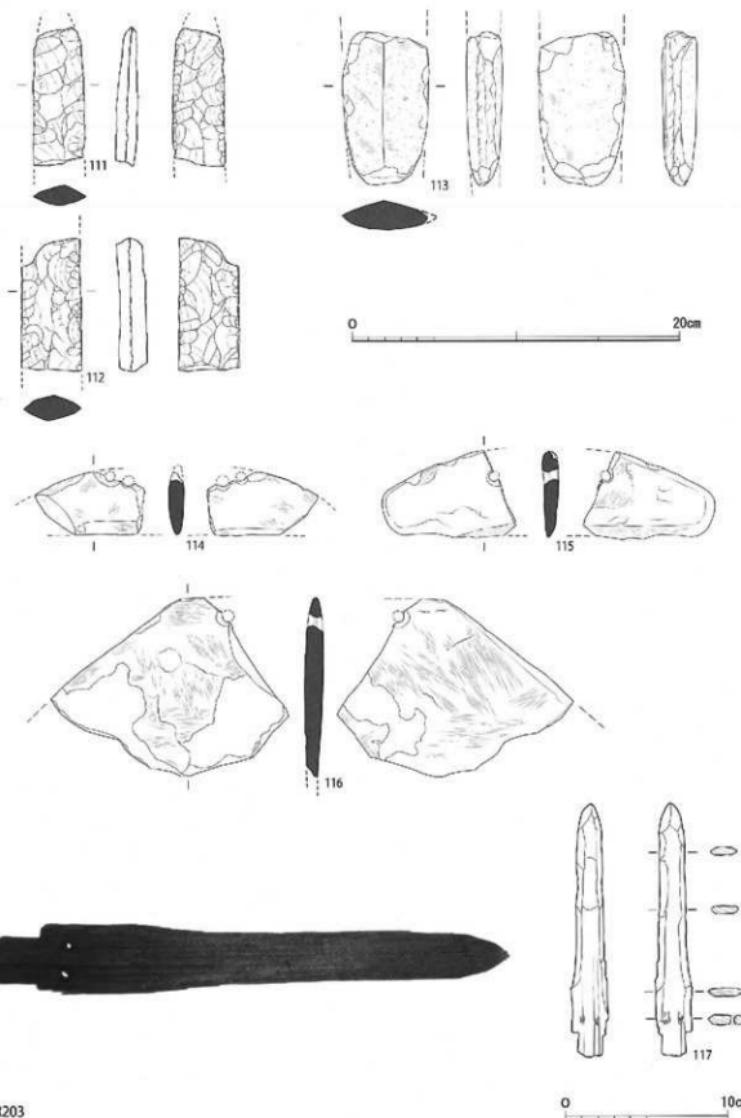
第42図 弥生時代中期後半～後期初頭・前半の主要遺構(1)



第43図 弥生時代中期後半～後期初頭・前半の主要遺構(2)



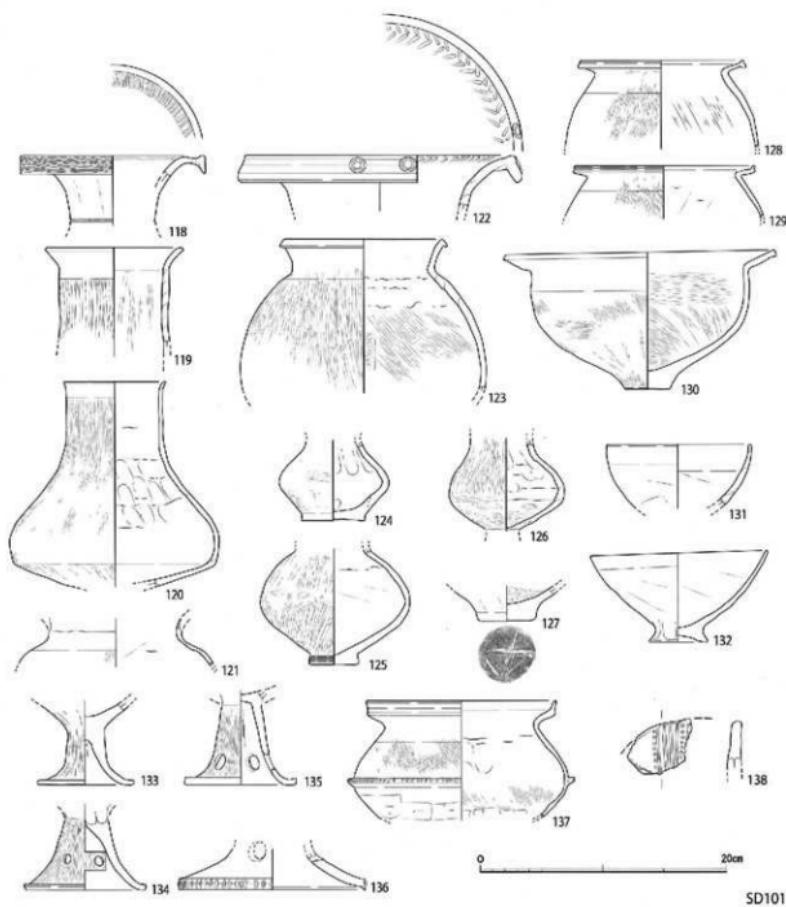
第44図 自然河道NR203出土遺物実測図 1 (S=1/4)



NR203

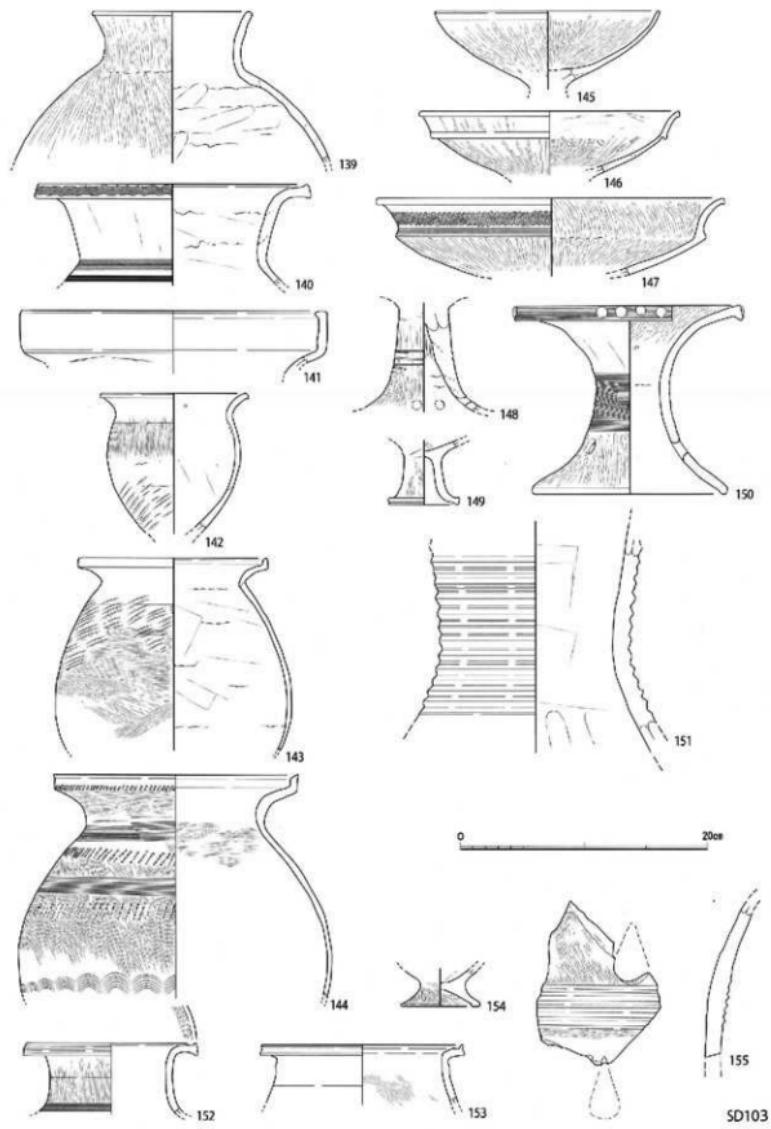
0 10cm

第45図 自然河道NR203出土遺物実測図 2 (S-1/3)

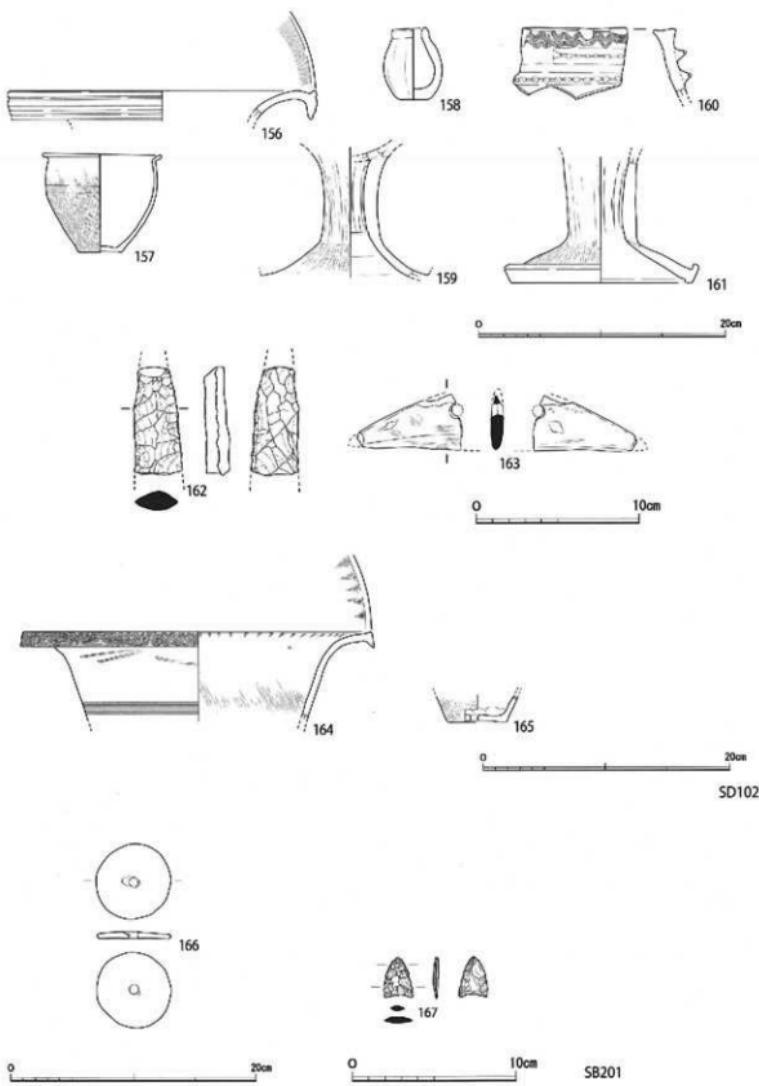


第46図 潟SD101出土遺物実測図(S-1/4)

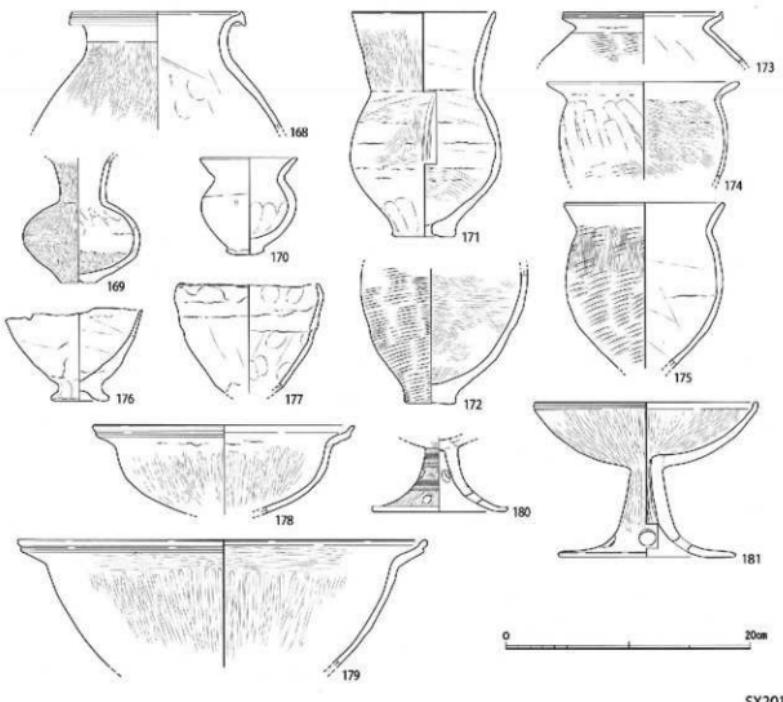
埋土は下半のはほとんどが砂と粘土の互層堆積であり、弥生中期後半～後期初頭の多くの土器片とともに石器類、少量の木製品等が出土している。特筆すべき遺物としては、当遺跡で初めて出土が確認された装飾性に富む分銅形土製品がある。また、剣形木製品のような祭祀遺物も出土している。調査区南西隅検出の不明遺構としたSX201でも北岸の一部のみを確認しているが、埋土も下半が同様の砂、粘土の互層となっていた。これらの河道では出土土器に中期末～後期初頭の間で若干前後に重複するものの、平等坊・岩室弥生集落の中央部を西流する同一の河川と考えられるものである。



第47図 溝SD103出土遺物実測図(S=1/4)



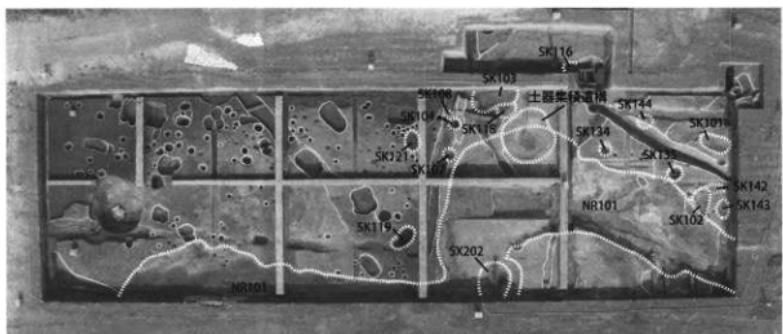
第48図 溝SD102・住居SB201出土遺物実測図(土器S=1/4・石器S=1/3)



第49図 自然河道SX201出土遺物実測図(S=1/4)

溝では断面V字形を呈する区画溝的なもののみ4条を検出している。調査区北東の安定基盤から成る微高地の縁辺を多重に巡るように掘削された区画溝SD101・SD103では、いずれも埋土上半の堆積層中に弥生中期末～後期初頭・前半までの土器が出土しており、弥生中期後半～末には機能していたものと思われる。また、これらの弧状に巡る区画溝に先行する南北方向の溝SD102・SD105も平行した位置関係で確認されている。溝SD102は、北拡張区において前述のSD103との重複関係が見られ、明らかに時期的に先行する溝であった。遺物は中期後半～末にかけての土器片がわずかに出土している。調査区南辺のSD105も上部を重複した中・近世東西区画溝に著しく破壊されではいるが、埋土からは微細な弥生土器片が見られた。

当該時期の土坑では、明確に土器等の出土が顕著なものは見られなかったものの、調査区の西半付近のみに幾つか検出されている。調査中に土坑として掘削したものの中には大型の柱穴となるものも見られたが、建物を想定復元できたものは1棟のみであった。大型柱穴となるものでは直径あるいは一边が1mを超える平面規模のものが多く、柱根は残らずに抜取り痕が観察されるものばかりであった。大型柱穴SK123、長方形土坑SK125では掘り方埋土より中期後半～末の土器片が出土している。

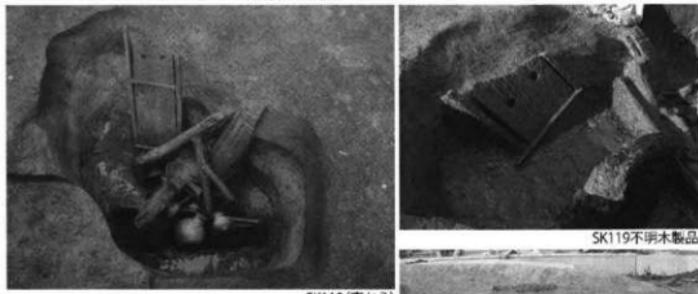


弥生後期後半～古墳前・中期の主要遺構



SK116(北拡張区・南から)

SK202木材(高から)



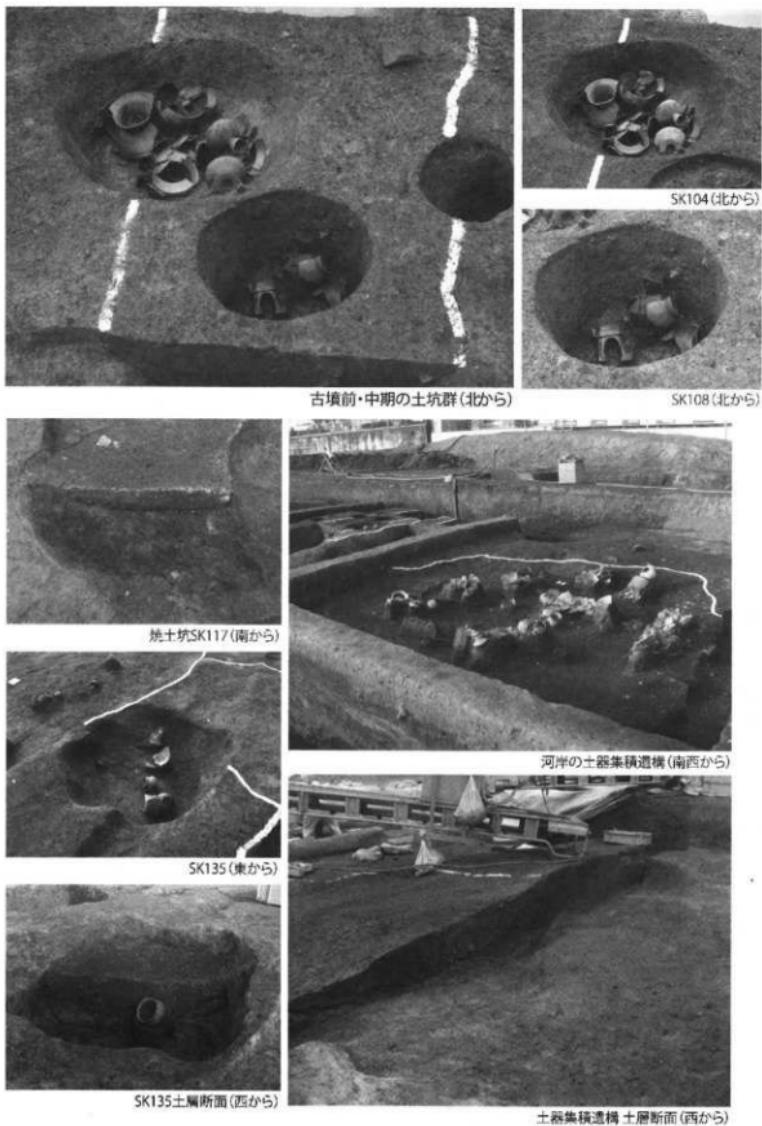
SK119(東から)

SK119不明木製品

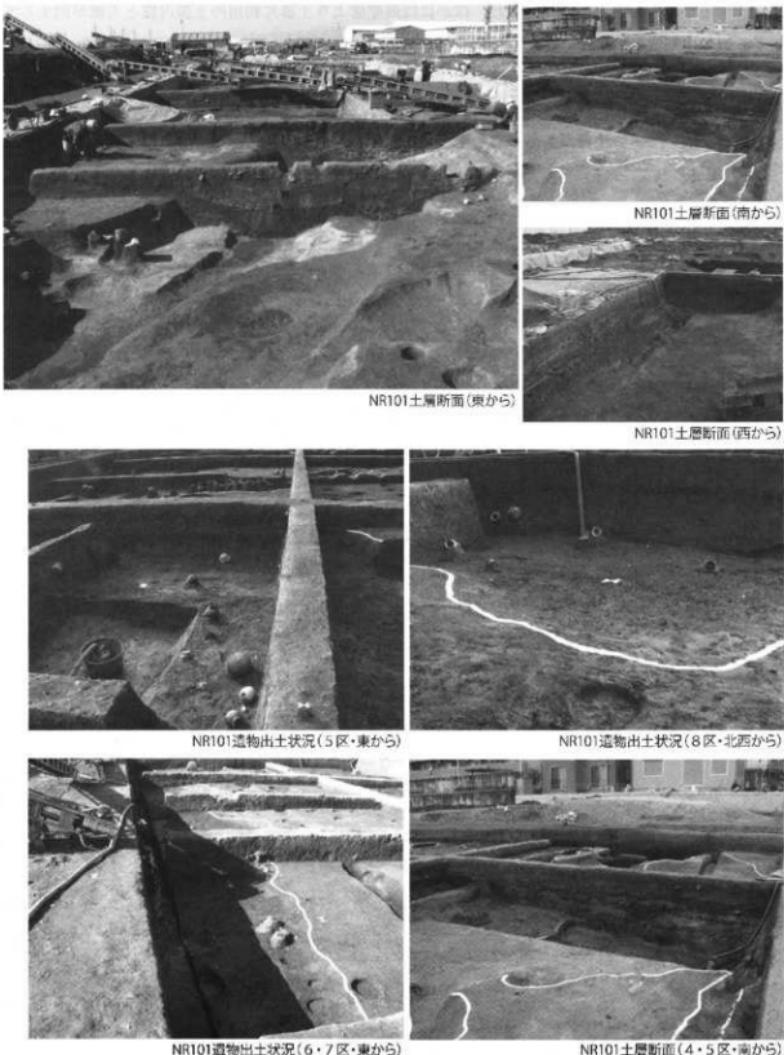


SK103土層断面(調査区北壁)

第50図 弥生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構(1)



第51図 弥生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構(2)

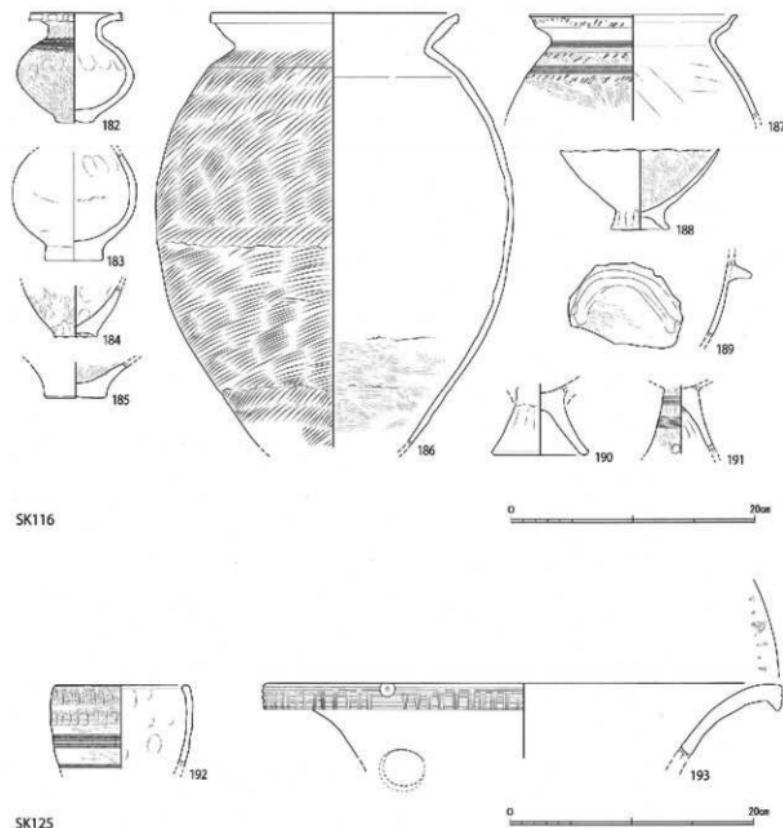


第52図 弓生時代後期後半～古墳時代前・中期の主要遺構(3)

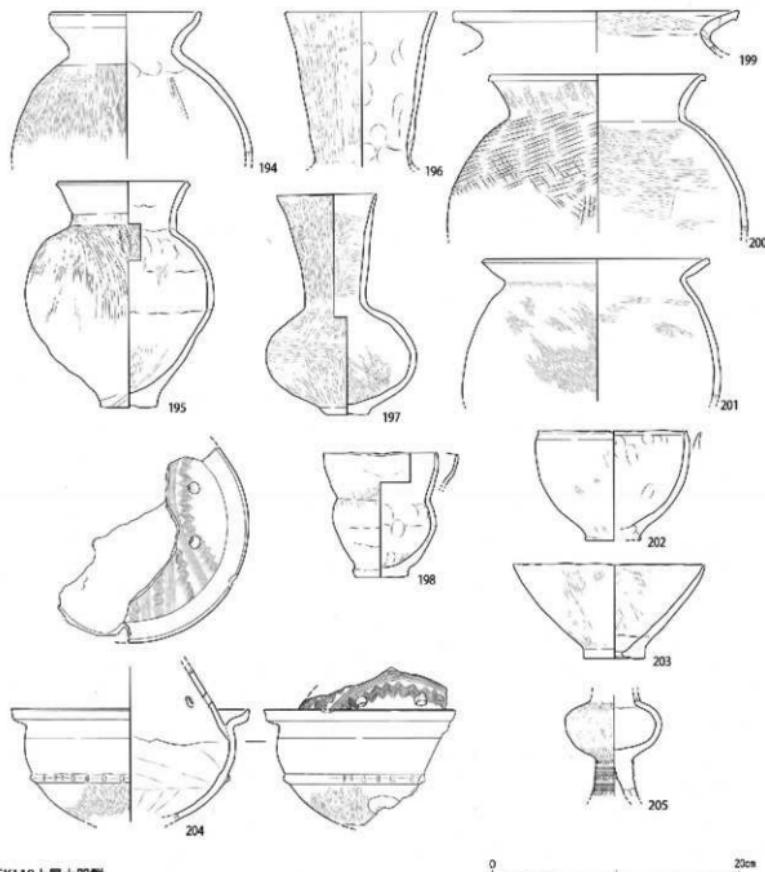
南東拡張区では円形竪穴住居SB201を検出している。西半の一部を欠くもののほぼ良好な状況で確認した住居跡である。径約4mの規模を示し、周縁には壁溝が巡る。遺物は中期後半の土器片を主体に出土するがほとんどが小片であった。ほかには周壁溝より土器片利用の土製円盤と石鏃が出土している。概ね中期後半の住居と考えられる。

(3) 弥生後期後半～古墳前・中期の遺構

当遺跡において、弥生環濠集落の終焉を迎えた弥生後期後半以降の遺構では自然河道と多くの土坑(井戸)が見られた。



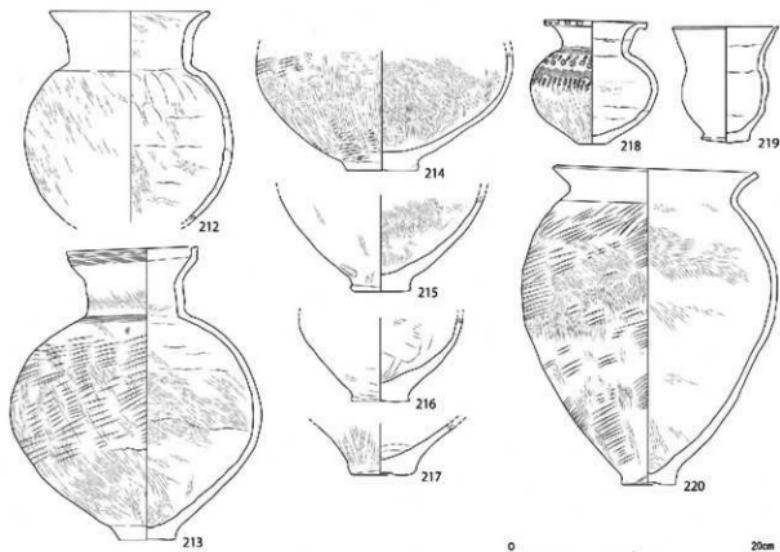
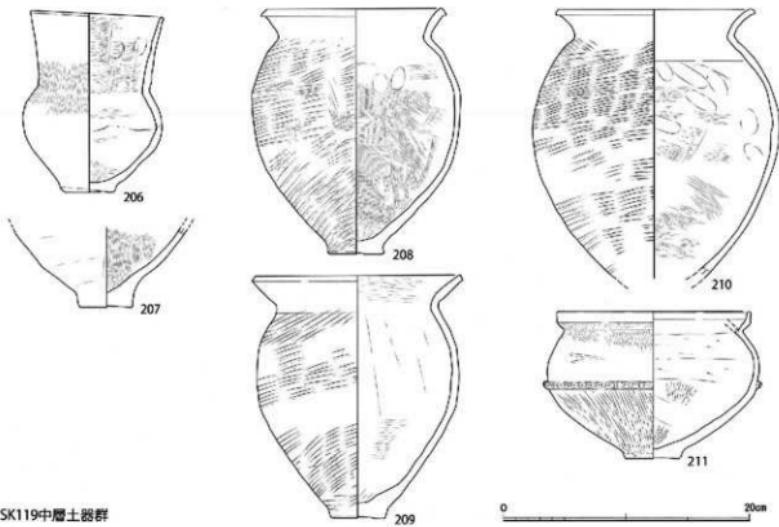
第53図 土坑SK116・柱穴SK125出土遺物実測図(S-1/4)



SK119上層土器群

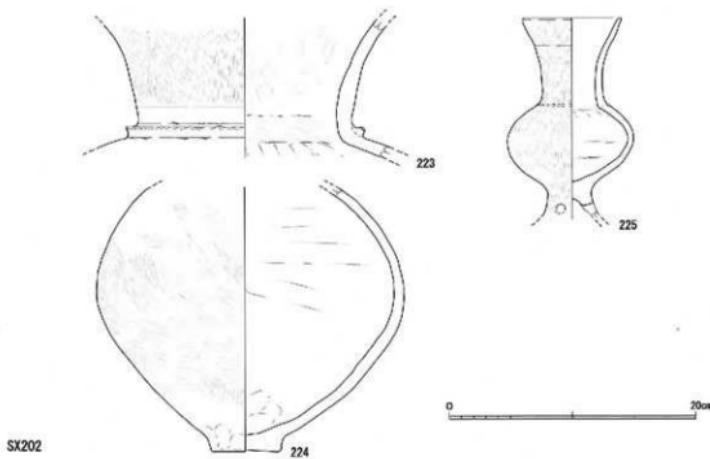
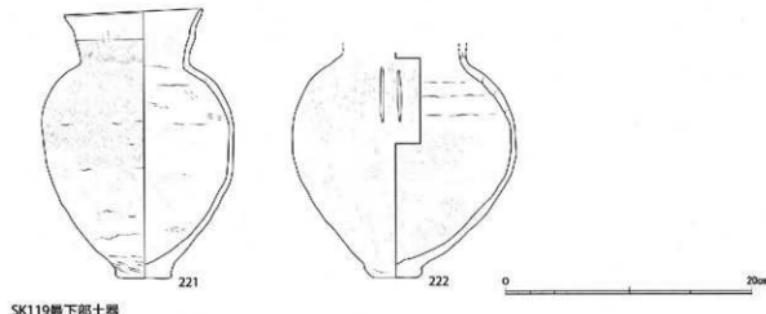
第54図 土坑SK119出土遺物実測図1 (S=1/4)

土坑SK116は北扯張区において検出され、区画溝SD101の東辺に重複して掘削されたほぼ円形の土坑である。土坑SK119は長円形の平面形を呈する素掘り井戸状の土坑である。検出時より用途不明木製品とともに多量の完形土器が投棄された状況が見られた。上面・上層から中・下層まで多くの土器が見られたが、間層を挟み底面直上では完形、ほぼ完形の直口壺が2点のみ出土している。ほかにも弥生後期後半の遺構では、調査区中央南辺付近で丸太材を下面に据えた落ち込み状土坑SX202があり、自然河道NR101の蛇行部南岸辺に取り付くように設置されている。



SK119中～下層土器群

第54図 土坑SK119出土遺物実測図2 (S=1/4)

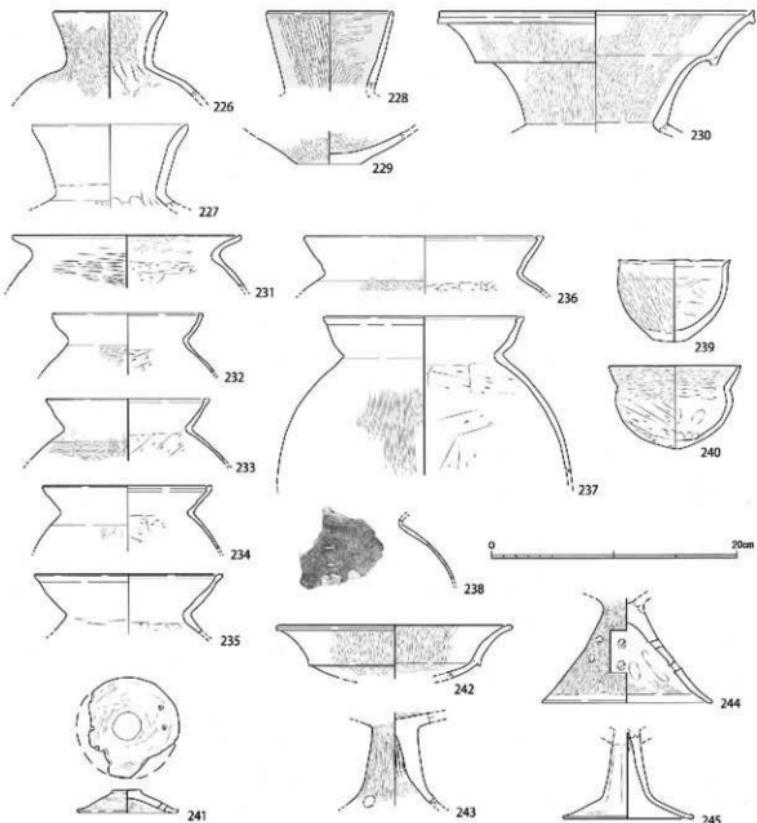


第56図 土坑SK119出土遺物実測図3・SX202出土遺物実測図(S-1/4)

土坑SK103・SK104・SK118はいずれも古墳前期初頭～前半の土坑である。古墳前期後半～中期の土坑には、銀形石を埋納した土坑SK108やSK135がある。SK135は古墳時代土坑では最も時期的に後出する遺構となる。

ここで明示していない遺構も含めて弥生後期後半以降の遺構のほとんどは調査区東半に分布し、特に古墳前期以降の土坑が自然河道の北岸に多く見られた。

自然河道北岸の土器集積遺構は径約5mの規模をもつ落ち込み遺構である。下部は川岸の窪みとなっており、弥生後期後半～末の上器が出土しているが、上部には北岸側より投棄された多量の土器が見られた。土器の時期幅では庄内式期後半から古墳前期末までの間に限定されている。

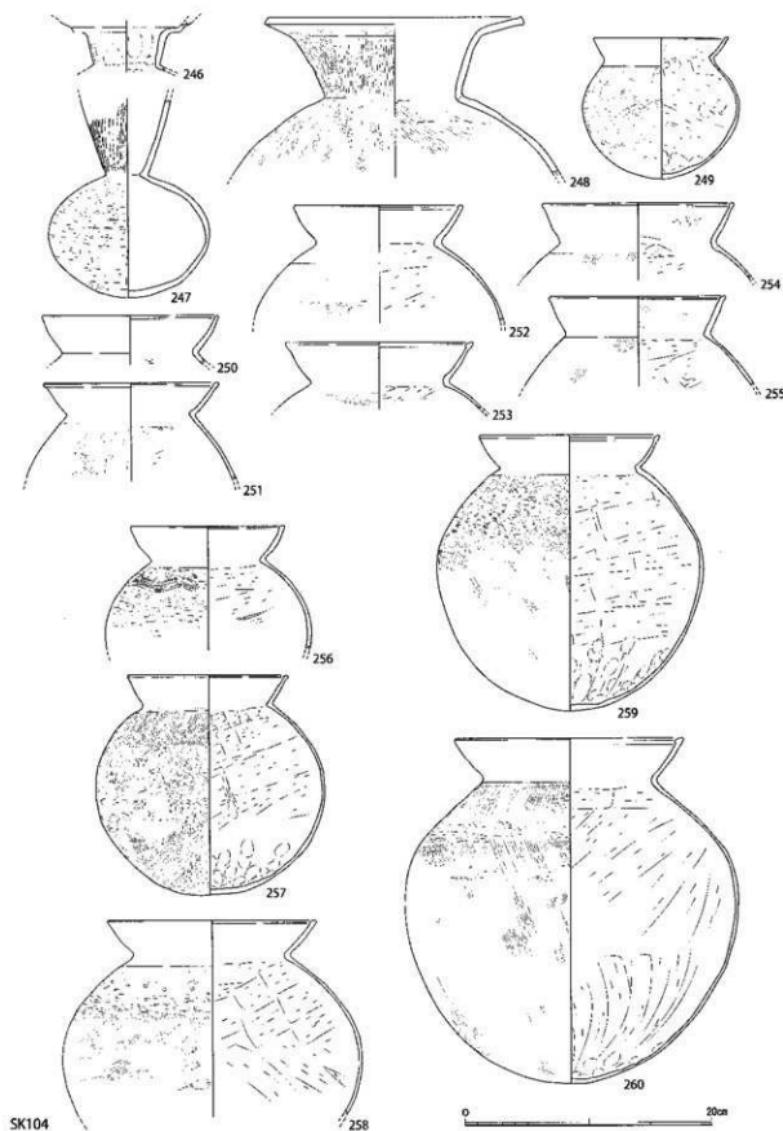


SK103

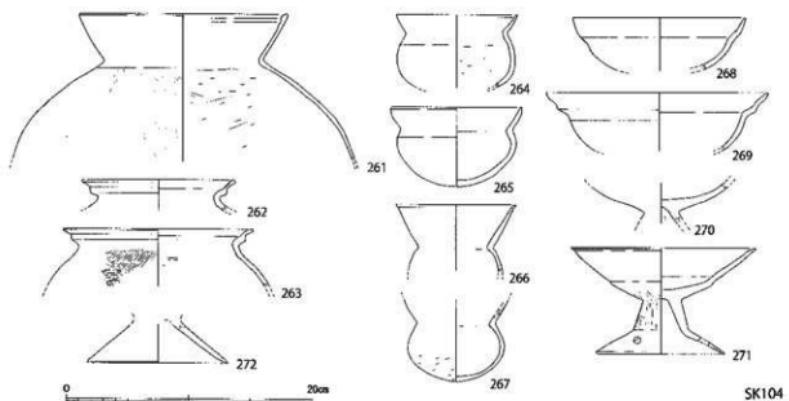
第57図 土坑SK103出土遺物実測図(S-1/4)

自然河道NR101は調査区の東西にわたって検出された河川跡である。調査区内で東西に大きく蛇行し、東半のみで両岸を検出している。調査区東半部の河道の下面には前段階の河道や溝遺構等が重複し、最も深くなっている。そのためか、ここでは弥生中・後期の土器片の混入が目立つ。調査区西半南側では北岸の法面部分のみを検出している。埋土はいずれも多量の砂が主体となり、完形品を含む多量の弥生後期後半～古墳前期の土器が出土している。おそらく河道としては古墳前・中期頃まで機能していたものと思われ、前述の土器集積遺構も同時併存したものと考えられる。なお、河道埋土の砂層からは、管玉再加工による鮮やかな青色ガラス製小玉や滑石製管玉未成品、緑色凝灰岩製管玉などの微細な遺物も出土している。

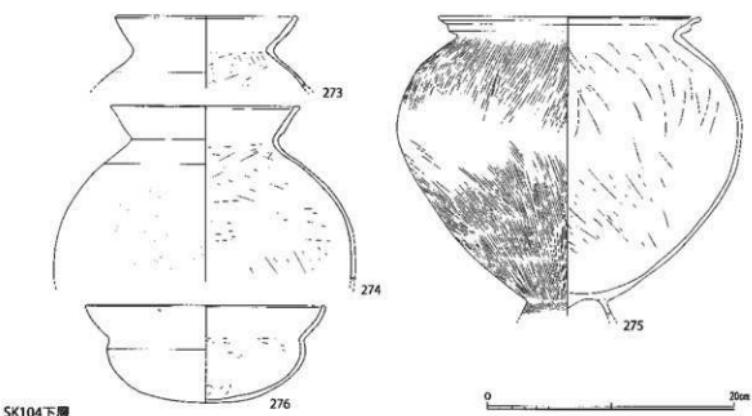
なお、銀形石出土の土坑SK108については次章で詳述するものとしたい。



第58図 上坑SK104出土遺物実測図 1 (S=1/4)

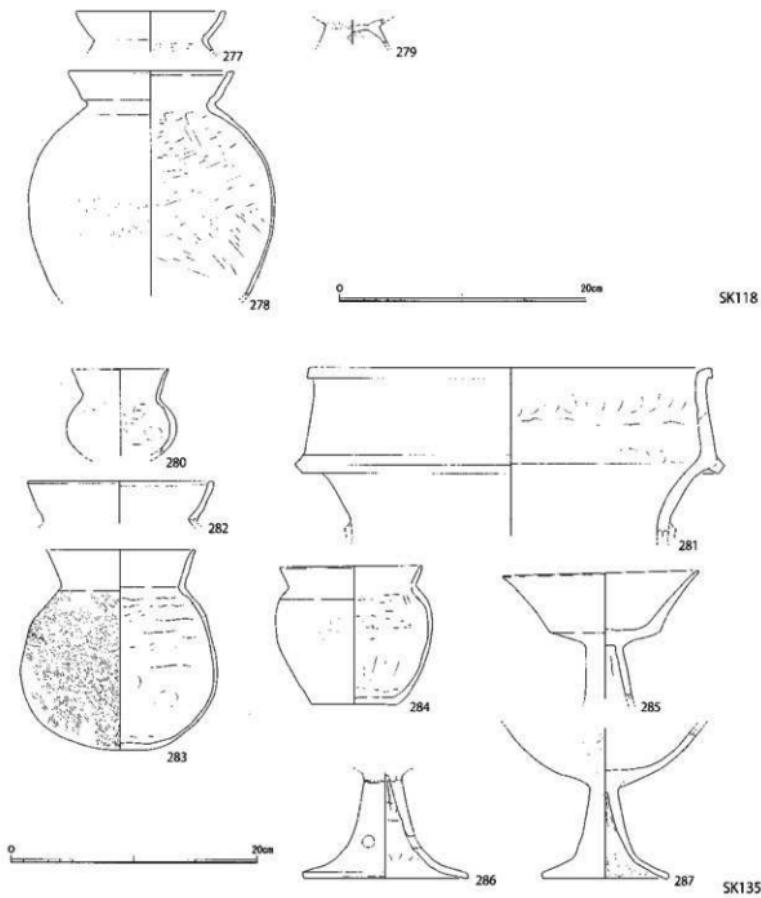


SK104

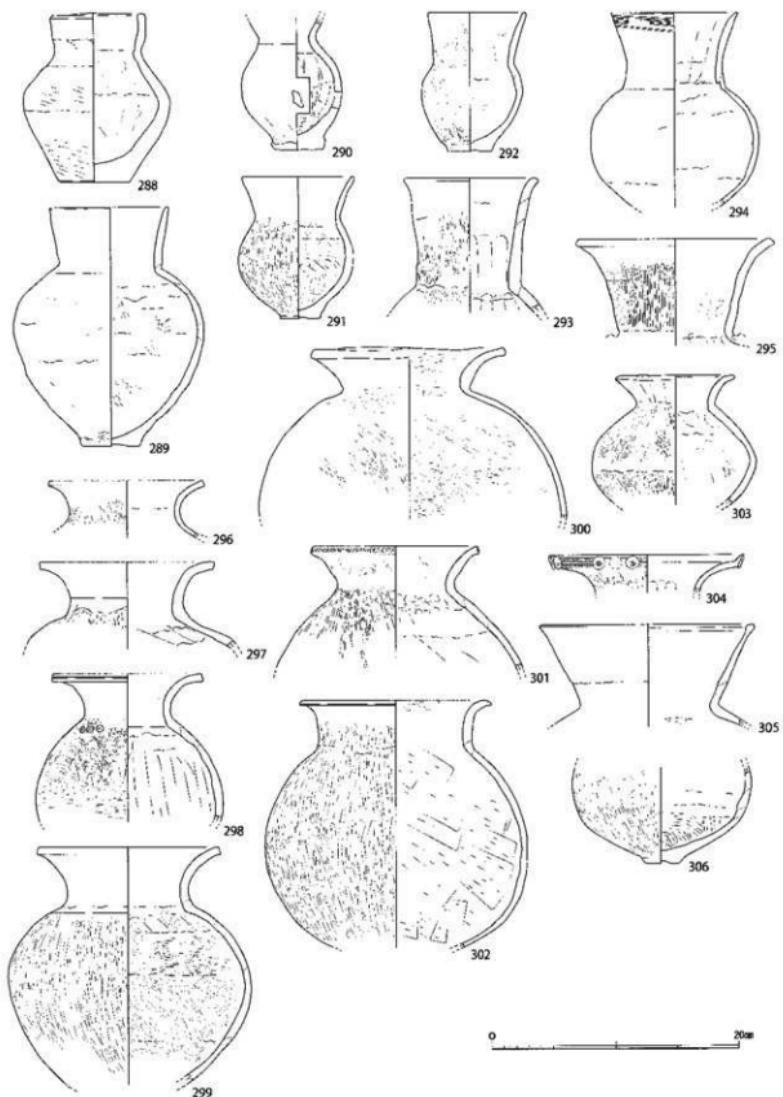


SK104下層

第59図 上坑SK104出土遺物実測図2 (S=1/4)

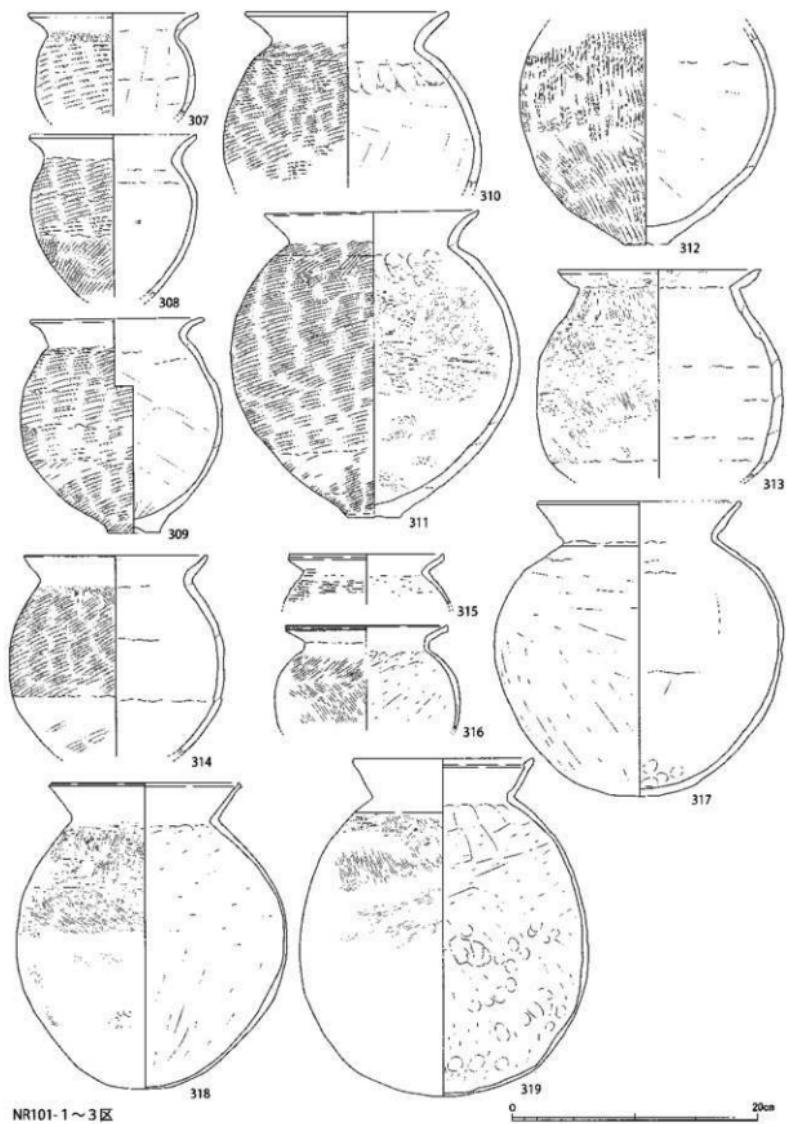


第60図 上坑SK118・SK135出土遺物尖測図(S=1/4)

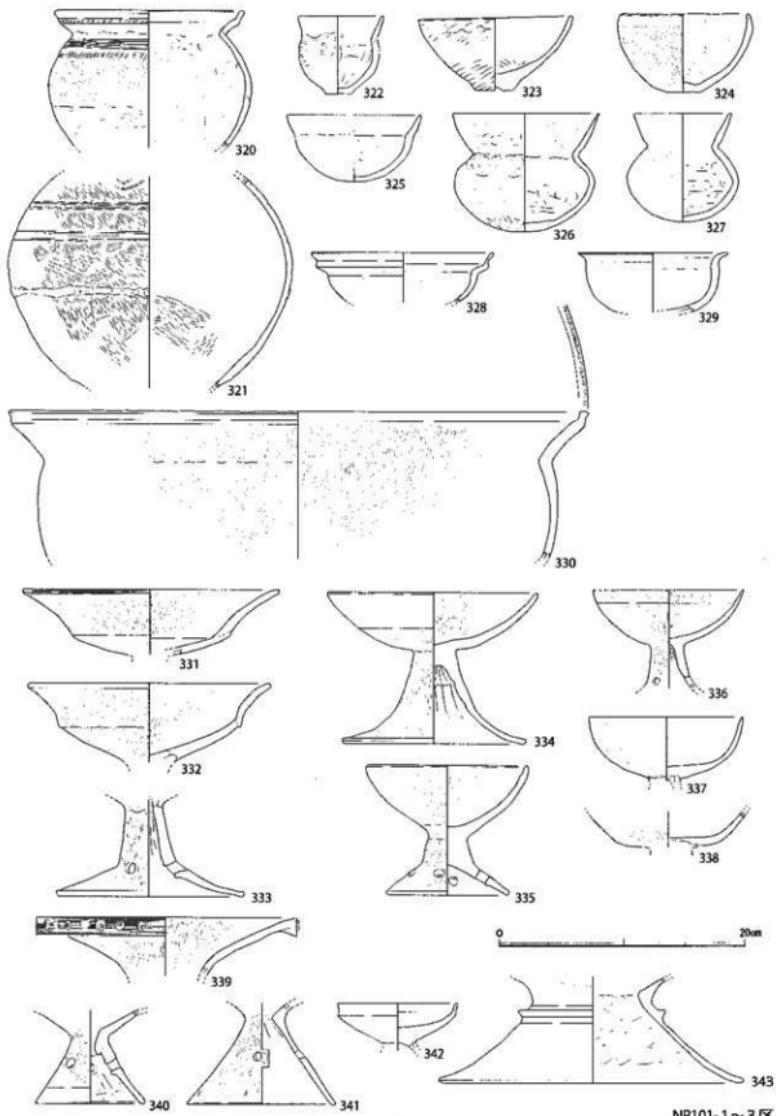


NR101-1 ~ 3区

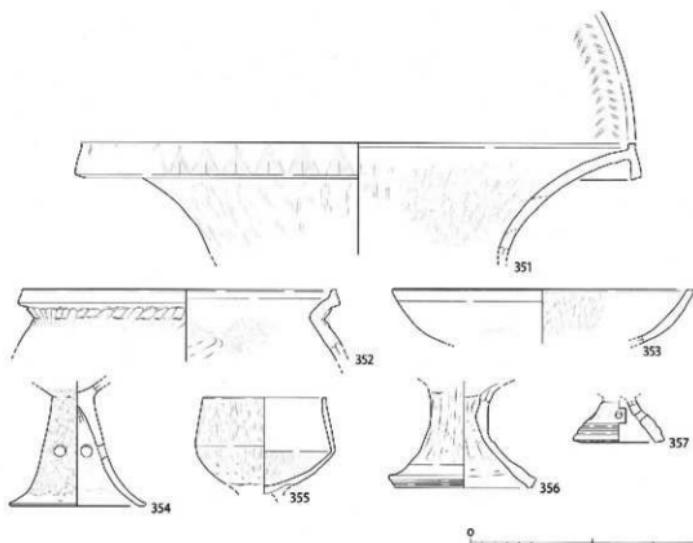
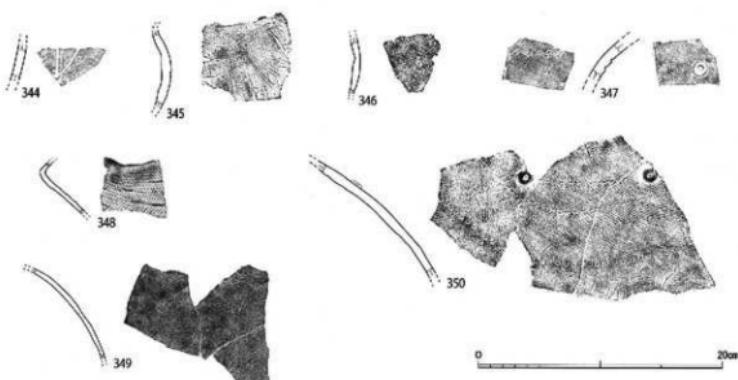
第61図 自然河道NR101出土遺物実測図 1 (S=1/4)



第62図 自然河道NR101出土遺物実測図 2 (S=1/4)

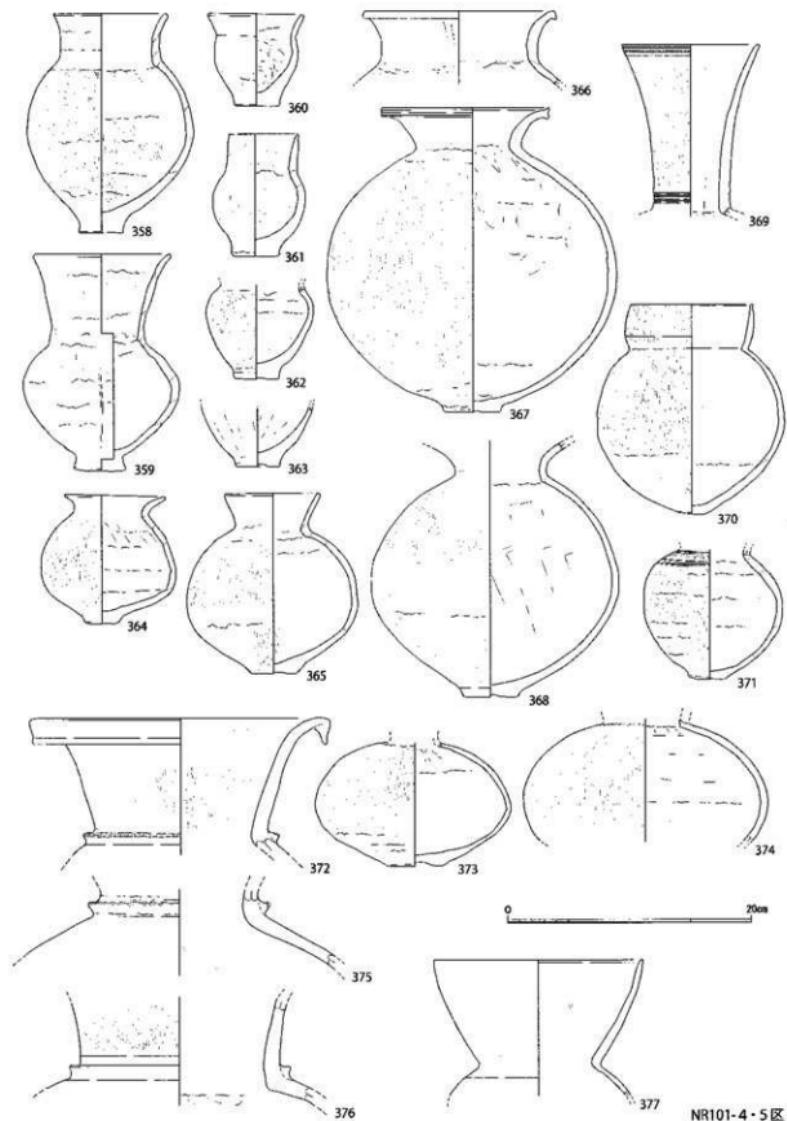


第63図 自然河道NR101出土遺物実測図3 (S=1/4)



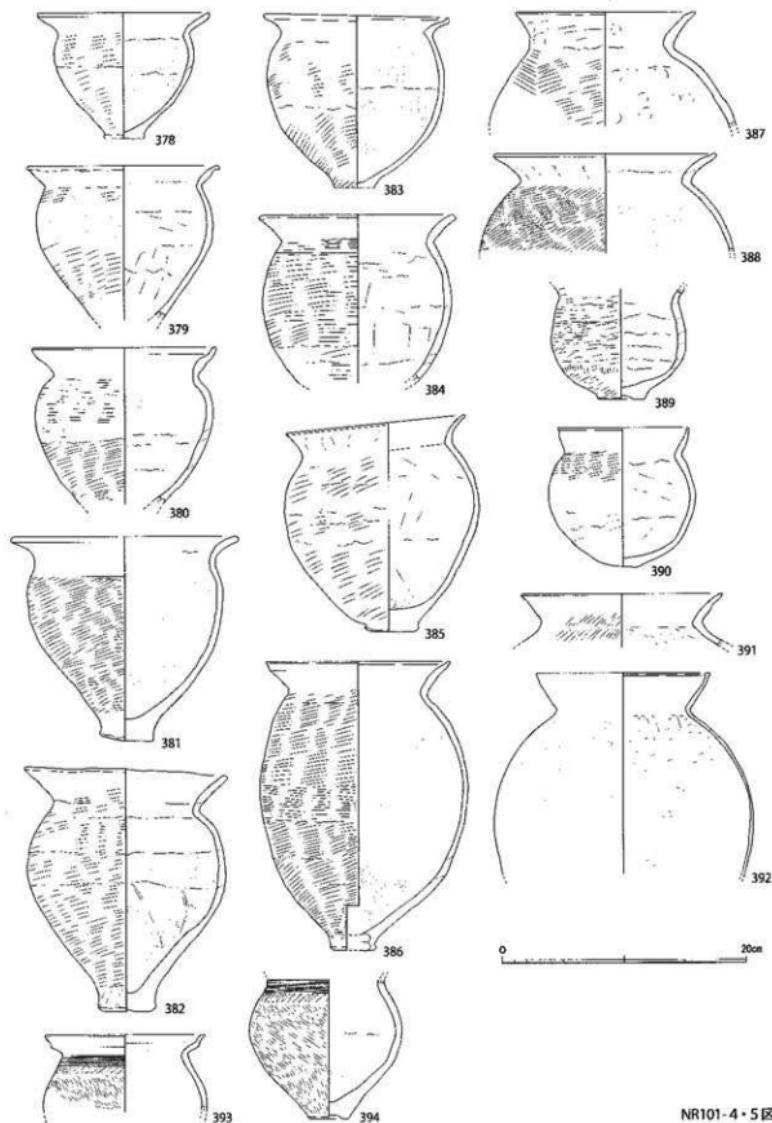
NR101-1~3区

第64図 自然河道NR101出土遺物実測図 4 (S=1/4)



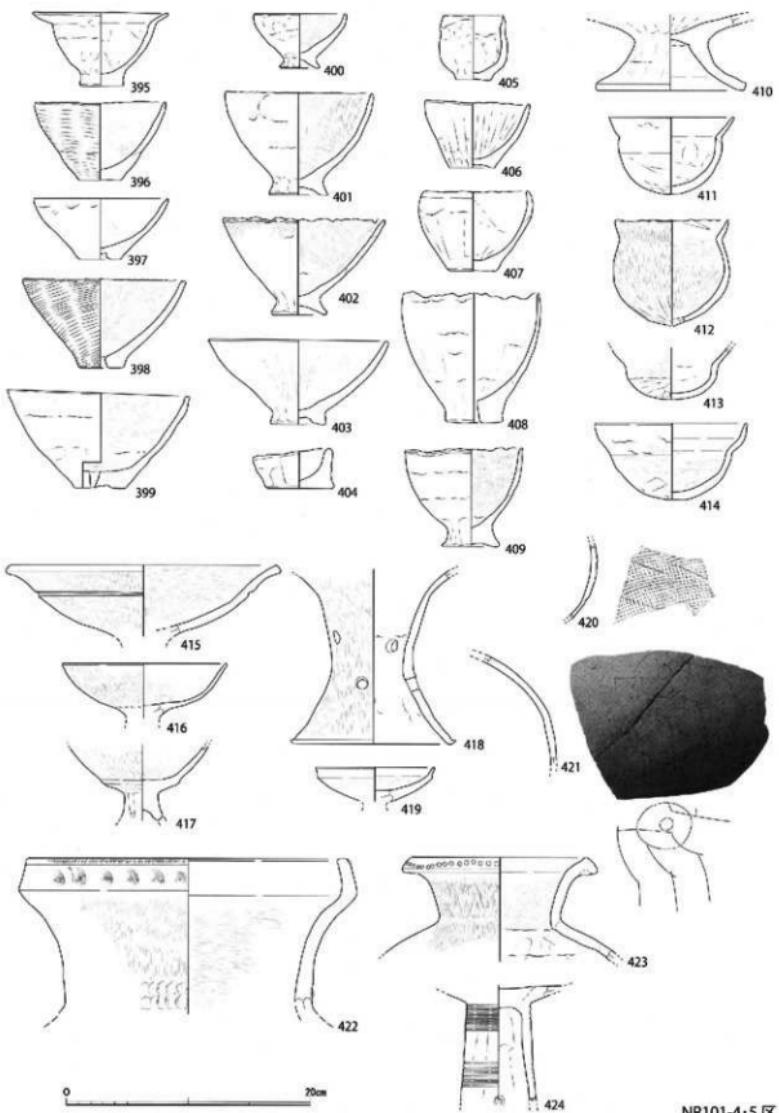
第65图 自然河道NR101出土遗物实测图 5 (S=1/4)

NR101-4·5区

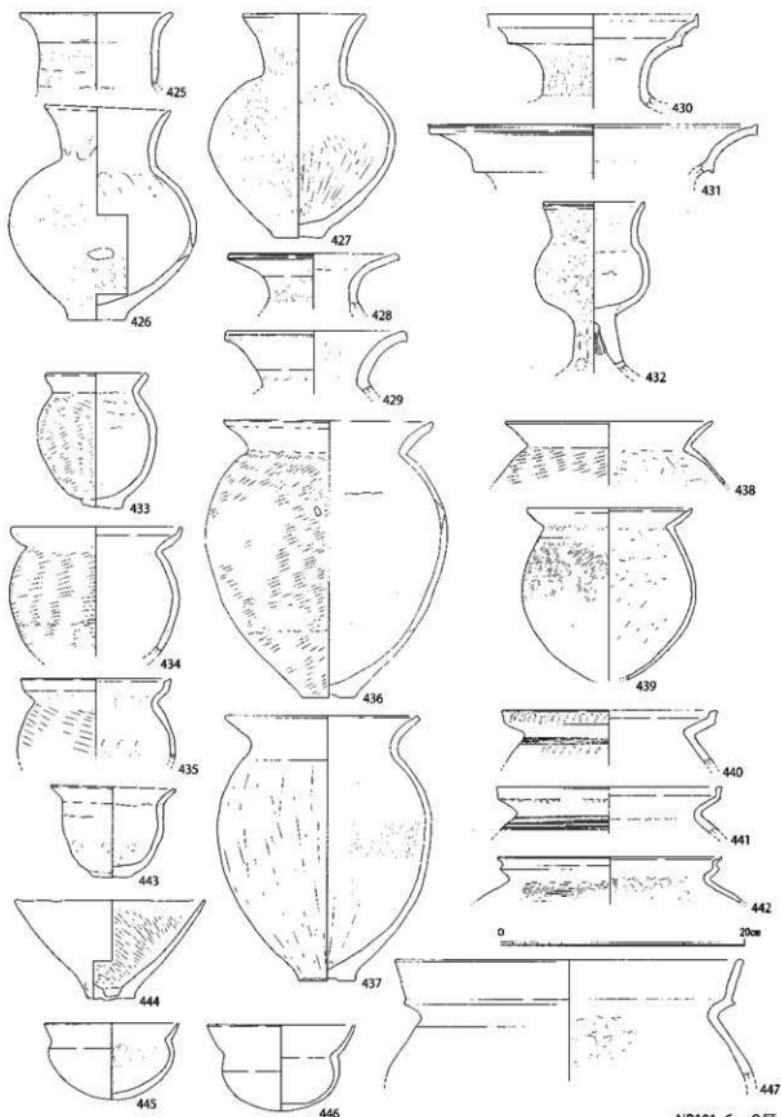


NR101-4・5区

第66図 自然河道NR101出土遺物実測図6 (S=1/4)

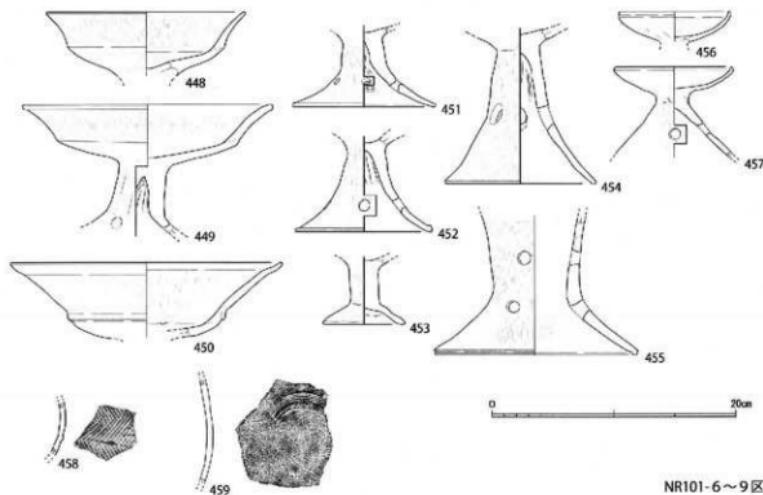


第67图 自然河道NR101出土遗物实测图 7 (S=1/4)

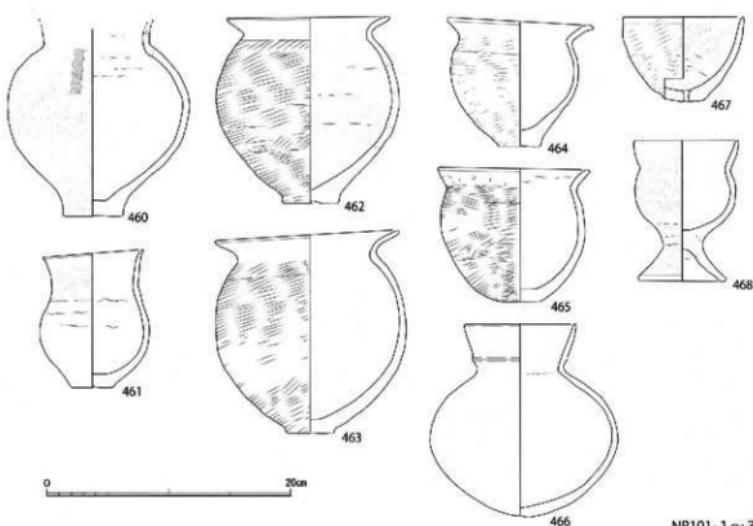


NR101-6～9区

第68図 自然河道NR101出土遺物実測図8 (S=1/4)

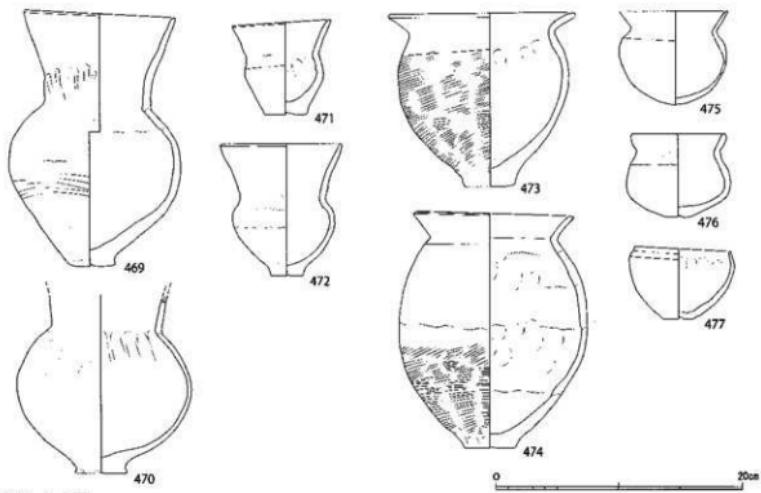


NR101-6~9区



NR101-1~3区

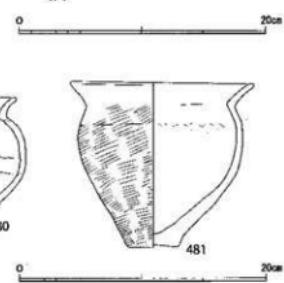
第69图 自然河道NR101出土遗物实测图 9 (S=1/4)

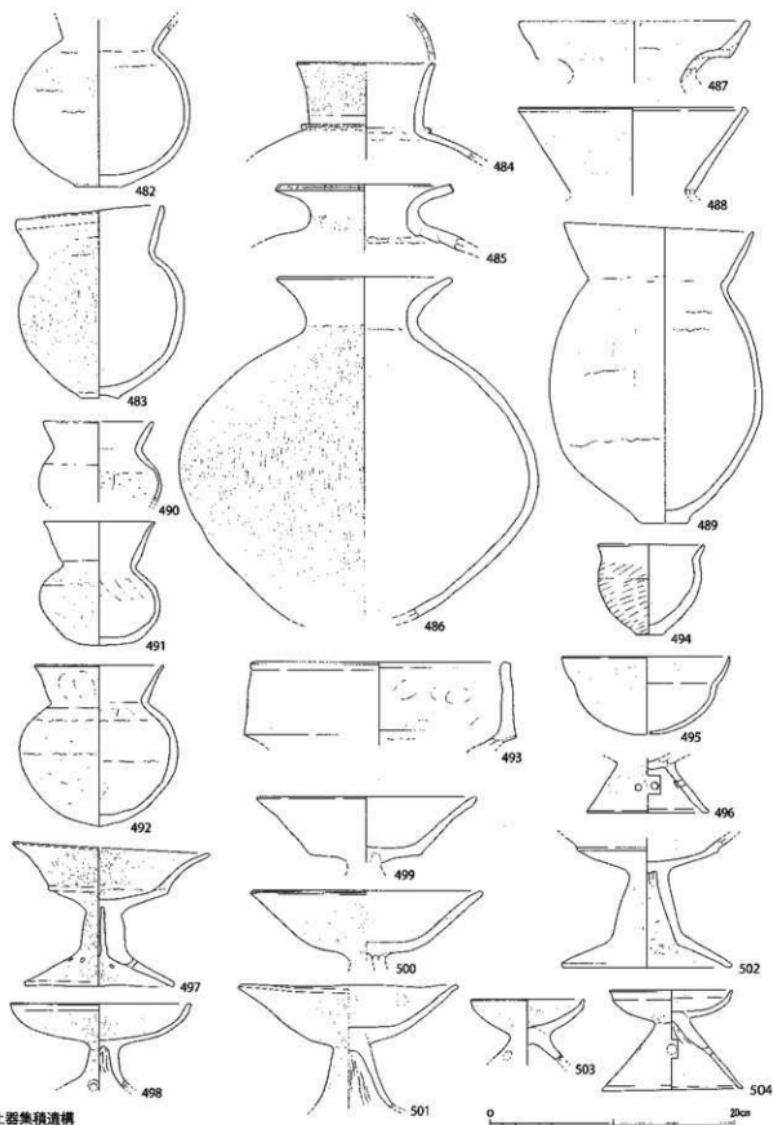


NR101-4・5区

NR101-6～9区

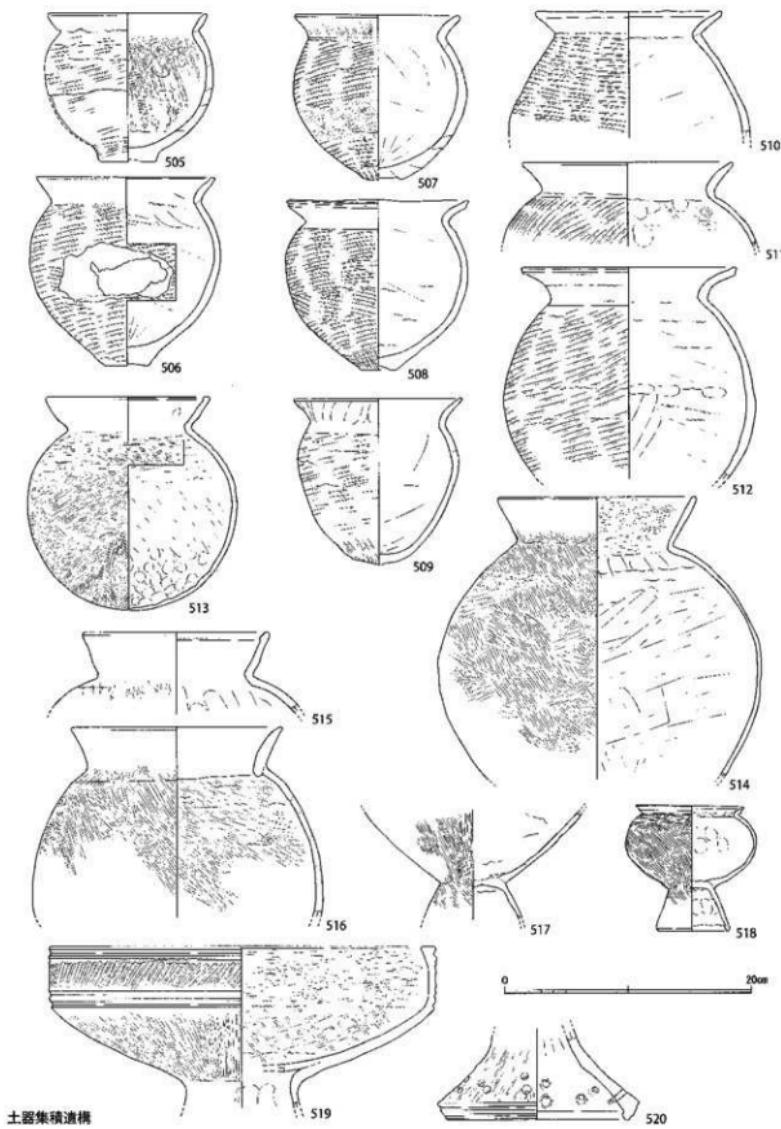
第70図 自然河道VR101出土遺物実測図10 (S=1/4)





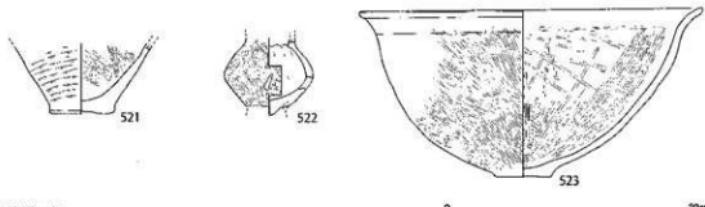
土器集積遺構

第71図 自然河道NR101北岸土器集積出土遺物実測図1 (S=1/4)



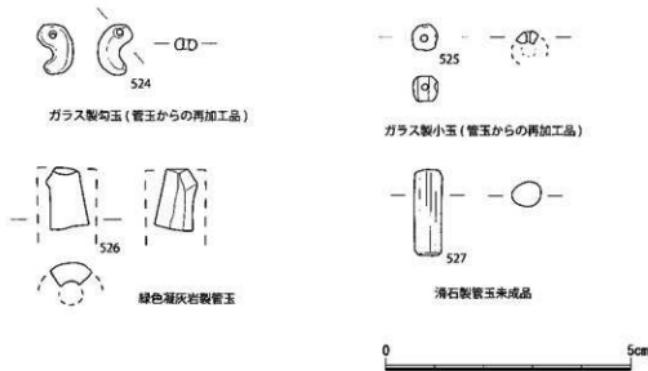
土器集積遺構

第72図 自然河道NR101北岸土器集積出土遺物実測図 2 (S=1/4)

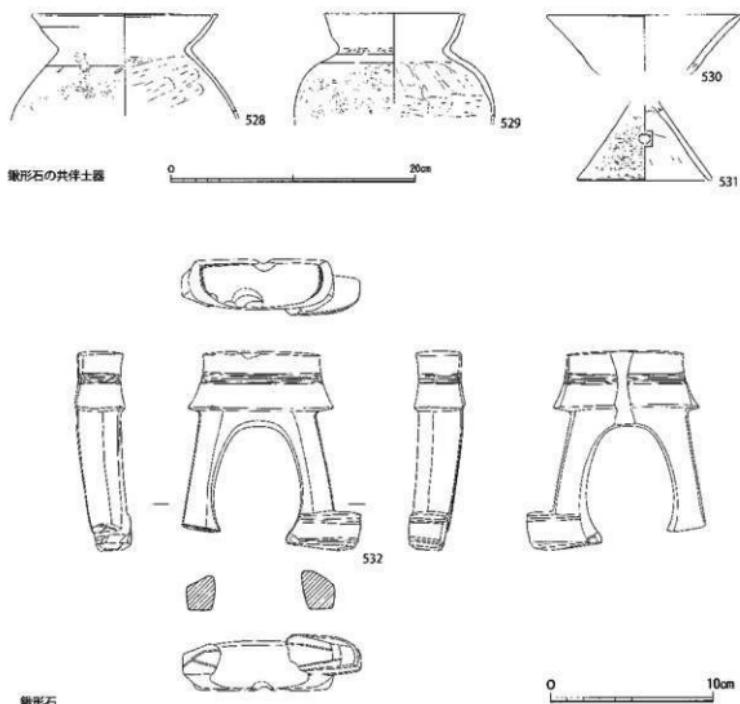


土器集積遺構下部

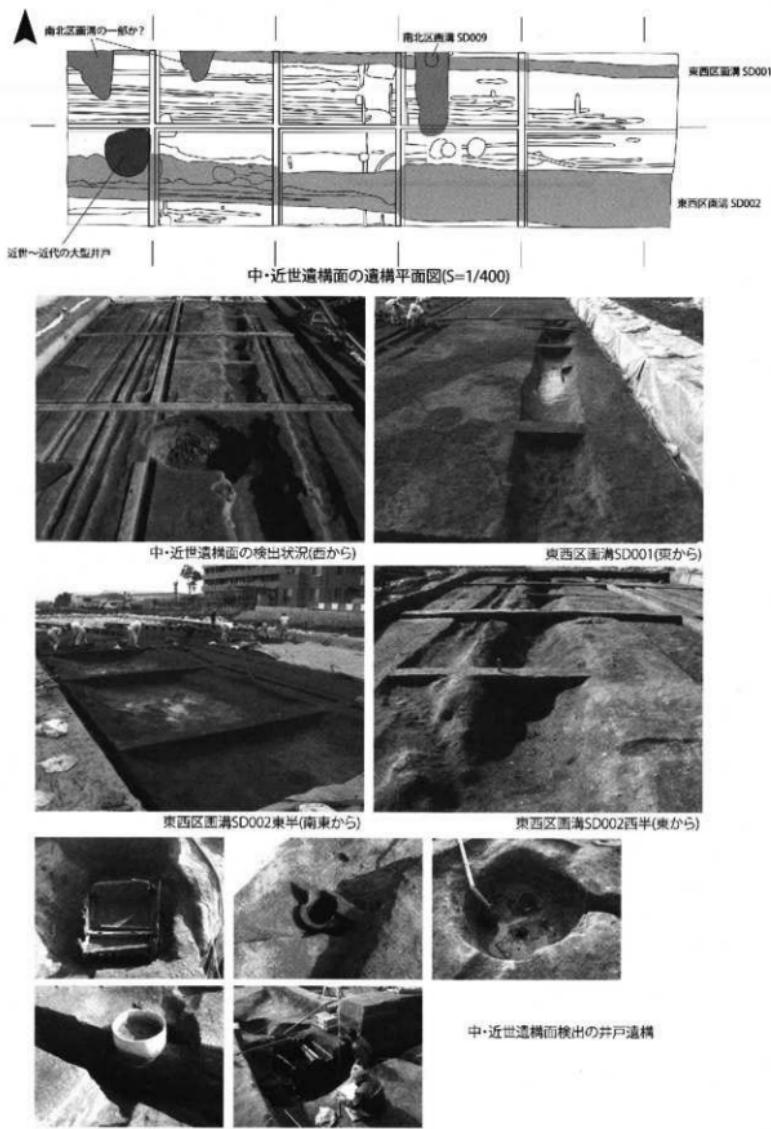
第73図 自然河道NR101北岸土器集積下部落ち込み山上遺物実測図 (S=1/4)



第74図 自然河道NR101出土玉類実測図 (S=1/1)



第75図 上坑SK108出土遺物実測図（土器S=1/4・錫形石S=1/3）



第76図 中・近世の主要遺構

IV. まとめ

今回の調査成果としては、以下の3点を挙げることができる。ここでは、近年までの周辺における調査成果とあわせて次項以下の項目ごとにまとめておきたい。

1. 弥生前期大溝と自然河道

調査区中央を北西～南東方向に弧状に巡る弥生前期大溝では、埋没期を示す弥生前期後半までの土器が多く出土した。この大溝の西側では粘土層の安定した基盤が続くが、逆方向の東側では砂、シルトを基調とした基盤層や北西～南西方向の自然河道が弥生中期段階まで続く。また、以前の第26次調査では初現の環濠出現以前の北東～南西方向の自然河道が検出されており集落出現期の居住域の想定が可能であったが、その展開としての環濠出現期が既往の調査での確認範囲より内側にあることが判明したことが成果と言える。

2. 方形区画出現前段階の区画溝について

調査区中央より東、北方に弧状に巡る断面V字状の区画溝を検出している。この溝の埋土からは弥生中期末～後期前葉の土器が出土しており、集落北東の微高地帯と安定基盤を開むような状況で位置している。以前の第8次調査で確認している弥生後期後半期成立の方形区画よりも時期的に遅り、第26次調査検出の同時期建物群を区画するような位置付けであることから弥生後期末以降の方形特定区画の前身として評価できよう。他にも前述の方形特定区画から派生する南北方向の溝も重複して検出されている。

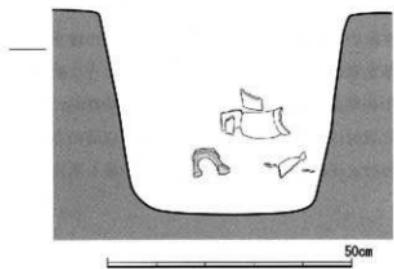
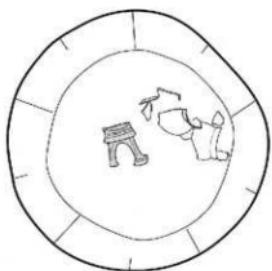
3. 錫形石と出土土坑の意義付け

(1) 検出状況と周辺遺構による出土土坑の意義付け

錫形石は、前述の川岸北縁付近で検出された遺構群に含まれる径約0.5mほどの円形の平面形をもつ土坑SK108より出土している。土坑はほぼ逆台形の断面形を呈し、底面までの深さは0.4mを測る。底面付近には有機質の混じる灰黒色粘土が10cmほどの厚さで堆積し、その上部に下端の板状部分(錫先状の部分)を意図的に打ち欠いた状態で錫形石が出土している。錫形石の下部には数個の小縫があり上端を高く斜位にして意図的に置く状況が見られ、これより上位の埋土は人為的な埋め立てと思われる粘土ブロックや小礫の混じる灰褐色粘質土となっていた。また、埋土中には破碎された布留型壺、小型器台、高杯などの土器片が混じり錫形石の共伴土器となっている。これら上器片および錫形石そのものの形態による編年観においては大きな矛盾は認められず、概ね古墳前期後半、布留式古相から中相にかけての時期幅に収まるものと理解できる。

検出土坑の性格としては、出土状態と埋土の状況により埋納を意図した土坑として考えたが、河川蛇行部分の産みに見られた上器の大層廃棄や炭化材、焼土を伴う断面V字状の浅い土坑など近在する同時期土坑群とともに、この埋納土坑を中心とした一連の祭祀行為に伴う遺構群として捉えることもできよう。

(2) 埋納された錫形石



SK108 遺物出土状況 平面・立面図(北から) S=1/20



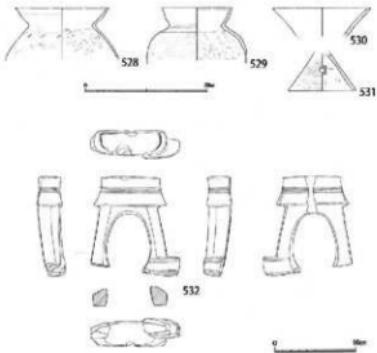
SK108 錫形石検出時の状況



SK108 断ち割り状況(北からの側面)



SK108 遺物出土状況(上面から)



SK108 錫形石と共伴土器

第77図 土坑SK108 錫形石・土器出土状況

鋸形石の材質は北陸産の緑色凝灰岩製であり、表面に石理方向の縞模様を装飾的に残す。形態的には古墳副葬品としての盛行期に多いものであるが、他の例に比べて厚みがありやや肉厚な印象のものである。意図的に先端を打ち欠くにあたり、折損部付近の周囲を砥石状の工具（石鎧か？）により直線的に擦り切る様子が看取され、その後の敲打により先端を折り取ることが想定された。なお、各部位の法量については模式図の数値を参照されたい。

（3）埋納土坑の祭祀的側面

先述の一連の同時期遺構群の在り方からは鋸形石の埋納行為に際しての祭祀行為が想定された。本来は古墳に副葬されるべき祭器、宝器であるはずの鋸形石を意図的に原型を損ねて土器とともに埋納する行為については、やはり葬送の儀式としての想定が可能と思われる。さらに、この点について強調するならば、支配領域である集落の居宅地（方形区画）の縁辺の川辺においておこなわれた葬送祭祀とも考えられよう。

4. 総括

今回の調査は、遺跡北半部における近年の宅地造成、店舗建設等に伴う調査のなかでもまとまった調査面積の調査であったため多くの新知見と成果が得られた。

弥生集落の動態としての新知見では、①弥生前期大溝がこれまでの出現期環濠のさらに内部にあることが知られ、北接した第26次第Ⅲトレンチ調査区の自然河道出土の弥生前期前半期土器群に直属する時期には機能していたものと考えられた。

次に②方形区画出現前段階の区画溝の存在からは、弥生中期末頃には集落内部の微高地を囲むように環濠内部に区画が形成されていたことがうかがえ、その後の方形区画出現の前身遺構として成立していたものと考えられる。

また、その後の経過としての弥生後期後半期の方形特定区画の成立、古墳前期前半期への継続性とともに③土坑出土石製品の意義が強調され、同時期の複数の炭・焼土混じり土坑の存在も併せて北方の首長居宅を望む位置での石製品破碎、焚き火等の祭祀行為がおこなわれたことが想起されるものである。

以上のように今回の調査では多大な成果を得ることができた。詳細については今後の遺物整理等の経過により多少の変動と再考が求められるが、本概報をもって一応の成果公表としてまとめておきたい。

（青木勘時）

5. 合場遺跡（第6次）

I. 調査の契機と経過（第78図）

今回の調査は、天理市西部の合場町に所在する井戸堂小学校校舎建設に伴う調査として実施したものである。対象地は井戸堂小学校の西側に隣接する水田で、合場遺跡の東縁辺に位置するため、埋蔵文化財の有無確認を目的として発掘調査を行なった。

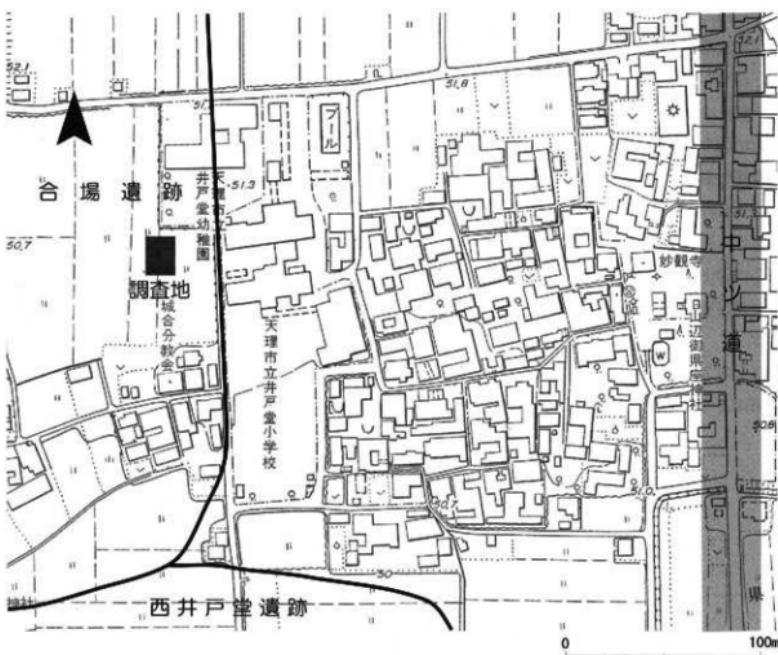
調査は対象地の水田内に南北20m、東西15mの長方形の調査区を設定し、重機により耕作土を除去した後、人力掘削に移行した。現地では平成18年10月30日に作業を開始し、同年12月15日に全ての作業を終了した。調査面積は300m²であった。

II. 調査の概要

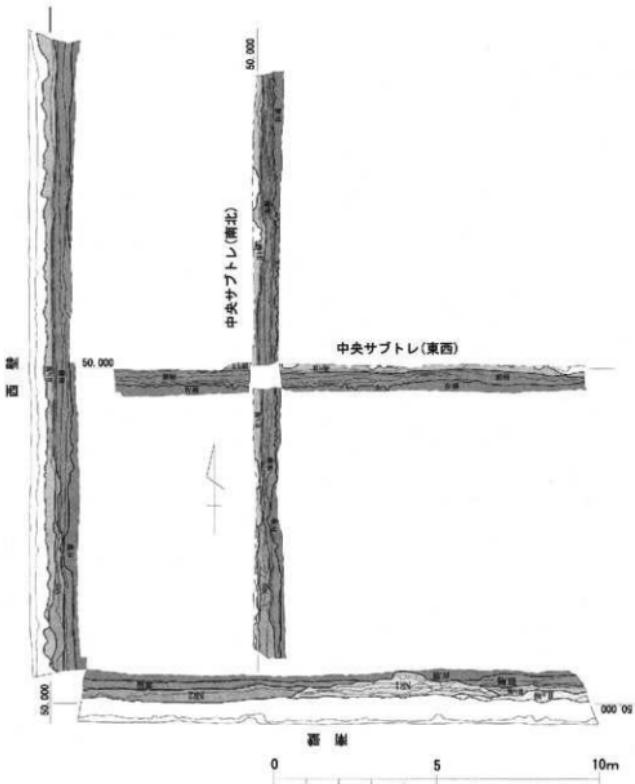
1. 基本層序（第79図）

今回の調査地における基本層序は以下の通りである。

調査地付近の現地表面をなす水田耕作面は標高50.6m前後を測り、現状ではほぼ水平である。表土（I層）は耕作土及び床土で、明緑灰～灰黄褐色土からなり、厚さ50cm前後を測る。I層を除去する



第78図 調査地点位置図 (S=1/2,500)



第79図 土層断面図 (S-1/150)

と、調査区南東側では灰黄褐色シルト層（IIa層）が、それ以外では灰黄～黄橙色系の微砂～細砂層（IIb層）が現れる。この面で、中世段階の素掘溝を確認した。IIa層はIIb層の上位に部分的に堆積した厚さ最大30cm程度の土層であり、IIa層を除去すると調査区全面にIIb層が現れる。IIb層の厚さは20～40cm程度である。

IIb層上面では、先述の素掘溝群の他に、それに切られる流路を調査区南半で検出した。流路埋土は灰色～灰黄色系の砂からなる。

IIb層を除去すると灰色～緑灰色系（下半では灰白～黒色系）のシルト～砂層（III層）が現れる。III層上面では、ほぼ東西に走る流路の北肩と、不整形の落ち込みを数基検出した。流路埋土は橙色系の砂～粗砂層からなる。

厚さ40～60cm前後のIII層を除去すると、黒褐色粘土層（IV層）に至る。IV層には遺物を含まないうえ、調査区全域に広がるしっかりした粘土層でもあることから、IV層を地山と認定した。

造構検出はIIa層・IIb層・III層・IV層の各上面で行なった。標高はIIa・IIb層上面が49.8~50.2m、III層上面が49.5~50.0m、IV層上面が49.1~49.6mを測る。

2. 主な造構と遺物

(1) 中世の造構 (第80図・第83図)

IIa・IIb層を掘り込み面とする造構群で、素掘溝群と井戸2基がある。このうち井戸については、本来はIIa・IIb層上面から堀りこまれたものであるが、埋土が周辺の土層と酷似した砂層堆積であったために同面で検出できず、IV層の黒褐色粘土層上面にいたって初めて造構の存在を認識することになった。

素掘溝群

調査区の東半分を中心に、中世の素掘溝群を多数検出した。南北方向のものと東西方向のものに大別できるが、切り合いからは東西方向のものが先行するとみられる。素掘溝は幅30~40cm、深さ10cm前後のものが多いが、数条が近接して重複したために見かけ上幅広の溝となつたものもある。

東西方向の素掘溝群では細片の出土を見たのみであったが、南北方向の素掘溝群では実測可能な遺物が一定数出土した。

1~6は瓦器陶である。1はヨコナデによって外反する口縁端部の内面側に、沈線1条を有して段状になる。高台は扁平な逆三角形の貼付け高台で、一周せずC字状になる。底部は床面に接する。体部外側は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、暗文ヘラミガキがごくわずかに看取される。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部に連結輪状文を有するがほとんど磨滅している。2の口縁部は1よりも外反が弱い。高台は逆三角形だがやや高さがある。外面の指頭圧痕は弱く、水平へ斜方向のヘラミガキが看取される。内面は同心円状の暗文ヘラミガキをやや密に施し、見込み部には連結輪状文がみられる。3は1に類似した口縁部を有するが、段が浅く而取り状になる。高台はやや扁平な逆三角形になる。外面の指頭圧痕は弱くヘラミガキを省略する。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部には連結輪状文を有する。なお、重ね焼きのため底部付近は炭素吸着が及んでいない。4は1に類似した口縁部を有する。高台には、成形時の作業台に敷かれていた藁や竹管の圧痕が顕著にみられ、本来の扁平な断面逆三角形の形状をとどめる部分はわずかである。底部は高台より突出し、高台の形骸化が著しい。外面は成形時の指頭圧痕がやや顕著で水平方向のヘラミガキを疎に施す。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキがやや疎にみられ、見込み部には連結輪状文を有する。重ね焼きのため外面の炭素吸着にムラがでている。5は3に類似した口縁部を有する。高台はやや高さのある逆三角形で、全周せず途切れる部分が見受けられるうえ、潰れて本来の形状を失っている部分も多い。底部は床面に接し、高台の形骸化が進んでいる。外面に成形時の指頭圧痕がみられ、水平方向のヘラミガキを疎に施す。体部内面には同心円状の暗文ヘラミガキが密であり、見込み部に連結輪状文を有する。6は1に類似した口縁部を有する。やや背の高い逆三角形の高台をもつが、底部は床面に接し、高台の形骸化が進んでいる。外面に成形時の指頭圧痕が顕著で、ヘラミガキは省略される。内面は同心円状の暗文ヘラミガキをやや密に施し、見込み部分に連結輪状文を配する。重ね焼きのため、口縁部の炭素吸着が希薄になる。

7は瓦器小皿である。手づくねで成形したのち、口縁部に強い一段ナデ、見込み部に不定方向のナ

デを施して仕上げる。口縁部は強いナデにより短く外反して端部は丸い。見込み部にジグザク状の暗文を施す。底面には重ね焼きによる炭素吸着のムラが見られる。

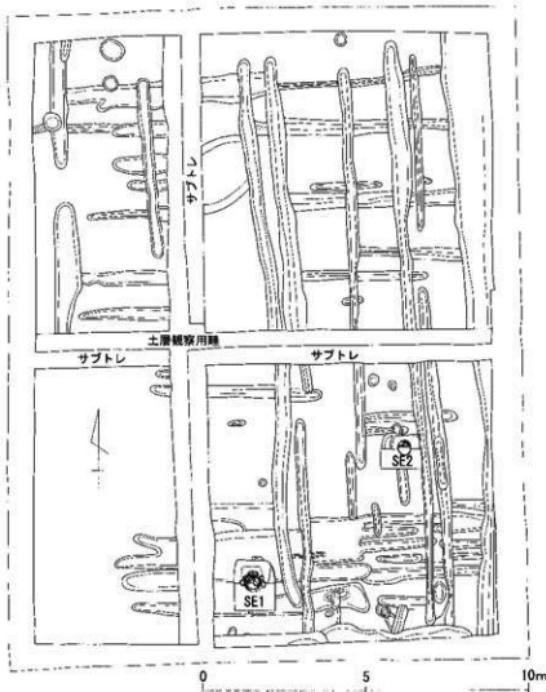
8は上師器壺である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は若干上方にツマミ出しで丸くおさめる。調整はヨコナデを主体とするが、部分的に指頭圧痕がみられる。

9は土師器皿である。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部はやや強くナデで若干ツマミ上げ、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデを主体とする。

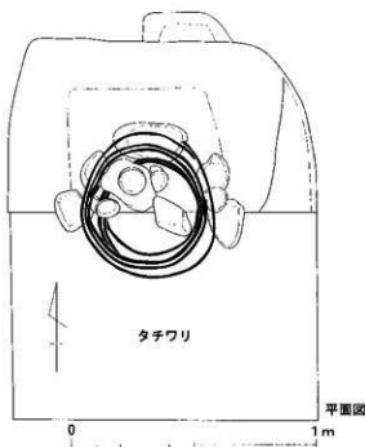
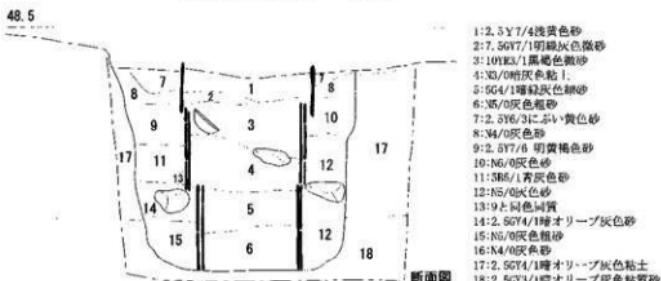
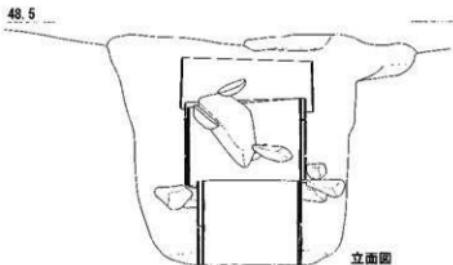
10~15は土師器小皿である。10は底部中央が高まる。体部は内湾気味に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。体部をヨコナデ、底部を指頭圧痕で調整する。11は平底で体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。器形に若干の歪みがみられる。内外面とも磨滅が著しく、ヨコナデの単位がわずかに看取できる程度である。12は底部中央が若干高まり、体部は内湾気味に立ち上がって口縁端部をツマミ上げる。内外面とも磨滅が激しく、ヨコナデや指頭圧の単位がわずかに看取されるが、切り込み円盤技法に伴う接合痕が底部に残る。外面側からの焼成後穿孔1か所が認められるほか、口縁端部付近に薄い油煙の付着がみられる。13・14は指頭圧による成形の後に口縁部を強い一段ナデで調整する。口縁端部は若干ツマミ上げで丸くおさめる。15は底部中央が若干高まり、体部は内湾気味に立ち上がって口縁端部をツマミ上げる。内外面とも磨滅するが、手づくね成形時の指頭圧痕が外面に見られ、口縁部付近はヨコナデ調整される。内面に帶状の油煙の付着がみられ、灯明皿としての使用が考えられる。

井戸SE1（第81図）

中世の井戸状遺構である。時間的制約から、検出後に南半部を大きく断ち割って調査を進めたが、



第80図 中世遺構配置図 (S=1/150)



第81図 井戸SE1 平面・立面・断面図 (S=1/20)

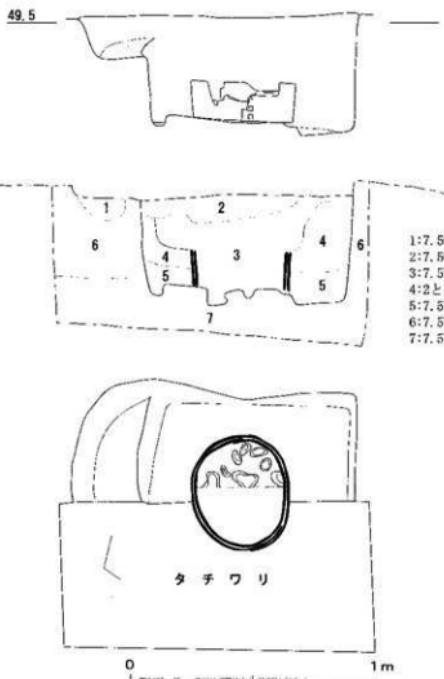
東西約1m、南北約1.4m(復元)、検出面(IV層上面)からの深さ90cm前後の方形掘り込み内に井戸枠を据える。井戸枠は二重(最上段のみ一重)の曲げ物が用いられ、3段分を検出した。下段は直径約42cm、高さ約35cmを測り、内側は1枚であるのに対して外側は高さ20cm弱の曲げ物を2枚接ぐ。中段は

直径約49cm、高さ約34cmを測り、内側が1枚であるのに対して外側は高さ8~12cmの曲げ物を3枚接ぐ。上段は直径約54cm、高さ約21cmを測り、この段のみ曲げ物は一重である。井戸枠設置後に、下方で灰色~青灰色、上方で黄色~黄褐色系の砂で周囲を埋め戻す。下段の井戸枠を完全に埋めた段階で、井戸枠を囲うように長軸20~30cmの石を設置している。井戸枠内は灰色~緑灰色系の砂で埋まっている。中段から上段にかけては廃絶時に投げ込まれたと思われる石や土師器・瓦器、木製品などがまとまって出土した。

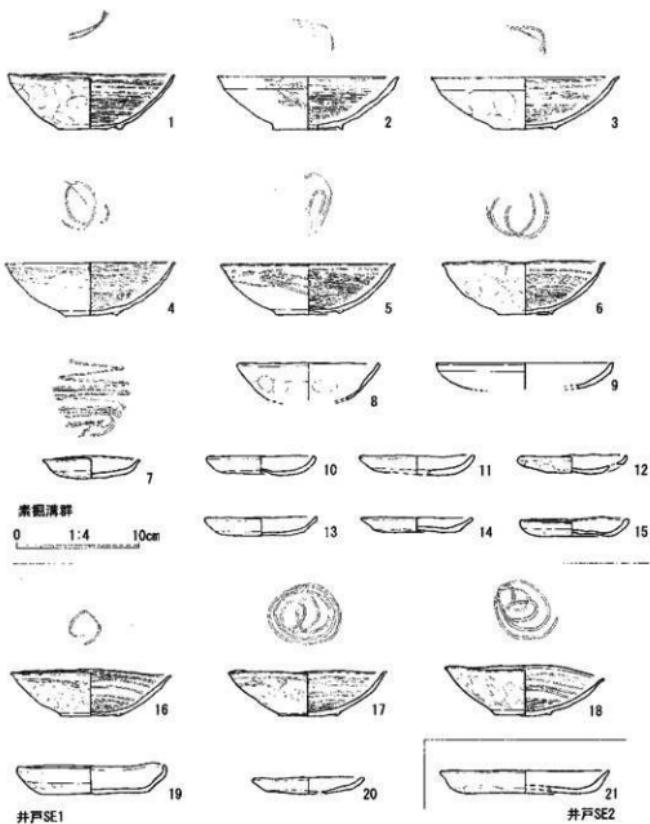
16~18は瓦器碗である。ヨコナデによって外反する口縁部の内面側に、沈線1条を有して段状になる。高台は扁平な逆三角形の貼付け高台で、16~17では全周せず16はC字形、17は馬蹄形になる。18はかろうじて全周はするものの、起端と終端が食い違っており、完全な円にならない。底部は16がわずかに上げ底気味になるのに対して17~18は高台よりも突出する。体部外面は成形時の指頭圧痕が明瞭に残り、暗文ヘラミガキがわずかに見られる。体部内面は口縁部ヨコナデ、見込み部不定方向ナデで仕上げた後に同心円状の暗文ヘラミガキを疊に施し、見込み部には16に一重の輪状文、17~18に連続輪状文がみられる。器表面には重ね焼きによる炭素の吸着ムラが大きい。なお、18は外面向に木の葉

を押しつけて圧痕を残している点が特徴的である。

19~20は土師皿である。19は器高がやや高く、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は端部ツマミ上げにより強く内湾して端部は丸い。底部には作業台の板圧痕が、体部下半には成形時の指頭圧痕が残り、口縁部~体部上半にヨコナデ、見込み部に不定方向のナデを施して仕上げる。20は手づくね成形後、口縁部に一段ナデ、見込み部に一定方向のナデを施して仕上げる。底部に外側からの焼成後穿孔1か所がみられる。



第82図 井戸SE2 平面・立面・断面図 (S=1/20)

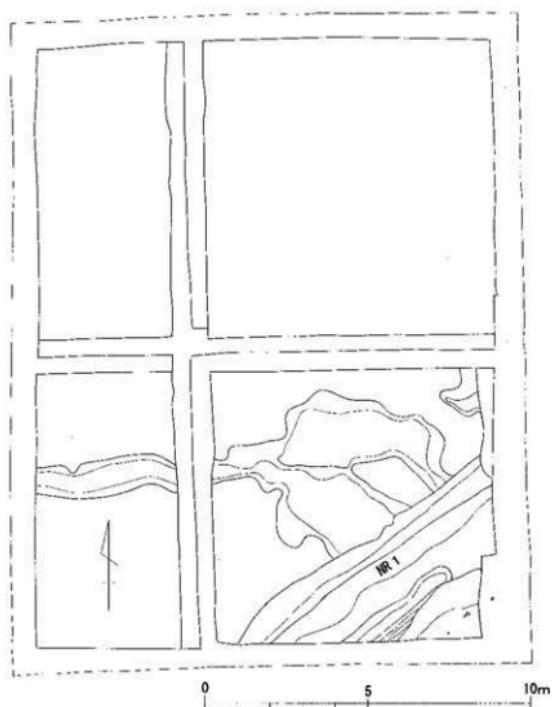


第83図 中世遺構出土遺物 (S=1/4)

井戸SE2 (第82図)

中世の井戸状造構である。時間的制約から、検出後に南半部を大きく断ち割って調査を進めたが、東西約0.9m、南北約1m(復元)、検出面(IV層上面)からの深さ50cm前後の方形掘り込み内に井戸枠を据える。井戸枠には二重の曲げ物が用いられ、1段分を検出した。直径約45cm、高さ約15cmを測る。井戸枠設置後に、周囲を灰白色粗砂と暗緑灰色シルトで埋め戻す。井戸枠内部に灰白色粗砂が流れ込み、その上層にも暗緑灰色粗砂がみられることから考えると、当初は井戸枠の周囲を灰白色粗砂と暗緑灰色シルトの互層で埋め戻していたことが想定される。

21は土師器皿である。指頭圧による成形後、口縁部内外面に一段ナデで調整し、さらに見込み部をヨコナデと不定方向ナデにより仕上げている。口縁端部は丸くおさめる。



第84図 IIb層上面遺構配置図 (S=1/150)

もヨコナデ調整する。胴部は外面に平行タタキ後水平方向カキメ、内面には同心円状當て具痕がみられ、部分的に當て具痕の上からヨコナデを施す。口頭部外側および胴部外側に自然縫の付着がみられ、胴部外側のそれは特に厚い。また、胴部外側に壺蓋の大井部が接着し、接着部分は凹む。

23・24は土師器底である。23の底部は丸底で、成形後に口縁部および見込み部をヨコナデ調整する。口縁部は強いヨコナデにより外反して端部は丸くおさめる。底部には成形時の指頭正痕が残るほか、縫合の接合痕も看取される。24は平底で、体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外側は底部へ体部下半にヘラケズリ、体部上半へ口縁部にヨコナデが看取されるが、ヘラケズリはその後のナデにより明瞭さを失く。内面は全面ヨコナデ調整後に、ヘラミガキによる放射状の暗文が施される。

(3) 古墳時代の遺構 (第85図・第87図)

調査区南半で、東西方向に走る幅の広い流路の北肩を検出したほか、北半にかけて不整形の落ち込

(2) 律令期の遺構 (第84図・第87図)

調査区南半で、斜行する自然流路1条と、それから東西方向に分かれる不整形の流路状落ち込みを検出した。このうち、斜行する流路から律令期の遺物が出土しており、存続時期の一端を示す。

自然流路NP1

調査区南東隅で検出した、北東→南西方向に走る流路である。幅3m前後、検出面からの深さ40cm前後を測る。埋土は上方が明赤褐色～黄灰色系の砂質土、下方が青灰色系の粗砂と粘土の互層となる。

22は須恵器の大甕である。頭部は外反して立ち上がり、口縁部はやや厚い。口縁部端は端面にもナデが及んで平らな面になる。口縁部は内外面と

みを複数検出している。東西方向の流路とそれに伴う淀み状の起伏を捉えたものと考えられる。

自然路NR2

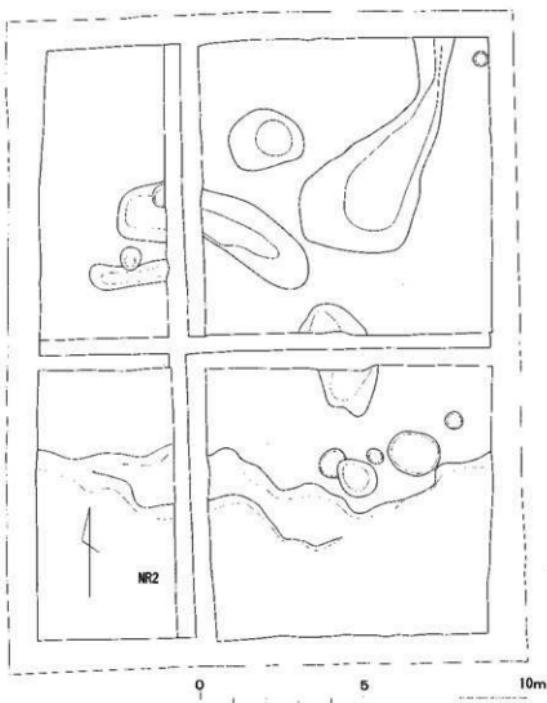
調査区南半で検出した東西方向に走る幅広の流路である。幅6m以上、検出面からの深さ35cm前後を測る。調査区内では北肩のみを検出したに留まり、南肩は調査区外にのびている。埋土は上方で灰褐色～灰色砂、下方で橙色系の砂からなる。

25は須恵器蓋である。天井部に大形のツマミを有する。時計回りのロクロナデ調整後、水平方向のカキメを施す。外面には部分的に灰降着がみられる。26・27は須恵器坏身である。水平ないしやや上向きのかえりを有し、口縁端部は26が内傾する平らな面、27は明瞭

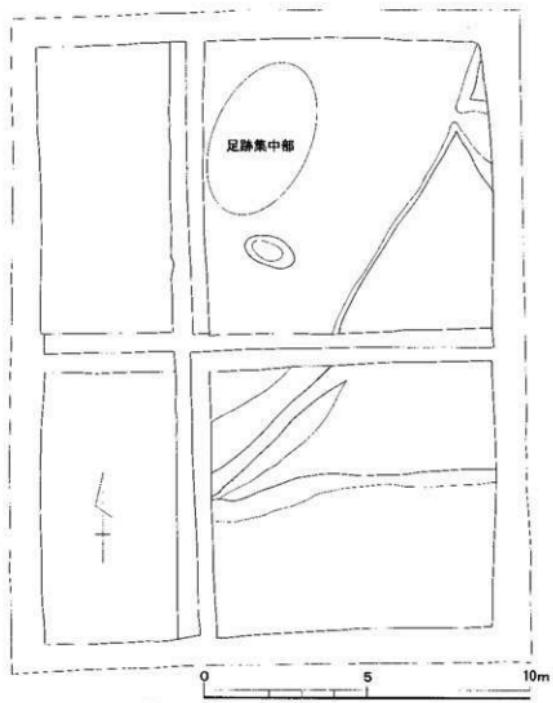
な凹面をもって段状になる。底部は丸底である。体部外面下半を回転ヘラケズリで調整する他は、内外面ともロクロナデ調整で仕上げる。

28は須恵器無蓋高杯の坏部である。坏底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部は丸くおさまる。調整は坏底部外面が回転ヘラケズリ、そのほかはロクロナデである。体部下半に櫛描波状文からなる文様帶を有し、その上下には断面三角形の凸線を上に2条、下に1条配する。また、脚部との接合部付近に水平方向のカキメを施す。さらにこのカキメを切って、脚部にスカシを切り込む際の刀子の当たりがみられる。このほか、内面には口縁部から体部にかけて灰降着、見込み部に自然釉の付着がみられる。

29～32は土師器壺である。29はやや縦長な球形の胴部から内湾する頸部が立ち上がり、口縁部はツマミ出しにより短く外反する。胴部外面は左上がりハケ、内面は不定方向ナデによって調整したのち、い頸部の内外面及び肩部外面にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。胴部のF1/3ほどは、煮炊具としての使用により被熱・煤化が見られる。内面の底部にも黒色の付着物が看取される。30は球形の



第85図 III層上面造構配置図 (S=1/150)



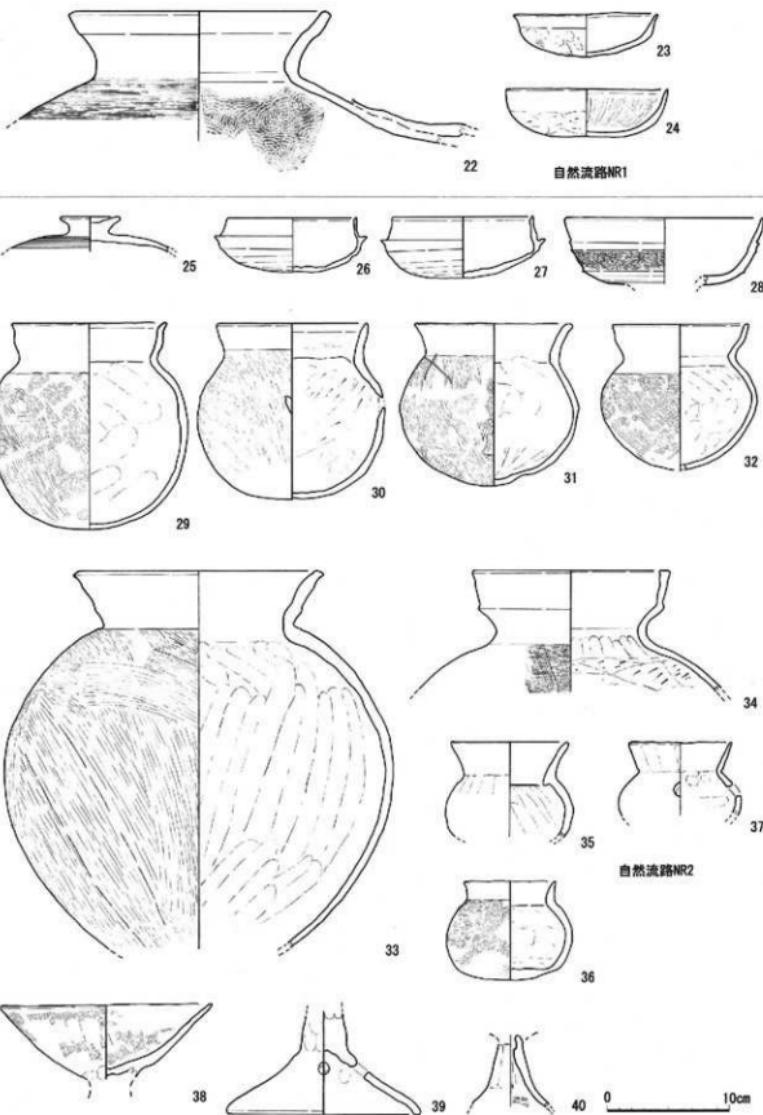
第86図 IV層上面遺構配置図 (S=1/150)

面は被熱が著しく、胸部上半を中心に器壁の剥落する部分も多い。底部は煤化が見られ、内面も胸部上半を中心に黒色の付着物が全面に看取される。

32は肩の張った球形の胸部から内湾する口頸部が立ち上がり、口縁端部はツマミ出して内傾する弱い凹面をなす。胸部外面を細かい左上がりハケ、内面を左上がりナデで調整した後、口頸部から肩部にかけてヨコナデ調整を施す。胸部外面はほぼ全面にわたって被熱ないし煤化し、内面も胸部上半を中心に黒化する。

33は十師器の大型甕である。やや縱に長い球状の胸部から頸部が直線的に立ち上がる。口縁端部は外側にツマミ出して端面を持つ。頸部から口縁部にかけては強いヨコナデが施され、胸部は外面が縦位～左上がりハケ、内面が右上がりのナデで調整される。頸部と胸部には接合のための指頭圧が看取される。胸部外面は広範囲にわたって被熱・煤化が見られ、内面も上半はやや黒化する。34は土師器大型壺である。口縁部から肩部までの破片であり、外反する頸部の上端に短く丸い稜を持ち、そこから口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は内外にツマミ出し、やや幅広な凹面を作る。頸部～口縁部はヨコナデ、胸部は外面が縦横のハケ、内面は右上がりのケズリで調整する。頸部と胸部の内面は、

胸部から口頸部が直線的に立ち上がり、口縁部端は丸くおさまる。胸部外面を粗い左上がりハケ、内面を右上がりのヘラケズリで調整した後、口頸部にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。外面の大半に煤化ないし被熱が見られ、胸部内面の上半も若干黒化する。胸部最大径付近に焼成後穿孔が見られる。31はやや横長な球形の胸部から厚手の口頸部が外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。胸部外面を細かい左上がりハケ、内面下半を放射状板ナデ、上半を左上がりナデで調整した後、口頸部にヨコナデおよび横位板ナデ調整を施す。肩部に×字状のヘラ記号がみられる。外



第87図 自然流路出土遺物 (S-1/4)

接合に伴う指頭圧が顕著である。外面は広範囲に煤化するほか、口頸部内面にも黒色付着物が見られる。

35・36は土器器小型丸底蓋である。35は球状の胴部を持ち、口頸部は若干外反して口縁端部を丸くおさめる。胴部成形後に口頸部を接合しており、口頸部界の内面には接合の痕跡がほとんど調整されずに残る。外面は著しく磨滅して調整は不明であるが、器表面には黒色の付着物が見られる。内面は胴部に強い縦位ナデ、口頸部にヨコナデが看取される。36は胴部が横長の球形を呈し、底部は平底に近い。口縁部は外反して短くたちあがり、端部は丸くおさまる。胴部外面には粗い横位ハケ、細かい縦位ハケが、内面には不定方向のナデが看取される。口縁部内外面はヨコナデ調整される。胴部上半には接合痕が顕著である。

37は底である。胴部は球形で、口頸部は直線的に立ち上がる。口縁部は外面をヘラ状工具で成形したのち、内外面を横ナデで調整する。胴部外面の調整は磨滅により不明瞭であるが、内面には横位のナデや指頭圧痕がみられる。

38~40は高杯である。38は杯部で、直線的に立ち上がる体部からやや外反して口縁部に至る。内外面とも磨滅するが、ヨコナデ後に左上がりを主体とするハケで調整する状況が部分的に看取される。

39・40は脚部である。中実の脚柱部から裾部が直線的に開き、端部は面取りされて平らな面を持つ。器面は磨滅するが、脚柱部や脚裾部内面上半に指頭圧が看取される。脚裾部上端に4方向の円形スカシ孔を穿つ。40は中空の脚柱部で下方が広くなり、若干外反して裾部に移行する。外面は磨滅するが、ヘラナデの単位がかろうじて看取される。内面は脚柱部内面にヨコナデ、脚裾部は左上がりハケが看取されるが、成形時のシボリ痕は完全には消えていない。上方から2単位の焼成前穿孔があり、一方は太く貫通するが、他方は細く途中で止まっている。

このほか、第IV層上面では北東~南西方向の地形の起伏と足跡状遺構の集中部を確認した（第86図）が、いずれも遺物を含むものではなかった。

(4) 遺物包含層出土遺物（第88図・第89図）

II a層

41は須恵器壺蓋である。天井部は扁平で、口縁部との境に稜は見られない。口縁端部は内側が面取りされて内傾する端面となる。器壁の大半をロクロナデ調整したのち、天井部外面の半分ほどに向転ヘラケズリ、内面に不定方向の仕上げナデを施す。ヘラケズリの範囲が狭いために、全体としてややシャープさを欠く器形となる。天井部外面に平行線状のヘラ記号2条が看取される。42は須恵器壺身である。口縁部のたちあがりはごく低いえ著しく内傾し、端部は丸くおさめる。全体をロクロナデ調整した後、見込み部を不定方向ナデで仕上げる。底部はヘラキリ未調整のため器壁も厚く、雑な作りである。

43は須恵器平瓶である。胴部の成形後、肩付近に穿孔して頸部を接合し、胴部上半の中心付近を粘土板で閉塞する。外面には自然釉の付着が顕著である。

44は黒色上器輪の底部である。薄手の底部に外反する高台が付き、高台の端部は丸くおさめる。ヨコナデ調整を主体とし、見込み部に一定方向のヘラミガキが看取される。また見込み部は黒色処理を受ける。

II b層

45～48は須恵器の坏蓋である。45はツマミを有する。内面に段をもつ口縁部が垂直に立ち上り、口縁部と天井部の境は短く丸く突出する稜で区画され、外面は天井部上半が回転ヘラケズリ、その他はロクロナデで調整される。内面は全面的にロクロナデで調整され、口縁部端はツマミ上げられ、明瞭な凹面をもって段状になる。口縁部外面には部分的に灰降着が見られる。46～48はツマミを持たないが、成形・調整手法は45と共通する。46は口縁部高さがやや低く、体部から天井部は深く丸みを帯びる。外面の回転ヘラケズリが天井部の2/3ほどにも及ぶ。天井部内面に灰降着が見られる。47・48はやや高い口縁部を持ち、天井部は46に比べて若干扁平である。

49は須恵器坏身である。突出の大きい断面三角形のかえりを有し、口縁部は垂直に高く立ち上がる。口縁端部は内面側に明瞭な凹面を伴って段状になる。外面は底体部のほとんどを回転ヘラケズリで調整し、ロクロナデはかえり直下に1単位見られるのみである。口縁部内外面及び見込み部は、ロクロナデおよび不定方向ナデで仕上げる。他の須恵器に比べてやや古い形態を呈する。

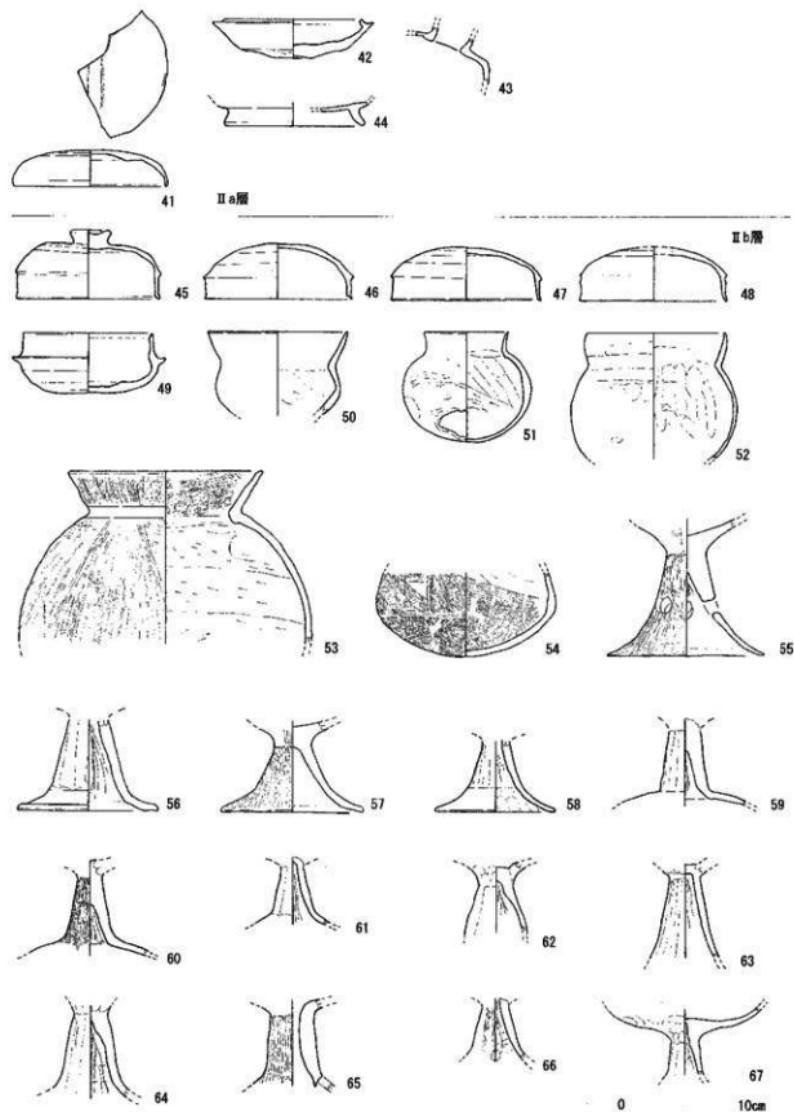
50・51は土師器小型丸底壺である。50は胴の張る扁球形の胴部からくの字状に屈曲して、若干内溝する口頸部が立ち上がる。内面には胴部と口縁部の接合痕が明瞭にみられる。磨減が激しく外面の調整は不明瞭であるが、内面では胴部を右上がり方向の強いナデで調整した後に口縁部にヨコナデを施す。51はやや横長な球形の胴部から口頸部がやや外反しながらほぼ垂直に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。外面を不定方向のナデ・ハケ、内面を胴部下半は左上がりケズリ、上半は左上がりナデで調整したのち、口縁部内外面をヨコナデで仕上げる。頸胴部界は特に強くナデしており、明瞭な稜線ができている。底部はやや大きな穴状の欠損部分があり、意図的に打ち欠かれた可能性がある。欠損部周辺の外面に黒斑があり、胴部内面は使用により黒化する。

52は土師器壺である。胴部は球状で、口頸部は内溝して立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。頸胴部界のくびれは浅い。全体に磨減が著しく調整が不明瞭な部分が多いが、口縁部外面にヨコナデや指頭圧痕、胴部内面には下から上への縱位ナデが看取される。また、胴部内面には縱位ナデによって消しきれなかった接合痕が2条程度残る。胴部上半および口頸部の内面は使用により黒変する。また、外面の胴部最大径付近に黒斑が見られる。

53は土師器壺である。球状の胴部からくの字状に屈曲して、口頸部が直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。外面は口頸部を縱位ハケ、胴部を粗い縱位ハケで調整する。内面は口頸部に横位～右上がりハケ、胴部に横位ケズリが看取される。胴部を成形後に頸部を接合しており、接合部の内面には粘土を貼り足して補強する。

54は小型丸底壺か。丸底で胴の張る扁球形の底部～胴部である。内外面とも不定方向の細かいハケ調整を密に施すが、内面の上半にはハケが及んでおらずナデの痕跡が残る。胴部最大径付近に明瞭な接合痕が看取される。

55～67は土師器高杯である。55は坏底部下端～脚裾部で、中空の脚柱部から滑らかに外反して脚裾部に至る。脚柱部と脚裾部の境に三方向のスカシ円孔を穿ち、裾端部は丸くおさめる。内外面とも磨減するが、外面には縦位ヘラミガキ、坏部内面には板ナデがかろうじて看取される。内面はスカシより上にシボリ痕が残り、以下ではこれをナデ消しているが単位はみえない。56は直線的に聞く脚柱部から大きく外反して脚裾部に至り、裾端部は丸くおさめる。外面は脚柱部に縦位ヘラナデ、脚裾部に



第88図 IIa・IIb層出土遺物 (S=1/4)

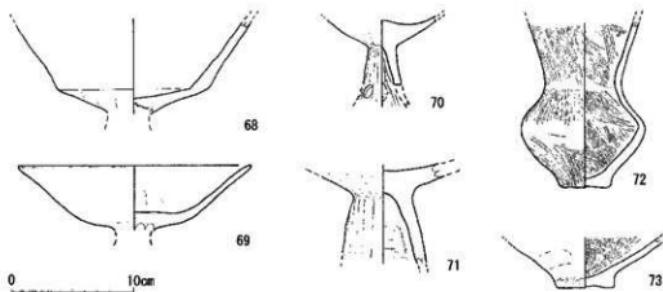
ヨコナデが看取される。内面はヨコナデを施すが、脚柱部のシボリ痕は消し切れていない。脚端部のヨコナデは強く、若干ツマミ出し気味になる。57は直線状に開く脚柱部から外反して脚部に至り、端部は丸くおさめる。脚部上端の周囲に粘土を付加して坏部を成形する。外面は磨滅が著しく調整不良である。内面はシボリ成形後にヨコナデを施し、シボリ痕をほとんど消している。58は中空の脚柱部が滑らかに外反して脚部にいたり、脚端部は丸くおさめる。脚柱部は外面に縦位ヘラナデが見られ、内面はヨコナデされるが成形時のシボリ痕がわずかに残る。脚部は外面にヨコナデ、内面には指頭圧痕や縦位ナデが看取される。59はわずかに下方に開く中空の脚柱部から明瞭に屈曲して、ドーム状をなす脚部に移行する。脚柱部外面をヘラナデ調整した後、脚部をヨコナデで仕上げる。脚柱部内面には成形時のシボリ痕が明瞭に残る。60は59と近似したプロポーションを示すが、脚柱部が59より細身である。シボリと外面ヘラナデにより成形し、脚柱部内面下端および脚部をヨコナデ、さらに外面を縦位ハケで仕上げる。脚柱部上端は周囲に粘土を付加して坏底部とする。外面には赤色顔料が付着する。

61は直線的に下へ開く中空の脚部から、脚部が大きく開く。脚部上端は坏部との接合面が露出する。器表面は全体にやや磨滅するが、脚柱部外面に縦位ヘラナデ調整、脚柱部内面にヘラ状工具によるナデが看取されるが、内面では成形時のシボリ痕がわずかに残る。62は中空の脚部で、内湾して下へ広がる。上端では周囲に粘土を付加する。破片上端の状況からは、この上にさらに粘土を充填して坏底部上面としたことがうかがえ、現状ではその充填粘土が剥離している。器表面は磨滅するが、接合部の外面には接合時の指頭圧痕がみられる。脚部外面はヘラ状工具による面取りを施すが、内面は未調整で成形時のシボリ痕が明瞭に残る。63は滑らかに外反する中空の脚柱部である。外面はヘラナデ調整、内面は上方に成形時のシボリ痕が残るが、ヨコナデにより部分的にシボリ痕が消される。64は内湾しつつ広がる中空の脚柱部で、下方で大きく外反して脚部に至る。シボリ成形後に外面をヘラナデ調整する。内面は上半でシボリ痕が明瞭にみられ、下半はヨコナデ調整されるもののシボリ痕を抹消するには至らない。脚柱部上端の周囲に粘土を付加して坏底部としており、その外面もヘラナデ調整される。65はほぼ垂直にのびる中空の高坏脚柱部で、器壁は厚手である。上端には円盤充填技法による坏底部との接合面が露出している。脚柱部と脚部の境付近に円形スカシ孔を穿つ。外面を幅の細いミガキで調整し、内面は横位のヘラナデにより成形時のシボリ痕を消す。66は下に開く中空の脚柱部で、外面は縦位ハケ調整を施し、成形時のシボリ痕跡を横位ヘラケズリでほとんど消している。脚柱部と脚部の境に、2孔・対の円形スカシ孔がわずかに看取される。

67は高坏の坏底部～脚柱部である。脚部は中空で下方へ直線的に開き、上端に坏底部を接合する。坏底部～脚部上端の外面に指頭圧痕、脚柱部外面にヘラナデが看取される。脚柱部内面は未調整で、成形時のシボリ痕が残る。

III層

68～71は高坏である。68・69は坏部である。68は直線的にのびる底部から大きく屈折して体部が立ち上がり、境には明確な稜を持つ。器表面は磨滅するが、外面では底部に縦位ナデ、脚部との接合面付近に不定方向のナデないし指頭圧痕が看取される。体部はヨコナデで調整されるが、単位は明瞭でない。69は体部がやや外反して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面の磨滅が著しいが、調整はヨコナデを主として、脚部との接合部分や見込み部には接合時の指頭圧痕が看取される。破面の



第89図 III層出土七遺物 (S=1/4)

状況から、脚部上端の周囲に粘土を付加して坏部を成形する状況がうかがえる。70は坏底部から脚柱部片である。脚柱部は中空で、直線的に下方へ開き、外反して脚裾部へ移行する。坏底部外面は縦位ヘラナデ、内面は放射状のヘラミガキを密に施す。脚部外面は幅の狭い縦位ヘラナデで調整され、内面はシボリ成形後に横位のヘラナデを施すが、シボリ痕はわずかに残る。脚柱部と脚裾部の境付近に3方向の円形スカシ孔を穿つ。71は坏底部～脚柱部である。わずかに下方に聞く幅広で中空の脚柱部の上端で、厚手の坏底部に移行する。外面は縦位ナデを主体とし、坏底部内面はハケおよびナデ、脚柱部内面は成形時のシボリ痕を坏底部をナデや横位ヘラケズリで消す。

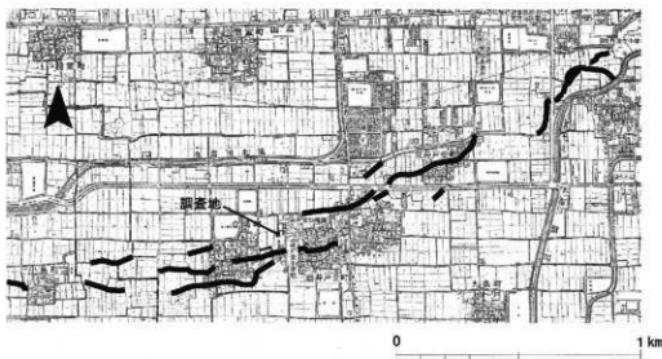
72・73は壺である。72は頸部～底部である。底部が突出する平底の長頸壺で、横に長い球形の体部から緩やかに頸部に移行し、頸部は直線的にのびる。外面は縦位ハケ、内面は左上がりハケで調整する。胴部内外面には接合痕がわずかに残る。胴部下半に細長い黒斑を有する。

73は底部～胴部下端である。底部は突出する平底の形態で、側面及び底面を丁寧な指彫押や板ナデにより調整する。胴部は外而が若干磨滅しており調整は不明瞭であるが、底胴部界付近に板ナデ工具の圧痕がみられる。内面は放射状の左上がりハケが明瞭で、使用により黒化する。

II. まとめ

今回の調査区では、中世の耕作痕跡群および井戸群、律令期・古墳時代中期の自然河川を各1条検出した。古墳時代河川の下層も弥生後期以降の土器を含む砂質土の堆積であることから、弥生時代後期から律令期に至るまで、調査地付近は河川を近傍に控えた後背地あるいは自然流路そのものであつたと判断できる。調査では古墳時代中～後期を中心として多量の土器が出土したが、ほとんどローリングを受けていないものやほぼ完形で出土したものも一定量あることから、調査地近傍、おそらく合場遺跡の集落から投棄されたものである可能性が高い。

中世に入るとこうした様相は一変して、調査地付近は耕作地となる。元來河川性の土地であることから湧水も豊富であったとみられ、調査区内でも2基の井戸を検出した。耕作に伴う素掘溝が正方位を取ることから、このころまでに調査地付近に条里地割が及んでいたことが分かる。耕地化後は、調査区の範囲では屋敷地等に転換した形跡は認められず、中世以降連続と耕作が続けられてきたものと思われる。



第90図 調査地周辺にみられる条里の乱れ（斜行・屈曲地割）

ここで、今回の調査区で検出した流路について、若干の地理的検討を加えておきたい。周知の通り、奈良盆地内は広く条里地割が施行され、現在に至っても正方位の地割が卓越する地域であるが、調査地周辺にはちょうど調査地をはさむ形で、正方位地割に斜行しておおむね北東—南西方向を取りつつ蛇行する里道や土地境界が散見される（第90図）。また、調査地から東北方へ斜行地割を追うと、断続的ながら丹波市小学校付近で現在の布留川北流に連続する。

奈良盆地を流れる河川には条里地割に沿って正方位の流路を取るものが多く、布留川についても北流は調査地の北方を、本流は調査地の東方をそれぞれ条里地割に沿って流れているが、これは自然地形に沿った斜方位の流路を条里地割に沿って改変した結果であると考えられている。とすれば、今回の調査で検出した自然流路および調査地周辺に散在する斜行地割は、条里に沿って改変される以前の布留川旧流路の痕跡であるとの推定も成立しうる。

この推定に立つ場合、流路本体を現流路に付け替えたにもかかわらず、旧流路に基づく地割が条里地割の浸食を受けずに残っている点などについて説明が必要となるが、現段階ではこれを一つの作業仮説として、付近における今後の発掘調査、旧地形の解明を進めて行くこととしたい。（北口聰人）

第10表 出土遺物観察表(1)

番号	層位 遺構	地区	器種	色調	形状	焼成	法量		残存率	調整・備考
							口径・底径or縁径	最高(現存高)		
1	南東	梅	SYG/1灰	青 (長石含む)	やや 歯	13.7・5.1	4.4	底部完存	(外)指輪形・ヨコナデ (内)クワガタ	
2		梅	N5/0灰	青	良好	(14.8・5.8)	4.2	底部1/2		
3	南東	梅	M4/0灰	青	良好	(15.4・5.0)	4.2	底部1/2 口縁部1/4	(外)指輪形・ヨコナデ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	
4		梅	N5/0灰	青	良好	14.0・4.2	4.3	底部消失		
5	南東	梅	N5/0灰	青	良好	(14.1)・5.2	4.1	底部1/2 口縁部1/3	(外)指輪形・ヨコナデ (内)ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	
6		梅	N5/0灰	青	良好	(13.2)・4.5	4.2	底部4/5		
7	南東	小皿	N3/0暗灰	青	良好	7.9	1.6	完存	(外)指輪形・ヨコナデ (内)ヨコナデ・ナダ・ヘラミガキ	
8		坪	7.5YR7/4 にぶい粗	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(11.5)	(3.1)	口縁部1/4		
9	南東	皿	7.5YR7/4 にぶい粗	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(14.4)	(2.1)	口縁部1/4	ヨコナデ	
10		小皿	10YR7/3 にぶい黄	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	8.9・6.3	1.4	底部4/5		
11	南東	小皿	7.5YR7/4 にぶい粗	やや青 (長石・石英少含む)	良好	9.4・4.8	1.5	1/2	ヨコナデ	
12		小皿	10YR7/3 にぶい黄粗	やや青 (長石・石英わずかに含む)	良好	8.8	1.4	4/5		
13	南東	小皿	10YR7/3 にぶい黄粗	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	9.2・6.9	1.5	1/2	ヨコナデ・指輪形	
14		小皿	2.5Y7/3 浅黄	やや青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(9.1)・7.0	1.2	1/3		
15	南東	小皿	10YR7/4 にぶい黄粗	やや青 (長石わずかに含む)	良好	(8.6)・5.8	1.3	完存	ヨコナデ・指輪形	
16		梅	N3/0暗灰	青 (長石わずかに含む)	良好	13.3・4.7	3.9	完存		
17	SE1 井内	梅	N3/0暗灰	青 (長石わずかに含む)	良好	12.8・4.7	3.7	完存	(外)ヨコナデ・指輪形・ヘラミガキ (内)ヨコナデ・指輪形・ヘラミガキ	
18		梅	N4/0灰	青	良好	13.0・4.6	4.2	完存		
19		皿	2.5Y7/2	青	良好	11.9・8.8	2.3	完存	(外)ヨコナデ・指輪形 (内)ヨコナデ・ナダ	
20		小皿	10YR6/3 にぶい黄粗	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	9.2・6.9	1.3	1/2		
21	SE2	皿	10YR6/4 にぶい黄粗	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(13.8)・10.3	1.8	1/5	ヨコナデ・指輪形 (外)ヨコナデ・指輪形・ナダ・カキメ (内)ヨコナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	
22		坪	5Y6/1灰	青 (長石・石英含む)	良好	(20.4)	(10.6)	口縁部1/4		
23	NRI	坪	7.5YR7/4 にぶい盤	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(11.8)	3.5	1/4	(外)指輪形・ヨコナデ (内)ヨコナデ	
24		坪	7.5YR7/3 にぶい盤	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	(13.2)・5.6	3.9	1/4		
25	南西	皿	5Y6/1灰	青	良好	ツマミ径4.9	(2.7)	天井部上半	(外)ヨコナデ・カキメ (内)ヨコナデ	
26		坪	5Y6/1灰	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	10.4	4.5	完存		
27	NR2	坪	10Y7/1灰白	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	11.5	5.0	完存	(外)ヨコナデ・田輪・ヘラケズリ (内)ヨコナデ	
28		高坪	5Y6/1灰	青 (長石・石英含む)	良好	(16.1)	(5.7)	底部1/4		
29	南西	皿	5YR7/6盤	やや青 (長石・石英含む)	良好	12.4	17.0	完存	(外)底上切ハサ・ヨコナデ (内)ナダ・指輪形・ヨコナデ	
30		皿	5YR8/6盤	やや粗 (長石・石英多く含む)	良好	12.2	14.4	完存		

第11表 出土遺物観察表(2)

番号	層位 遺物	地区	器種	色調	胎土	焼成	法値		残存率	調査・備考
							仁科・武将城・堀保	石高(現存高)		
31	南東	甕	5YR7/2 高施尻	やや密 (長石・石英含む)	良好	12.5	13.3	脚柱部充存 白頭部53.4	(外)上部40.0・ヨコナダ (内)脚柱部・脚柱頭・左上50%ナダ	
32	南西	甕	10YR6/2 灰黄垢	やや密 (長石・石英含む)	良好	11.0	(12.0)	脚柱部 ほぼ充存	(外)上部40.0・ヨコナダ (内)脚柱部・左上50%ナダ	
33	南東	甕	10YR8/3 浅黄程	密 (長石・石英含む)	良好	(19.2)	(31.0)	1/4	(外)脚柱部・上部40.0・ヨコナダ (内)右上50%・ヨコナダ	
34	南東	甕	2.5Y7/2 灰黄	密 (長石・石英含む)	良好	(15.6)	(9.9)	1/3	(外)脚柱部・上部40.0・ヨコナダ (内)右上50%・ヨコナダ	
35	NB2	小形 盃	2.5Y8/2 灰黄	密 (長石・石英含む)	やや 良好	(9.5)	(7.8)	1/4	ヨコナダ・横位ナダ	
36	南東	甕	10YR8/4 にぶい黄程	密 (長石・石英含む)	良好	7.3	8.1	完存	(外)ハケヨコナダ (内)ナダ・ヨコナダ	
37	南東	甕	7.5YR8/6 浅黄程	密 (長石・石英含む)	やや 軟	(8.4)	(6.0)	1/2	ヘラナダ・脚柱頭	
38	南東	高坏	10YR8/4 にぶい黄程	やや粗 (長石・石英含む)	良好	17.4	(6.1)	坏部 ほぼ充存	ヨコナダ・左上50%ハケ	
39	南西	高坏	7.5YR7/4 にぶい黄	やや粗 (長石・石英含む)	やや 良好	(脚部径15.6)	(8.2)	脚柱部1/4	脚柱頭・ナダ	
40	南西	高坏	5YR6/6椎	密 (長石・石英含む)	良好	(脚部径4.1)	(5.9)	脚柱部充存	(外)ヘラナダ (内)コナダ・ヘラナダ	
41	南東	甕	N4/0灰	密 (長石・石英わざかに含む)	良好	(12.4)	3.0	1/4	(外)脚柱部・ナダ (内)ロコナダ・ナダ	
42	II a	南東	坏	10E6/1 青灰	密 (長石・石英含む)	良好	(10.9)	3.2	底部1/4	(外)ヨコナダ (内)ロコナダ・ナダ
43	南東	平瓶	N7/0灰白	密 (長石・わざかに含む)	良好	-	(4.8)	肩部 ~頸部	ロコナダ	
44	南西 サブレ	甕	7.5YR7/4 にぶい黄	密 (長石・石英わざかに含む)	良好	高台径11.1	(2.0)	底部1/2	(外)ヨコナダ (内)ヘラナダ	
45	南東	蓋	10B6/1 青灰	やや密 (長石・石英含む)	良好	11.5	5.6	2/3	(外)ロコナダ・脚柱ヘラナダ (内)ロコナダ	
46	南東	蓋	N7/0灰白	密 (長石・石英含む)	良好	11.9	4.5	完存	(外)ロコナダ・脚柱ヘラナダ (内)ロコナダ	
47	南西	蓋	N6/0灰白	密 (長石・石英含む)	良好	12.1	4.3	2/3	(外)ロコナダ・脚柱ヘラナダ (内)ロコナダ	
48		蓋	5Y7/1灰白	密 (長石・石英含む)	良好	(12.0)	(4.4)	1/4	(外)脚柱ヘラクスピロコナダ (内)ロコナダ・ナダ	
49	南西 サブレ	坏	SBR1/1青	密 (長石・石英含む)	良好	10.5	4.9	完存	(外)ロコナダ・脚柱ヘラクスピロコナダ (内)ロコナダ・ナダ	
50	南西	小形 丸底	2.5Y6/2 灰黄	密	良好	(11.0)	(7.0)	1/4	(外)調整不良 (内)上部ナダ・ヨコナダ	
51	北西	小形 丸底	7.5YR6/4 にぶい種	密 (長石・石英わざかに含む)	良好	6.6	9.0	ほぼ充存	(外)コナダ・ハケ (内)上部ナダ・ヨコナダ	
52	南西 サブレ	甕	10YR7/2 にぶい黄程	やや密 (長石・石英わざかに含む)	良好	(11.1)	(10.3)	脚柱上半	(外)ロコナダ・脚柱頭・横位ナダ (内)ロコナダ・ナダ	
53	一	甕	7.5YR7/4 にぶい種	密 (石英・長石多く含む)	良好	(15.4)	(14.4)	口脚部1/4	(外)脚柱ハケ・ヨコナダ (内)模様化ハケ・横位ナダ	
54	南西	甕	7.5YR6/6盤	密	良好	脚柱頭最大14.6	(6.8)	脚部下半	(外)ハケ (内)ハケ・上部50%ナダ	
55	南西	高坏	10YR6/6 明黄垢	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	脚柱部12.6	(11.2)	脚柱部充存 脚柱部1/2	(外)脚柱ヘラナダ (内)脚柱ナダ・ナダ	
56	南東	高坏	7.5YR7/4 にぶい種	やや密 (長石・石英わざかに含む)	良好	(脚部径11.4)	(7.5)	脚柱部充存	(外)脚柱ヘラナダ・ヨコナダ (内)ヨコナダ	
57	一	高坏	5YR6/3 にぶい種	密 (石英・長石わざかに含む)	良好	(脚部径11.5)	(6.5)	脚柱部充存	ヨコナダ	
58	北東	高坏	5YR6/6椎	やや密 (長石・石英含む)	良好	脚柱部9.8	(5.8)	脚柱部充存	(外)縦位ヘラナダ・ヨコナダ (内)ヨコナダ・横位ナダ	
59	北東	高坏	7.5YR6/4 にぶい種	やや密 (長石・石英含む)	良好	脚柱部4.1	(7.2)	脚柱部充存	(外)縦位ヘナダ・ヨコナダ (内)ヨコナダ	
60	北東	高坏	5YR7/6椎	密 (長石・石英わざかに含む)	良好	脚柱部3.9	(7.8)	脚柱部充存	(外)縦位ヘケ (内)ヨコナダ	

第12表 出土遺物観察表(3)

番号	層位 遺構	地区	器種	色調	胎上	焼成	法量		焼成率	調査・備考
							口径・高径or幅径	器高(保存高)		
61	中央サブ レバ半 南辺 サブレ	高坏	7.5YR7/4 にぶい・櫛	青 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径3.4	(5.6)	脚柱部充存	(外)縦径ヘラナゲ (内)底径ヘラナゲ	
62		高坏	7.5YR8/6櫛	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径5.0	(6.0)	脚柱部上半	(外)底面・両取り (内)底面	
63		北東	10YR7/3 にぶい・黄櫛	やや密 (長石・石英わずかに含む)	やや (長石・石英多く含む)	脚柱部径5.7	(7.6)	脚柱部1/2	(外)縦径ヘラナゲ (内)コナゲ	
64	IIb	高坏	7.5YR7/4 にぶい・櫛	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部径5.0	(7.6)	脚柱部充存	(外)縦径ヘラナゲ (内)コナゲ	
65		北西	10YR7/4 にぶい・黄櫛	やや密 (長石・石英わずかに含む)	良好	脚柱部4.2	(7.1)	脚柱部充存	(外)縦径ヘラニガキ (内)底・縦径ヘラケズリ	
66		北東	SYR7/6櫛	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	脚柱部径3.9	(5.1)	脚柱部充存	(外)縦径ハゲ (内)横径ヘラナゲ	
67		南西	SYR6/6櫛	密	良好	脚柱部径3.0	(5.4)	脚柱部上半	(外)縦径江ヘラナゲ (内)底面	
68		南東	SYR7/8 櫛	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	坏底部径12.2	(8.0)	坏底部3/4	ヨコナゲ・脚柱片	
69		北東	10YR7/2 にぶい・黄櫛	やや密 (長石・石英・角閃石含む)	良好	(19.0)	(5.3)	坏底部2/3	ヨコナゲ・脚柱片	
70		中央南北 サブレ	SYR7/6櫛	密 (長石・石英含む)	やや 良好	脚柱部径4.5	(7.4)	脚柱部上半	(外)ヨウナゲ (内)ケ・ナゲ・横径ヘラケズリ	
71		北西	10YR6/3 にぶい・黄櫛	やや密 (長石・石英多く含む)	良好	脚柱部径6.7	(8.2)	脚柱部上半	(外)ナゲ (内)ケ・ナゲ・横径ヘラケズリ	
72		南東	7.5YR7/4 にぶい・櫛	青 (石英含む)	良好	底部径3.9	(13.6)	底面充存	(外)縦径ハゲ (内)上部ヨウナゲ	
73		北西	10YR7/3 にぶい・黄櫛	密 (長石・石英含む)	良好	底部径4.6	(4.2)	底部充存	(外)ヨウナゲ・脚柱片 (内)上部ヨウナゲ	

6. 平等坊・岩室北遺跡（第1次）

I. はじめに

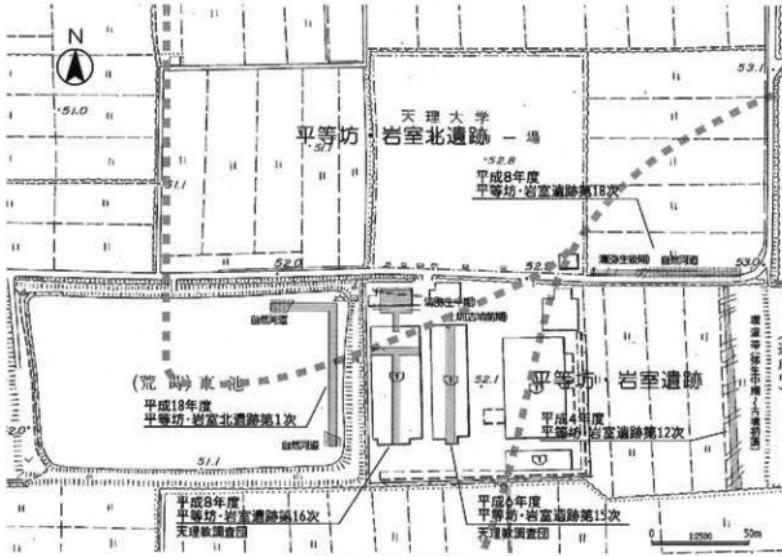
今回の調査は天理市荒町地内の荒町東池において、池底掘削工・堤体改修工などを伴う溜池改修工事が計画されたことに伴って実施した。荒町東池は東半部が平等坊・岩室北遺跡に含まれることから、該当区域の発掘調査をおこなった。平成18年11月13日に排水作業を開始し、同11月22日より掘削に入り、同12月26日にすべての作業を終了した。最終的な調査面積は430m²である。

II. 調査の経過

1. 既往の調査（第91図）

今回調査をおこなった荒町東池は平等坊・岩室北遺跡の範囲に属する。平等坊・岩室北遺跡は弥生時代の拠点集落として知られる平等坊・岩室遺跡の北西に広がる遺跡で、現行の『奈良県遺跡地図』上では遺物散布地として記載されているが、実態はこれまでほとんど明らかにされていない。

荒町東池周辺では、東側隣接地にて埋蔵文化財天理教調査団が倉庫改築に伴う調査を二度にわたって実施している（日野（編）2010；当該調査地は『奈良県遺跡地図』では平等坊・岩室北遺跡に含まれているが、天理市教育委員会では便宜的に平等坊・岩室遺跡における一連の調査の一部として取り扱い、平等坊・岩室遺跡第15次調査、第16次調査の呼称を与えている）。このうち平成6年度に実施された第15次調査では顕著な遺構が検出されていないが、平成8年度に実施された第16次調査では、東西方向に伸びる弥生時代中期の溝2条、弥生時代後期末の土坑、古墳時代前期末の溝1条が確認されている。



第91図 調査区位置図

2. 調査の経過

溜池内には調査着手以前に工事用仮設道路が設置されていたが、仮設道路外は地盤が著しく軟弱で重機の乗り入れが難しい状態であった。当初は溢構面がより良好に保存されていると想定される堤防寄りに調査区を設定する予定であったが、前述の理由により調査区の位置や大きさは仮設道路に制約され、予定より溜池内側に設定せざるを得なかった。調査区は仮設道路の外周に沿った逆し字形に配置し、幅約4m、北調査区の全長約34m、東調査区の全長約70mとなった。

III. 層序・遺構

1. 層序（第82図）

第Ⅰ層は池底堆積土および擾乱堆土である。第Ⅱ層は黒褐色砂質土である。第Ⅲ層は黄灰色砂質土でしまりが強い。第Ⅳ層は粗砂～細砂の堆積で厚さ50～70cmを測る。第Ⅴ層は暗灰色粘土を主体とする粘土層である。いずれも無遺物層であるが、第Ⅲ層以下は地山相当と考えられる。

遺憾ながら、仮設道路設置工事の際の重機による擾乱が調査区内の相当範囲に及んでいた。北調査区では全域が第Ⅴ層上面まで擾乱されており、特に北壁寄りの擾乱が著しかったため、仮設道路直下の南壁を土層観察の対象とした。東調査区も北部は第Ⅴ層上面まで擾乱が及んでいたが、南部は東壁寄りのわずかな部分が擾乱を免れていたため土層観察の対象とした。

2. 主要な遺構（第82図）

自然流路NR01

北調査区西端の第Ⅴ層上面で検出した。北東～南西方向の流路で、西側の肩は調査区内では検出できなかった。河道幅は検出面で少なくとも12m以上ある。東側の肩から続く河床は標高47.7mまで落ち込むことを確認したが、さらなる掘削は仮設道路への影響を考慮して見合わせた。このため、河道の深さは不明である。埋土に遺物は含まない。上部は全面的に擾乱を受けているため、東調査区で確認した基本層序との対応関係は不明である。

自然流路NR02

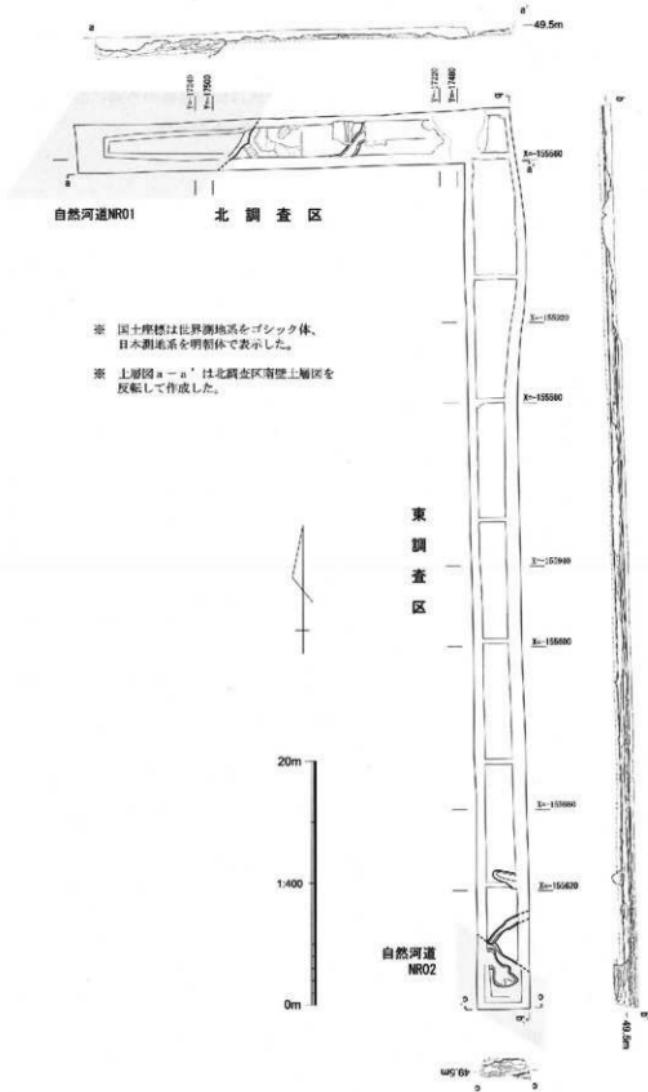
東調査区南端の第Ⅴ層上面で検出した。南東～北西方向の流路で、南側の肩は調査区内では検出できていない。河道幅は検出面で少なくとも5m以上ある。河床はしまりの強い緑灰色細砂で、検出面からの深さ約1.0mを測る。埋土に遺物は含まない。

その他

第Ⅴ層上面で、溝状の落ち込みなどを検出しているが（SX01・SX02・SX03）、いずれも埋土に遺物は含まない。

IV. おわりに

今回の調査では、当初は東側に隣接する平等坊・岩室遺跡第16次調査地で確認された溝や十坑などに掲述する遺構の検出が予想された。しかし、調査区設定位位置が仮設道路に制約されたため、遺構面を良好に残すと考えられる堤防寄りを調査することができず、より溜池内側の調査となつた。また、調査区内は広い範囲に擾乱が及んでいた。このため、本来の遺構面であった可能性がある第Ⅲ層上面



第92図 調査区平面図・土層図

以上を面的に検出することはできなかった。溜池内の大部分は、溜池築造時に削平されているものとみられる。第16次調査で確認された遺構群の広がりについては今後の課題とせざるを得ない。

第V層上面で確認した2つの自然河道については、東側の平等坊・岩室遺跡で確認されている河道群との関連が注意される。河道内から遺物が出土していないため時期は決定しがたいが、NR02については肩位から判断するとかなり古い時期のものとみられる。
(石田大輔)

[参考文献]

口野 宏(編) 2010 『平等坊・岩室遺跡 第15・16次発掘調査報告書』考古学調査研究中間報告27 埋蔵文化財 天理教調査団

図 版



調査区全景(北から)



調査区全景(南から)

図版2

平等坊・岩室遺跡（第28次）
②



調査区全景（垂直）